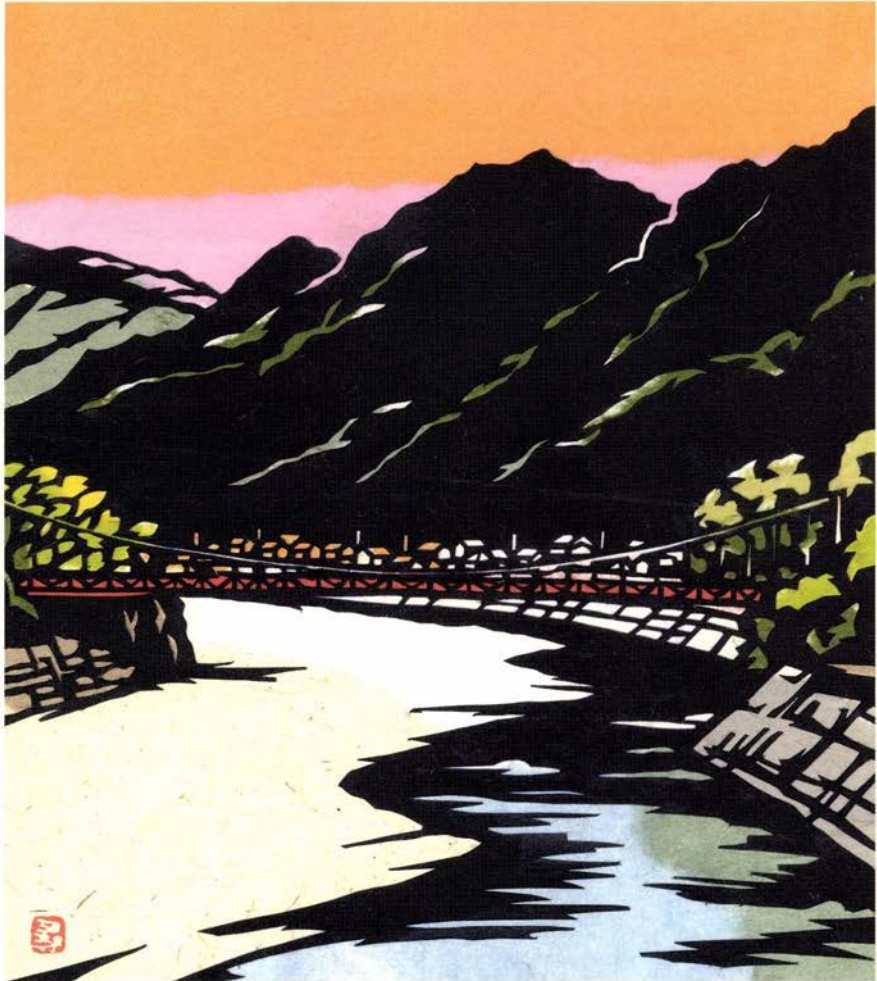


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成十九年十二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九六七号



日川協加盟

No. 967

同人特集ユーモア百句

十二月号

寒中見舞募集

○本誌平成20年2月号掲載
○締切 12月23日

川柳塔社事務所 宛

平成20年大会予告

日川協福岡大会

平成20年6月8日(日)
アクロス福岡イベントホテル

第14回川柳塔まつり

平成20年10月5日(日)
アウィーナ大阪

国民文化祭茨城大会

平成20年11月9日(日)
コミュニケーションセンター城里

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

☎530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

全没アレルギー

河内 天笑

新同人の皆さん、そして新しく誌友になられたみなさん、「ようこそ川柳塔へ」とお一人ずつ握手の手を差しのべたいと思います。川柳塔への新しい息吹を期待して止みません。ところで「私なんか駆け出しやから未だ本社句会やなんて」などと勝手に「ご自分を見縊って句会に出たがらないお方がたくさん居られます。そんな方たちに伝えたい事は「川柳を始めて間もない頃が着想の宝船みたいな時期だ」という事です。勇気を出してどんな句会に出て自分自身を発揮して下さい。人生に出会いはいくつもありますが、川柳との出会いはその人の考え方や人生観まで塗り替える程のエネルギーがあるのです。その為にも句会に参加されて仲間になって頂きたいのです。

へ全没にならない為に、没になるのはどこかに欠点があるのです。最も基本的な三つにリズム、誤字そして間違った送り仮名があげられます。また、本社句会等で選者に届けられた作品の凡そ六割ほどは次の様な理由で篩にかけられます。

これまでに詠み古されたもの
プライベートなもの

意味の伝わらないもの
ある事を報告しただけのもの

身内の自慢に類するもの

次に残った作品の中から同想句の何種類かを抽出して内容や表現力の良いもの以外は落とされます。

あらかたこんな具合で没句と入選句に振り分けられますが、惜しくも没になる例を少し挙げます。

(カルチャー教室の作品から)

北風が吠えて潤うスキー場

会見で下げる頭は禿げている

数知れず手抜き工事のビルが建ち

これらはみな少しづつ欠点があります。

北風が吠えはくほくのスキー場

欲な面三つ晒して謝罪する

どのビルも手抜き工事に見えてくる

と推敲されていけば没にはならないでしょう。

同じ時代に住む人間だから同想句の生まれるのは当然で

す。同想句で勝負するには表現がユニークでなければなりません。

せん。

新同人、新誌友の方、お互いに研鑽を重ねましょう。

自選句

わるてんといっぺん怒ったりなはれ

興奮をしたら引き吊る婦長さん

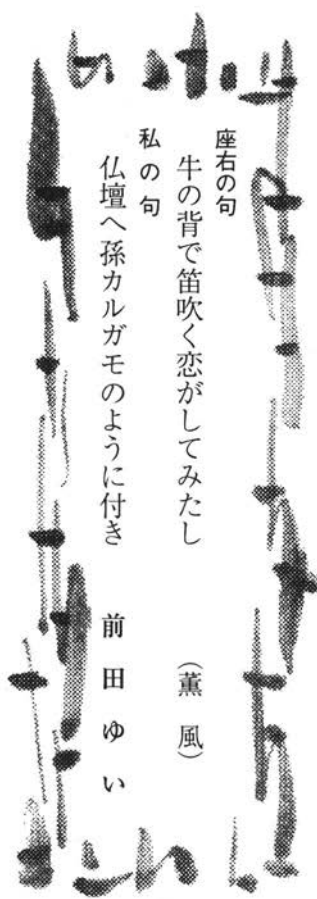
もう一寸怒らしてやる棹をさし

怒るのがとても苦手な三枚目

うつむいて聞いたらなんぼでも怒り

天笑

ク ク ク ク



座右の句

牛の背で笛吹く恋がしてみたし

(薫風)

私の句

仏壇へ孫カルガモのように付き

前田 ゆい

川柳塔 十二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「国栖」

■巻頭言 全没アレルギー

河内 天笑 …… (1)

赤い糸

波多野五楽庵 …… (2)

川柳塔 (同人吟)

河内 天笑 選 …… (4)

川柳塔の川柳讃歌 (36)

木津川 計 …… (49)

自選集

温故知新 …… (50)

水煙抄

西出楓楽選 …… (54)

愛染帖

新家完司選 …… (78)

同人特集

ユーマア百句 …… (82)

南大阪川柳会・句報500号記念吟行会を終えて

前 たもつ …… (85)

俳風柳多留 一篇研究 28

前 たもつ …… (86)

赤い糸

波多野 五楽庵

太宰治の小説『津軽』の序文に「太宰が中学四年の時に弟と青森港の棧橋で秋の風に吹かれながら赤い糸について話し合った」とある。

「国語の教師が授業中に話した事で、私たちの右足の小指に目に見えぬ赤い糸がむすばれていて、それがすると長く伸びて女のおなじ足指に結びつけられているのだ。二人がどんなに離れていてもその糸は切れないし、どんなに近づいても、たとえ往来で逢ってもその糸がこんがする事はない。そうして私達は赤い糸で結ばれた女の子を嫁にもらう事にきまっているのである。太宰はこの話を初めて聞いたときかなり興奮したと話し、今日もその話になった。「お前の将来のワイフは今の話にしろんだべな」と弟に聞いたら弟は棧橋の欄干を両手でゆり動かしてから、「庭あるいてる」とときまり悪げに答えた。大きな庭下駄をはいて、団扇を持って、月見草を眺めている少女は、いかにも似つかわしく思われた」とあった。

檸檬抄「サイン」……………鈴木公弘・西口いわゑ共選…(88)

一路集「走る」……………牧淵富喜子選…(90)

「荷物」……………樋口輝夫選…(90)

「ゴミ」……………倉益一瑤選…(91)

初歩教室「十二月」……………三宅保州…(92)

秀句鑑賞「同人吟」……………高田博泉…(94)

水煙抄……………岩崎みさ江…(96)

■エッセー(編選おそろし)……………早川清生…(97)

十一月本社句会……………(98)

各地柳壇(佳句地十選/黒田茂代)……………(102)

第22回国民文化祭・とくしま2007……………(117)

柳界展望……………(118)

十二月各地句会案内……………(120)

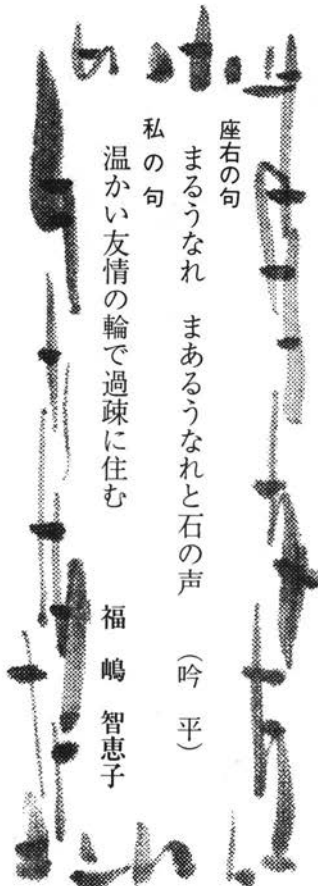
■編集後記(ひとこと/松本文子)……………希久子・尚士…(122)

座右の句

まるうなれ まあるうなれと石の声 (吟平)

私の句

温かい友情の輪で過疎に住む 福嶋 智恵子



その赤い糸はいつの間にか手の小指と小指を結んでいる。と言われて来ているが、太宰に教師が教えたと言う故事はどこかにあるに違いないと色々調べて見た。すると学習研究社の漢字源に「赤縄」(せきじょう)と言う故事を見つける事が出来た。

唐の韋固が宗城で出会った不思議な老人が男女の縁をつなぐと言う赤い縄を持っていた。その縄で夫婦の足をしばると一生夫婦の縁が切れないと巷の噂になったのだそう。赤い縄が赤い糸になり、結ぶ所も足から右足の小指になり、いつの間にか手の小指と変化はしたが結んでいる事に変化はない。

縁とは運命によって生じる人や物との関係の事であり、すべての出来事はすでに予定された定めにしたがって動き、いかなる人為的努力も運命を変える効力はもたないと言われている。

先日見た柳誌の中にも赤い糸の句があった。

約束の小指が赤い糸を恋う

小指を赤い糸で結ぶと言う前世からの約束があった。そこには日本人の淡い情緒があるが語源の赤い縄には情緒でなく強い思想があるような気がする。赤い糸と小指、赤い縄と足。思はそれぞれであるが男女の縁を表現している切っても切れない糸と縄の因縁を思わずにはいられない。



河内天笑選

大洲市 中居善信

無駄話そんななかにもお人柄

九条二項そんなに軽い訳がない

太陽を一杯食べた稲の穂よ

不倫とは易し出合ったのは運命

風便り愛しきひとよ死ぬでない

パチンコ屋のあの騒音に癒される

京都市 高島啓子

風船を手ばなし風に乘せてやる

連結器そのうちはずす筈だった

しっかりと固定してあるバーの椅子

長丁場だんだん緩む蝶結び

盲導犬育ての親を忘れない

満州へつながってゆくいわし雲

鳥取県 石谷美恵子

叱られに來たと先手を打っておく

それぞれの器で違う悩みごと

女の悩みいつもおしゃれと食べること

ずば抜けた美女もいなくて輪が丸い
恥ずかしいポーズで足の爪を切る
安心をさせたい嘘が増えてゆく

八尾市 高杉千歩

放つといふ欲しい日もあり老い気まま
深読みをしては胃の腑を重くする
カラフルな十錠人前では飲めぬ
目が合って致し方なく回り道
幸せの定義を語り秋更ける
順不同昨日につづく計の知らせ

堺市 志田千代

人形でない花嫁も泣きました
お隣の芝生もすでに枯れかかり
空き瓶をヒュウヒュウ亡き祖母を呼ぶ
水茄子の食べ頃に来たお客さん
放つとけばすんだ喧嘩を止めにくる
寝室をわけて元気になった妻

三田市 北野 哲男

早めしの癖が直らぬままの喜寿
焼トリの串横に引きコップ酒

色のよい枯葉になろう酒タバコ

割り勘のレジはみんなに釣が要り

通夜の席茶柱立った湯呑み出る

大阪は肉と言うたら牛のこと

大阪市 谷口 義

追伸は一行平行線の道

神様が通ったらしい朝の道

血相を変えて走った道がある

道連れは外反母趾の靴を履き

駅までの道に靴屋が二軒ある

どの道を行っても海に出てしまう

高知県 赤川 菊野

天国に届くケータイあれば買う

健康で食べていければそれで良い

目立たぬが敵に回せば怖い人

チョイ悪が案外もてるネオン街

人間をロマンチックにする夕日

アングルを変えると此の世は理想郷

出雲市 小豆澤 歌子

風切って湖岸電車も秋の中

退屈で風を手招きする芒

飲み込んで辛い言葉が溶けていく

許されて止った時計動きだす
運命線とところどころに輝がある
水飲んで弱気なバラが活きてくる

静岡県 藺田 漠 杏

毛針まで造って父はやまめ追う

薄の穂一番似合う丸い月

かずら橋揺るるに任せ紅葉谷

美食家の舌を唸らす塩加減

名器には盛るお料理が難かしい

丹念な手作り煎餅炭に凝り

堺市 齋藤 さくら

豊作を喜ぶように稲穂垂れ

秋晴れにいそいそ卵焼いている

おもしろい話聞いたときぐりに来

赤福の暖簾が泣いている偽装

新しい携帯使いこなせない

この年で素直になれる友が居り

鳥取市 岩崎 みさ江

生きる糧に少しばかりの自尊心

鈍感力を味方に壁を乗り越える

哀しみの深さへ浮輪いだいた

孫の中に生きるあなたのDNA

衣食住なにが不足の物思い

思い出の道を辿れば童歌

松江市 津川紫晃

につこりが堪忍袋ゆるませる
裏切りはないのでしょいか澄んだ水
保護色をぬれば私が消えてゆく
おはようと夫婦茶碗が呼んでいる
耳だけは貸したが縦に振らぬ首
人柄はどこに座しても光ってる

羽曳野市 徳山みつこ

幸運の雲にふんわり囲まれる
国境はいらぬボクは雲である
金木犀ラブストーリー組み立てる
食欲の秋へ値上げの揃い踏み
MRI受けてごらんよ議事堂も
鈴虫の卵と来年を誓う

交野市 山川日出子

十月一日心機一転ポストたち
立ち往生しないでくれポストくん
パソコンに故郷を写しなつかしむ
遠足にア行ハ行の笑い声
芒だけ招いてくれる無人駅
来年もまた着られるか夏の服

大阪市 大川桃花

良い方にとって悦ぶことにする
今はただ地球の怒り鎮めたい
腹立てぬ夫に腹を立てている

売場にはなるべく行かぬお菓子好き
携帯を切って浮いてる露天の湯
忘れたい傷を他人は知りたがる

倉吉市 松本よしえ

掘る時は手伝いが来る甘藷づくり
こんなにも飲んだか缶の収集日
菩提寺の鐘の音透る朝の冷え
遠く来た子に連れられて回る寿司
コンビニで夜半うろうろしなさんな
限界に挑む宇宙のドッキング

東かがわ市 川崎ひかり

生きるとはまさかまさかのおまけつき
万歩計ときどきさぼりモーニング
要検査チチ口虫にも涙する
嘘洗う手からあふれる黒い汁
失なったもののひとつに永久歯
母さんの旅行近所へ言いふらす

鳥取県 山下節子

ヤジロー母は支点で舵をとる
生きること生かされること介護する
母病んでいじらしいほど手伝う子
ポケットが鞆がわりではちこぼる
鳴り砂をたしかめたくて散歩する
予習した先入観がじゃまをする

高知市 小川 てるみ

一途さを嘗めてあげたい彼岸花
やれば出来る自分が少し好きになる
詐欺に遭う人はよっぽど欲深い
同情はしても身代りなど出来ぬ
駅弁祭り旅の気分は味わえず

高知県 小澤 幸泉

故里はただ一本の白い道
底知れぬ地球のなげき届かない
故里に積りつもった母の愚痴
ひたむきに未完一章残し置く
残り火を寄りそうようにいとおしむ

唐津市 坂本 蜂朗

自己評価ではライバルの遥か上
職場ではゴミ家庭では粗大ゴミ
頬染めて挨拶こんな日もあった
妻の愚痴聞く屑籠の菓子袋
保管する妻処分するのは私

唐津市 宗 水笑

少しだけ葉っぱが欲しい彼岸花
神前の鈴を鳴らして宝くじ
駅裏に疲れた顔の古い師
六法と神の正義が噛み合わず
プロ野球済んで茶の間に秋の風

唐津市 市丸 晴翠

日の出より入り日に魅入る歳となる
意義不明の連休ばかり増える秋
ドッコイシヨにスイッチオンで動く膝
セーラー服が包む原石いざ磨け
しがらみを越えた介護に手を合わす

唐津市 山口 高明

脚絆を巻いて早立ち遍路旅
国民のためだだなんて三分ほど
身を飾るわりにおんなの掃除下手
秀才と自負するおとこ下着ドロ
草笛が上手に吹ける転校児

唐津市 井上 勝視

残いくら自動引き落しの命
牛歩でも丸く焦らず生きている
本物の絆血じゃないカネじゃない
踊ってるこのてのひらは俺の手だ
人に病み人に癒やされ生かされる

唐津市 樋口 輝夫

賞味期限切れて顔出す古い傷
傷ついて野獣になった春の猫
かすり傷ぐらいで泣くなと叱られる
大喧嘩でも古傷にやさわらない
掘削機無い世に洞門開けた僧

熊本市 永田 俊子

砂の情け信じて亀は卵産む
鏡から見えぬ埃を叩かれる
お互いさまですを嬉しく聞く卒寿
想定外でした老いのタクシー代
仕様がな一人ぐらしのあれやこれ

熊本市 高野 宵草

営業味もため医院にめぐり会う
こればかりの善意が泣かす不幸せ
一年の世話嬉しげに花が咲く
ポランティアダイヤのような汗キラリ
無条件に友を信じて居れる幸

熊本市 岩切 康子

東北の旅は寒かる荷が嵩む
虫干しで本物に会う運の良さ
黒嫌い友禅染は別と買う
入院へ覚悟の胸を落着かす
安静の大事を意識して早寝

シドニー 坂上 のり子

頭の隅に眠る言葉が引き出せぬ
目を閉じて心の景色探つて
詩の中にボツと入れたいような女
カラフルな人々と手をつなぐ
もし花に心があれば可哀そう

砂川市 大橋 政良

四面楚歌すすきがおいでおいで
次の手を考えている現在地
シャボン玉うまれて消えて夢がある
一喜一憂並ぶ竿にも車間距離
掛け違うボタンの裏に嘘がある

弘前市 福士 慕情

紅葉がはじまりコノハヤマメ釣れ
運の良い山女だ今日は皆放す
リリースへ白子放出するヤマメ
大物も惜しいが川の瀬に返す
山の湯で今年の釣りの汗ながす

弘前市 今 愁女

猛暑はいずこ電気毛布の世話になり
蟬聴かずトンボも見ずに去った夏
切り変わる四季にせかせか背な押され
柿落葉あか黄みどりと多彩なり
梟の啼いて夜更けの寒い闇

弘前市 高瀬 霜石

奥さんが大体エライ偉人伝
鉛筆を握るとすぐに眠くなる
ぱっくりと逝きたいなんてそりゃあ無理
煙草吸うひと友達にいたくない
天涯孤独花には花の自負がある

弘前市 高橋 岳水

複雑な気分で受けるシニア券

忘れてはならぬならぬと置き忘れ

後手後手に回る政府の危機管理

笑わせている快感に酔う高座

満月に祝福されて恋すすむ

弘前市 櫻庭 順風

学園からひきずりおろす無理無体

多勢からいきなり誰か指名され

生け贄にするような不気味さ募る

もはや絵を描く刻はそう残されぬ

自己犠牲の美しい響き重かった

弘前市 須郷 井蛙

満腹のはずがフルーツ入る腹

賽銭も五円じゃ神も振り向かず

秀吉の力を示す城の石

生き甲斐を孫からもらう電話口

ジグザグなヘアピン続く観光地

弘前市 岡本 花匠

小突かれて訝が語る終戦譜

光琳の着物のみやび歓喜の瞳

筋交いの前向きに生き試される

雪と生き夢追うロマン遠い春

溜飲を下げた思いの師走酒

黒石市 佐藤 古拙

古書を買う伏字だらけの多喜二集

抜くことを諦め白髪染めを買う

肩書がとれて気儘なベレー帽

縄のれんくぐれば軽い風になる

声かけてあどけない子に逃げられる

黒石市 相馬 一花

芯のない男を好きな女郎蜘蛛

レントゲン曇り主治医が眉ひそめ

消費税つかぬ空気を深く吸う

金借りた人が会っても知らんぶり

ばったりと遭えばクマにも自衛策

十和田市 阿部 進

試食ではとてもおいしい味でした

お袋の味コンビニで買ってくる

記念日を作って妻とくみ交わし

若かったあの頃怖いものはない

ピッタリのサイズで柄が気に入らぬ

平川市 小寺 花峯

角ばった箱から愚痴を掘り起こす

仏壇の明かり二次会のライター

煩惱は短く切った花鉢

人の字が倒れてしまう独り酒

ボウダラの笑いが続くヤマセ吹く

さいたま市 八田 敏

妻逝きて生きゆく意欲まだ湧かず
八十過ぎて再出発のウォーキング
ボランテア止めて我が家の花づくり
介護なし天気よき日は花が待つ
頸椎症手先痺れて字があわれ

さいたま市 星 野 育 子

近況は楽しいことを書いておく
丸文字も気持ち伝わる見舞状
虎の子に羽根が生えて行ったり
皆はみ出て座るソバ屋の座布団
好きな人の好きな曲が好きになる

日高市 根 岸 方 子

かわせみもあいさつに来る散歩道
趣味の会差し入れをする甘いもの
夢描く画布は夫のプレゼント
口紅を変え逆境に立ち向う
カラオケはいつもいつものひばり節

柏市 永 峰 宣 子

外来種趣のない虫の声
セプテンバー虫の声にも秋の色
善人の顔で詐欺師が判求め
世界平和邪魔になつて核兵器
地震へは敬遠したいノッポビル

東京都 長谷川 康 子

ママで金北京の快挙待っている
スーパールの壁で子どもの絵画展
居眠りのハッと気がつく降りる駅
冷蔵庫さらえて夕食のメニュー
会場の予約ぎりぎり滑り込み

東京都 清 原 悦 子

まな板の角で切つて唐辛子
真夏日の陽を忘れよう今は冬
地球儀であつという間の世界旅
リタイア後涙腺なぜか緩くなり
散歩道追い抜かれても気にしない

東京都 岸 野 あやめ

今年ほど年齢が気になる年はない(誕生日に)
無料バス皮膚科内科の綱渡り
通帳に踏み絵の跡の二つ三つ
少子国曾孫抱くのはあきらめる
街行けば英語ローマ字韓国語

東京都 小 川 賀 世 子

すぐ食べる柿さえ器量よしを買う
生き下手だろうとも狡いのは嫌い
うつぶんを溜めて風船こわれそう
マイバッグ縫ってせつせと子に送る
五百羅漢どれも貴方に見えてくる

国分寺市 野崎 勝

悲しみを笑って馬鹿になつてみる
孫たちの笑顔見たくて土産買う
菊の花咲くまで庭も一休み
虫の声蟬を追い遣り秋を呼ぶ
パソコンが出来る猿には勝っている

横浜小 野 句多留

いける口と聞いて振る舞う昼の酒
痴話喧嘩お互いさまで締めくくる
預金残なくなるまでの貧乏性
人と会う日のキャンセルは残酷だ
相撲界不祥続きが御し難い

横浜小 菊地 政 勝

餌付けした猫が家族の顔で棲み
油断せず聞いて居ります褒め言葉
ボランテア悲しい顔はせぬように
アンコールされた音痴が悪びれず
謙遜へ相槌打っていた不覚

富山市 島 ひかる

差し出した傘に縫った手の温み
中辺路と小辺路の岐路にある石碑
登山用品買う年金を惜しまない
山小屋が見え登山靴早くなり
遭難者担いだはなし疼く胸

可児市 鶴留 百合

連休のあとドリンクで出勤し
バーゲンに正価で買った服見つけ
ドタバタとビリーと踊るお風呂前
指定券隣は知らぬお兄さん
シャンプーの抜け毛我が身へもう一度

可児市 板山 まみ子

奈良に行く脚は雨など厭わない
角切られ手持無沙汰の秋の鹿
大仏と話してみたいお賽銭
雰囲気も料金のうち名ホテル
良い人は文句を言わぬ人らしい

犬山市 金子 美千代

秋刀魚への礼儀わたくまで食べつくす
神様もきつと気紛れ運不運
本音でもそこまで言うかと怖くなる
一発で蚊をやっつけて気分晴れ
二万歩も歩けた古都へ手を合わす

犬山市 吉田 幸子

底のない愛に自信というおまけ
コントロール無理かと笑う皮下脂肪
格好の連れ合い話題事欠かぬ
ポイ捨てが減ったと思う奉仕の日
好奇心まだ旺盛な母の癖

大山市 関 本 かつ子

京都市 榑 本 宏 子

ゆつくりとお腹を撫でる医者で混み
ハッケヨイ土俵の外が騒がしい
全没を洗い流して風呂の中

日付など見ない赤福信じ切り

イベントが追いかけて来る神無月

尾張旭市 三 浦 き ぬ

殺生もやむをえません庭の梅

戒名はすつきり短い方がいい

葬式に来てねと先に逝った友

よくもまあ集りましたガラクタよ

何一つ威張れるものを持ってない

愛知県 早 川 遡 行

あれそれで分かる夫婦になりました

失言の無い大臣で詰まらない

この会社まだ灰皿が置いてある

左手を添えた握手に騙される

影法師へマしないかと従いてくる

京都市 西 村 益 子

文句言う化石を一人飼っている

溜まるばかりで消えそうもないしこり

十月に桜咲いてる散歩道

別れてたら今頃きつと翔んでいる

ぶつつんと言われ続けてまだ夫婦

秋冷に軽い布団で目が覚める

もしもして元氣加減がわかる友

ハンカチはと出かけにいつも母が聞く

夏に着た服がかかったまま初冬

タイムスリップ石見銀山野の仏

京都市 三 宅 満 子

猛暑のせいサボッタつけがどつとくる

幸せは手のひらに乗るだけで良い

指の隙間閉めて幸せ漏らさない

見せて来た父の背中が小さくなる

死亡記事で功績を知る著名人

亀岡市 井 上 森 生

不摂生これこそ我が身へのいじめ

一步でも前進したい古希の息

フィクションも入れ健かに若返る

湯上りはオーラも放つ佳い気分

吹っ切れば古希悠々と新天地

長岡京市 山 田 葉 子

定年後ふたりで立った台所

そっとしておいたらしこり消えている

痛み分けしてから肩が凝っている

思い出に浸り化石になってゆく

人間だから黙って耐えたことがある

大阪市 古今堂 蕉子

携帯に闇の仕事という闇が
子のピンチ聞く耳やつと退化した
怪談より恐いぞ斧で父殺す
笑顔良しとりえはそれで十分だ
失せ物を捜すロボット買いたいな

大阪市 池上清治

ハンドルは握れぬくせに口は出し
健康を失うまいとよく歩き
携帯は魔法みたいな使い道
値打ちでは妻は空気の次くらい
ランチ付き招待服を買わされる

大阪市 鶴田遠野

フルムーンハートの錆をとつてくれ
血税を吸った自覚が無い社保庁
落としどこふまえ反論ぶつつける
順不同とりあえず良い人が逝き
暴言の罪か心に痣ができ

大阪市 前 たもつ

絵手紙の札状うれしよい日和
霊長を嘲るように鳥鳴く
猛暑などすっかり忘れ衣替え
公園の猫まるまるとよい街だ
目を閉じて黄金波うつ千枚田

大阪市 森田明子

他人とは思えぬ日向はこの亀
ごしごしと風呂で落としている偽善
踊らねば心に澱が降り積もる
好きだから都合の悪い日などない
好物を食べれば消えるほどのウツ

大阪市 井丸昌紀

立泳ぎしつつ世間を斜に見る
皮膚呼吸上手な奴が生き残る
争いを避けようとして争いに
五百羅漢僕に似たのを撫でておく
狙い所間違えいつも空回り

大阪市 川原章久

通せんぼそうやカードの期限切れ
テレビ半分コックリが後の半分で
割箸が出ると食欲急に湧く
折り込みが主客で入る日曜日
当ても無くミナミへブラリ赤いシャツ

大阪市 岩崎玲子

暑さつづきこんなに待った秋はなし
秋の月兎と遊ぶ亡母が居る
秋の夜に師の書サインをなぞつて
秋の夜は月を肴にひとり酒
コスモスに真似て私も風まかせ

大阪市 川 端 一 步

子どもから感動貰う運動会
秋深しイブモンタンが懐かしい
母百句できたらしよう墓参り
弥勒菩薩と同じ空気を吸ってきた
夢追うて夜の食事は慎ましい

大阪市 奥 村 五 月

気いつけや祖母の下着も盗まれる
年金日妻と豪華にラーメン屋
俺の愚痴相性が合う嫁姑
包装は新聞が合う朝の市
試着室それから妻はもの言わぬ

大阪市 岡 本 久 峰

日本のプロペラを待つ青い空
外国の松茸ご飯食べ残す
死ぬまでは動いてほしい五指と足
人手不足就職難は語り草
秋たけなわ松茸山をなつかしむ

大阪市 岩 崎 公 誠

口喧嘩ドローゲームを繰り返す
裏ガネの影はゆらゆら透けて見え
結論が出ないと時間稼いでる
習わない経を器用にパート僧
間引き菜にかつおたつぷり酒のあて

大阪市 福 岡 末 吉

然りげなさ装い焦る我悲し
無期限の賞味保持してふたり旅
人の世は行きつ戻りつ休みつつ
浅漬けをつい褒めたのが腐れ縁
国策に先立つ党の頭かず

大阪市 近 藤 正

心配がさらに心配よぶ老後
母に嘘ついた幼い頃の傷
くらし向き妻に頼ってマイペース
血の巡り金の回りが鈍くなり
環境も家も薄氷踏む思い

大阪市 中 村 叡 子

寝たはずの夫はたばた団扇風
食細い夫の食事思案する
困ります何でもいいと言う返事
孫の怪我唾をつけたら嫌がられ
一言で元に返らぬ風が吹き

大阪市 中 村 れんげ

てっぺんの一つの柿に夕映える
亥を送り後振り向かず子を迎う
クラス会目の錯覚か若い友
反戦の歌聞きながらねぎ刻む
千羽鶴千羽が願う平和の日

大阪市 板東倫子

お月さまかぐやが尋ねて行きました
月見れば哀し満月も月蝕も

心技体 どこへ行つたか相撲道

風水の財布に金が貯まらない

昨日も今日もそして明日もサプライズ

大阪市 川久保睦子

炎天に耐えて育つた稲の丈

人間不信さりげなく爪を研ぐ

レモンひとふり今日美しく咲くために

人の輪に入ると自分見えてくる

祖父の絵に孫が画きたす泥鰌髭

大阪市 小糸昭子

しゃあないな調法でした大阪弁

喧嘩して朝も食わずに何処へ行く

白蟻よ我が家にだけは住まないで

欲という字がこの子に不足しています

おいしくて楽しいお酒秋夜長

大阪市 小泉ひさ乃

絵画展午後のひととき主婦忘れ

ペンとメモ余生の暇を埋めている

不都合はとんちんかんの返事する

咄家の羽織脱ぐのも芸のうち

シンブルも派手も似合つて子のお古

大阪市 津村志華子

きれいだと花も褒めれば咲き誇る

健康な湯気です朝のお味噌汁

幸せになりたいなあとだんご虫

まだ意地が少しあるから竹を踏む

波立てぬ氣くばりもして同居する

大阪市 神夏磯典子

まだ生きる氣力へ体スス払い

紅葉は地を染め無駄に終わらない

大臣の子が大臣になりはつた

ちっぽけなゴマ家の中いじい

少し呆けドンドンパッパ楽しもう

大阪市 津守なぎさ

食欲の秋を目差した歯の治療

猛暑去り目の色変える毛皮ショー

蒜山で牛乳試飲宅配中

筋力をつける散歩で立ち話

名月と遊ぶ二人の観覧車

大阪市 松尾柳右子

階段を踏みはずしての日々異変

夕刻の蚊に咬まれてる庭いじり

孫来たと賑やかな声お隣さん

冷蔵庫だよりの日々に感謝する

我を折つて夫婦円満五十年

大阪市 小谷 集 一

カーナビに案内させる一人旅
いい人をやめると肩の荷が下りる
メイキヤップ取った笑顔がやわらかい
百均の眼鏡一番よく似合う
生きている意味考えたことがない

大阪市 渡 部 さと美

テレビ写り上手い韓国大統領
將軍さまお腹に毒とガス詰めて
美しい地球写してかぐや姫
店じまい新店やはり食べ物屋
カレンダー忙しかったねありがとう

大阪市 平 嶋 美智子

だだこねる脳を宥めるチョコ一つ
おいしい水湧いて先祖の墓がある
間のびした顔も美人に活気だち
この思い炎孕んでいるようだ
極楽やないかと思う湯の加減

大阪市 中 井 萌

ライバルと競いながらも無二の友
古いメモ電話番号だれのもの
世渡りの綾も他人に教えられ
宵闇にコンビニだけが昼の顔
美化されて善人となる過去の人

大阪市 西 川 更 紗

人前で泣かぬ女になりました
立ち直るチャンス自力で掴むべし
雑念を捨ててふんわりケーキ焼き
姑が来る気配に掃除先にする
診察を待つてる間風邪もらう

大阪市 星 野 きらり

泣き笑い今日も独りの絵を書いて
生き甲斐を噛みしめ登る八十路坂
辛棒という字を抱いて来た昭和
晴マーク老いも頑張るたすきがけ
仲秋の月と聞いているシューベルト

大阪市 熊 代 菜 月

盆踊り弾む心で娘の着物
体重を少し土産に夏がゆく
だんじりの上で男は蝶になる
福の神道に迷ってまだ来ない
もうとまだ使い分けてる喜寿の秋

大阪市 榎 本 日 の 出

松茸の味を忘れんように買う
青竹を踏んでも膝は油ざれ
誕生日待ってないのにやってきた
自作自演おんなの道もまた楽し
震度六手抜き工事の住み心地

大阪市 榎本舞夢

老い先を読める眼鏡が欲しいです

読むことの幸せもらう点字本

気まぐれに吐いた言葉が身の破滅

亡き人の姿偲んで見るビデオ

他人故協力出来るボランティア

大阪市 升成好

祝福を手荒に受けるサヨナラ打

反骨の血が邪魔をする多数決

カラスから飽食の世をつつかれる

窯の火をくぐって白磁透きとおる

今度こそ今度こそはと籤の列

池田市 栗田久子

くつきりとポインセチアはくれないに

しまい弘法善人たちの列つづく

計のハガキ確かめ年賀したためる

百八つ煩惱はらうそばを食う

新しい年へ向いてる好奇心

和泉市 西岡洛醉

登り坂吉という日の陽が暮れる

一日のドラマ大安籤を引く

不貞寝する妻の謀反が真昼間

玉手箱授かり孫は歩を運ぶ

幾許の余生に遠い老いの知恵

和泉市 横山捷也

コンバインに感謝新米炊き上げる

背かれた事を少しは書く日記

娘が秘密持っていそうな長電話

足音を消して名月虫の声

厄除けのつもりで介護保険料

泉佐野市 山本蛙城

地震予告聞いて何かが出来るかな

雑巾は買うものと言う子の不幸

おバカさんぶっちゃけ楽に生きてます

核の国横目にかくや月旅行

満月へ遠吠えしたい税その他

茨木市 藤井正雄

正義感負けを承知で栗拾う

いい出合い同じ訛りのコップ酒

お買い得品へ献立変えました

大胆なカット庭師は芸術家

豪快に三振明日を期待する

大阪狭山市 矢野梓

なつかしさに邪魔をされつつ整理する

正直に答え気まずくしてしまい

手も足もしっかり動く有り難さ

夕暮れが早いまごまご出来ぬ秋

気がかりの父の忌終えて茜雲

交野市 森 本 弘 風

俺様に鈍感力と言う味方

保険料せめてモトはと妻と僕

蚊帳の外勝手にしやがれ総裁選

ところどころ判読をする古日記

ご無沙汰を詫びて草抜く墓参り

交野市 田 岡 九 好

教え子が禿げてわたしはまだ少し

近付けばお化けの顔もたあいなし

美しい国も東の間虹と消え

知り合いの車が会釈して走る

久々に会ってそのまま別れなり

河内長野市 山 岡 富美子

通り雨一幕物の恋終わる

年金の欄に翼が引つ掛かる

老老の介護長寿の落とし穴

仲裁に行つて荷物を背負い込む

付き合えば美点が見えるかごめの輪

河内長野市 坂 上 淳 司

青テント標的にする悲しい世

戦後六十一年舵切った日本丸

子ら巣立ち半分ほどが開かずの間

煙草やめ酒やめてから間が持てず

マネキンに着せると残り皆売れた

河内長野市 村 上 直 樹

ピンボケが空気とます親爺ギヤグ

宵闇の時事放談はガード下

ちよい太が丈夫と医者に宥められ

償いは年金つきで白寿まで

地獄でも中流の上狙います

河内長野市 井 上 喜 醉

友情の絆で人生心満つ

優勝は騒ぐと逃げて行くらしい

戦なき平和な地球土の夢

満月の墓場で虫のコンサート

晩秋の最後を飾る山が燃え

河内長野市 水 谷 正 子

離婚等露も思わず五十年

逆らつた揚句の果ての不眠症

ハンドルを大きく回しデイケアへ

判ります古田監督男泣き

双葉山不肖の弟子に泣いている

河内長野市 植 村 喜 代

時期来ると忘れないのか彼岸花

会いたい人沢山あつて年賀だけ

人間によい指導者がない時代

彼岸済み決まつたように涼しなる

淋しいね悪いことする人ばかり

岸和田市 井伊東吉

ひたい汗でも足元はブーツの娘

岸和田市 森元ふみよ

秋味覚種類の増えた果物屋

国技泣く閉鎖社会の大相撲

再開の国会先ずは低姿勢

先人の苦勞を知った塔まつり

岸和田市 堤 植代

秋風に心なごんで土いじり

こんなにも雨を待たせる大自然

朝まだき祭太鼓が呼んでいる

チビッコの祭姿はほほえまし

計算もインドに学ぶこととなり

岸和田市 土橋房枝

脱ぐまでは紳士淑女の七五三

お茶席が流儀流儀で息苦し

ランチ族とこも女の強いこと

マイペース守り切れずに惑わされ

インシャルはもう消えてますエンゲージ

岸和田市 雪本珠子

星屑がダイヤモンドに見えて来る

焼け棒杭にやさしい風がまといつく

敬老会仲間入りする歳になり

わたくしのハンドル近道ばかりする

木洩れ日のシャワーでわたし浄化され

幽玄の世界に魂奪われて

口紅を剥がさぬように秋を食べ

繕って宥めて遣う御老体

長生きの秘密本読む古稀の爺

ライバルを意識しながら牙を研ぐ

岸和田市 岩佐ダン吉

冴える月私に深く悔いること

足をまず出せと母さん口癖に

働ける腕ハローワークで撫でてやる

年金の話に心渴ききる

うっかりの振りして本音言うてみる

岸和田市 原 さよ子

野は秋に歩け歩けとすすきの穂

家族みな揃えば母の声弾む

愚痴不満みんな包んだ母の胸

言にくい事をずばりと言う若さ

若者がこんなにいるか秋祭り

堺市 柿花和夫

絶滅の危惧種なんだよ人間も

いつからか甘い嘘にも飢えている

百点を妻にもらった休肝日

草むしりすれば逃げてく腹の虫

しみじみと飲んでしみじみ歌う父

堺市石堂潤子

殿様の顔して夫お茶を飲む
雑草の自由を奪い家が建ち
お人好しの見本と言われそう思う
来客のベルで終った長電話
落暉燦燦余計な事は考えず

堺市山本半銭

頼りになるおばさんが居る隣組
軒に雀嬉しい事のありそうな
残照に吾が影のびて喜寿の道
来年の約束はない祭笛
長袖へ総入れ替えもまた楽し

堺市和田つづや

子に返す親から受けたいくしき
途中下車木犀の香に出来心
思いきり泣く氣の海が風いでいる
箸二本重いのちを支えてる
強がりを通しきれない泣き上戸

堺市矢倉五月

助手席で信じてますと舟を漕ぐ
欠席を案じた電話かかる夜
童謡の良さが解かってきて大人
建売のひとつ残った車道側
意味もなく日暮の早さ寂しがる

堺市村上玄也

泳げないけれどビキニは持っている
嗚呼頑固昭和一桁には勝てぬ
威張ってる父だが母に頼りきり
横文字をやたら使いたがる御仁
そぐわない例え話が誤解生み

堺市加島由一

財布全開子が恋人を連れてくる
来るときも去るときも泣く島の医者
正月は派手にやりたい宝くじ
異常氣象妻の眉間に見て散歩
子は鏡親孝行は期待せぬ

堺市宮本かりん

今日もまた会える顔あり朝のドア
鈍くさい頭へシヨック与えねば
わくわくと待ってた返事をつけない
流しきれない過去が時々目をさます
やさしい手憎まれ口を言いながら

堺市西村りつえ

エヘヘへへ苦虫笑う地酒くる
美味し秋満腹しても痩せている
相談に顔色隠す厚化粧
ハイヒール2センチ削る関節炎
人情もテレビも薄くなりました

堺市奥 時雄

バーボンを一気に呷りむせている
身命を賭して今夜も酒を飲む
歌詞カードあっても校歌出てこない
カツラだと言われ気づいたふりをする
セクハラを言わぬ時代で助かった

堺市源田 八千代

だんじりに知恵出し金出し力出し
総力でだんじり動く感無量
だんじりの怖さ楽しむやり回し
三連休みなだんじりに駆り出され
嬢天下のよりあいらしい隣組

堺市近藤 豊子

柿の実の半分あかく夏終わる
秋なかば栗もみかんも重そうだ
ふかしいも湯気も半分ずつわかる
新月がふかい闇から生まれでた
かなうなら月夜の海へ銀の權

四條畷市 吉岡 修

魂を掴まれたまま第九聞く
出来ない子もうちよつとの子みない子
戦する神もジングルベル鳴らす
褒めて褒めその気にさせてしごかれる
鼻ピアスすると空気がうまいかね

吹田市 穴吹 尚士

お愛想は言わぬ屋台の芋焼酎
結果論ばかりテレビの文化人
勢いの盛んな方へにじり寄り
誘惑に乗った方にも罪はある
テレビでは今日も誰かが詫びている

吹田市 野下 之男

人様の不幸で運を拾うてる
大食いが売り物になる世紀末
父さんが安眠出来ぬ訳作り
あの妻が電話に向かいお辞儀する
ペンギンが人に教える親の愛

吹田市 太田 昭

熱い茶に今日一日を癒される
軒先を借りて秋刀魚の匂い嗅ぐ
美辞麗句ならべるだけで式を終え
老い耄れて惚れた女が一人いる
光らない玉を磨いている余生

吹田市 瀬戸 まさよ

雀にも敏い鈍いが見える窓
フラガールフラより貧に泣くわたし
ほほえんでカメラに向かう脚線美
料理にも茗荷大葉の存在感
慰めにまあお一つと盃を出す

吹田市 須磨活恵

台本のない人生はドラマなり
生きたとは喜怒哀楽のくり返し
はらわたの奥まで覗く内視鏡
老化現象目から耳から攻めて来る
脳トレで少し老化に意地を見せ

吹田市 早川清生

裏面史に庶民おおもぬ踊る役
女とは母艦戦艦潜航艇
休みますと書けば新聞休めます
今あるは亡父欺いてからの運
無事退院散らけたままの俺の部屋

吹田市 大谷篤子

秋晴れに今朝も大きく深呼吸
美人画に似る瓢箪の腰あたり
わくわくと今朝も家族にサラダ盛る
ポケットの底に洗濯されたメモ
朗報は電車の音も優しくて

吹田市 木下敏子

秋の日を刻んで弾む赤い靴
健康でいたいと歩幅広くする
ややこしい事は言わずに笑わせる
同窓会みな平等に老けた顔
人生のところどころにある窪み

吹田市 山本希久子

押し入れにとにかくしまう十二月
前頭葉に無駄な努力をさせている
避けている方へ方へと転ぶ毬
助手席の命ずるままのハンドルだ
日曜日魔女も昼寝をしています

箕面市 広島巴子

温暖化月下美人が咲く寒露
寒暖の差が激しくて迷う服
友からの揃いのペンに励まされ
池の中山が逆さに浮いている
牡丹鍋ひかえた亥年あとわずか

高石市 浅野房子

貧乏くじ引いて格差に泣いている
カーテンの内側だけのテリトリ（入院）
無理するな無理をしないでどう生きる
宴果てあとは一人の巣に帰る
故里に父母もいませず風ばかり

高槻市 西谷治三郎

叱ること出来ぬ教師になり下がり
人生を便座と一緒に思案する
正常値出るまで計る血圧計
ポマードを塗ってた頃が華だった
タバコ屋の看板娘も八十路

高槻市 佐 甲 昭 二

狙われるものがないから気が楽だ

姑と嫁とがレシビ競い合う

いじめられた上司を酒でねじ伏せる

運だけで片付けられぬ自負がある

待ち合わせ場所の本屋が消えた街

高槻市 富 田 美 義

がむしやらに生きた証の飯茶碗

宴を抜け闇夜の合図咳一つ

ひと言が胸に刺さった疳の虫

たつぷりと泣いて明日のころ決め

握る手が揺れて一つの命閉じ(きよし会長弔辞)

高槻市 大 崎 侑 子

展示会自信の作を隅に見る

籤引きで良いのが当り黙ってる

息止めて魔の踏切りを走り抜け

理屈抜き好いたお方に首ったけ

比べれば落ちこむだけと割り切って

高槻市 左右田 泰 雄

ひら仮名で書くたびつたりするおでん

筆太のみつをの文字に励まされ

義理一つすませてからの飲み直し

反省の弁も聞かれぬさめた顔

人の気も知らず無視する罪つくり

高槻市 執行 稲 子

苦も楽も共に仲良し古時計

届かない想い一方通行で

ぼろ整理孫の手だけは捨てられぬ

縄暖簾覗きの趣味で一寸寄り

ばったりの出合いその節はお詫び

高槻市 峯 村 勲 弘

目覚しの代りに鳥のチュンチュンチュン

ハンドルを切って落ち葉に道譲る

風を読み帰る日探る渡り鳥

窓際で吸った空気をバネにする

乗ると直ぐ手は携帯へ終電車

高槻市 井 上 照 子

電話では元氣からだは動かない

募金箱善意の音が小さくて

身ごもった孫に女の強さ説く

いつの間に萎えたか手足細くなる

教科書に親孝行は出て来ない

高槻市 生 田 義 一

お立ち台新顔ラッシュのタイガース

涼風に誘われ一夜の八十路旅

果てるまで義理が渦巻く田舎道

お坊っちゃま結末あわれ幕が降り

ボス逝きて句会にぼっかり穴が開き

高槻市 指宿 千枝子

スピーディーな時の流れに逆らわず
ストレスの解消に愚痴少し言う
日日にして老いを楽しむありがたさ
歌姫に聞き惚れているおじいさん
喝采と拍手で送るパバロツティ

高槻市 杉本 義昭

美人ママ素顔は家に置いて来る
準備した言葉が出ない好きな人
惑わずに好きだと言って結ばれる
酒飲んで経過語らぬ負け試合
職業欄夫婦揃って無職です

高槻市 乙倉 武史

背水の陣内閣の低姿勢
お手やわらかに慇懃無礼福田流
虎視眈々民主目くらたてている
期限偽老舗赤福晒す恥
階段の手摺り頼りにする歳に

豊中市 安藤 寿美子

この次はどんな手使つて来るだろう
しっかりと見たけど口に出しません
秘密やと言うたら皆にしゃべるやろ
気がつけば私は介護される側
半値でも要らないものは要りません

豊中市 江見 見清

オブラートを心にかぶせ仲が良い
バージンロード歩いて父は肉離れ
人間に似たロボットだ故障する
正論に人情論が押し黙り
ひと言を嫁に言うては悔いている

豊中市 吉田 あずき

一病を得てから知った人の傷
九条がゆらぐ目離してられぬ
眠らない街で人間喪失す
どの道も母のほのかな影がある
思いは同じ脳トレの本売れている

豊中市 岸田 知香子

剪定に樹の香もらつて深呼吸
浴衣着て両手に花の京の床
彼岸すぎ熱中症と熱帯夜
運動会夏の疲れで総倒れ
虫の音も次第に馴染む初秋の宵

豊中市 水野 黒兎

曼珠沙華天に戻ったひとに咲く
モンベからパンツに至る近代史
歯を抜かれ三日月尖る秋の暮れ
ぶらんこに乗って心の揺れ鎮め
競争はいいが潰れちゃ困る店

豊中市 山門タミ

コスモス園類なでて行く千の風
文明の機器は不要と生きている
小指怪我十本指の家族です
一人じゃない皆な親切頑張るぞ
五十過ぎ早や年金の話題なり

豊中市 藤井則彦

飲みながら箸の袋に書くメモ魔
カラオケの義理の拍手に酔う上司
贅肉が優先席で呻き出し
頬撫でる妻の寝息はカレー味
バネにして失意の底で磨く技

豊中市 坂上高栄

寝で一畳座って半畳我が宇宙
便利さに事故が連なる正比例
痼癬玉九月の空へ投げとばす
総裁選呉越同舟たたえ合い
トキ巢立ち千の風より広き空

富田林市 中井アキ

泣く顔も怒った顔もわたしです
つぎはぎの翼で余命とんでいる
ロソクの炎囁く亡夫の忌
指切りをする度空気甘くなる
親友の認知がまなうらを塞ぐ

富田林市 大橋鐘造

狂わない時計に尻を叩かれる
つぐないの数だけ太くなる絆
人間になって見て来た夢の数
ブライドを捨てて治った肩の凝り
甘言に釣られヘソクリ攫われる

富田林市 片岡智恵子

風の百態知った柳の嘘ばかり
いい音色悪魔の笛が心地よい
働かぬ脳が大きく首を振る
トップの座譲ると軽くなる帽子
あかんたれ真ん真ん中にいる安堵

寝屋川市 籠島恵子

遅咲きになってしまった曼珠沙華
雲は芸術竜を一匹とばせている
八十のおしゃれにハッパかけられる
ありそうもない所にあつた忘れもの
美しい誤解はそつとしておこう

寝屋川市 江口度

今日の現実夢のつづきを見るよう
おかずなどないがランチを食べている
コマーシャルばかり見ている昼休み
家を出ず靴下はいたことがない
かやのない暮し蚊なんか見当たらず

寝屋川市 森

茜

羽曳野市 酒井 一 壺

もの好きな虫だ私の頬つつく

如才ない自販機ごろんと返事する

うるおいがほしい紅萩うなだれる

絵手紙に品格高い富有柿

ぶらんこがぼつんと町の遊園地

寝屋川市 平 松 かすみ

でこばこの道を歩んで金婚日

成長をしたんだネ孫に諭される

じいちゃんの記憶確かな松屋町(生地)

大阪へ行けば足向く中大江(小学校)

パツと出た固有名詞をほめて上げ

寝屋川市 太 田 とし子

今日生きた続き演じる明日がある

髪と爪のびて縮んでゆく寿命

いつ来ても雀キヨロキヨロ落着かぬ

来春の花壇色はモダンな黒がよい

泥棒も着服したとはきれいだナ

寝屋川市 富 山 ルイ子

節操がなく勝ち馬に乗る議員

年金の着服大事な金なのに

暑気負けで体調崩したままの暮

皆の愛山ほど貰い今生きる

釘さしていても喋ってる秘密

由緒ある町名消えて合併す
剣よりも怖いペン先人を消す
人間の心忘れた世が怖い
初恋は消すに消せない味残る
ありがとう生きてるだけで丸もうけ

羽曳野市 安芸田 泰 子

気紛れで誘った人が僕の妻

詫びられて言い勝ったこと辛くなる

破るにも心が残る古手紙

見比べて迷いだんだん深くする

なるようになるさその先運まかせ

羽曳野市 永 田 章 司

豪快に笑い飛ばして悩んでる

てにをはの大切さ知る五七五

無精髭手配写真を見て刺った

占いの今日の大吉信じます

ナノ世界理解の脳も目も持たず

羽曳野市 三 好 専 平

秋の雲流れるように生きている

秋の空今日はグラマン飛んでない

美しい国で自殺をした作家

ぶっちゃけた話俺は悪人だ

採血の血を看護婦は振ってみせ

羽曳野市 吉川 寿美

皮下脂肪ふえてスリムな預金帳
賞味期限すぎて人間くさくなり
屑かごに溜るわたしの負の部分
鏡には映せぬボクの裏の顔
うっかりと素顔をみせたバラの棘

阪南市 森村 美花

踏み出したからにはバックなどしない
プラス志向私らしくて好きなどこ
さっぱりと流そう気持軽くなる
七十五歳もういいでしょうという政治
秋日和日本のお米輝いて

東大阪市 米田 水昇

千代紙をはればノートが生き返る
浮雲も私も越える水たまり
美しい国は首相の絵空ごと
人生の峠歩幅をゆるめよう
国はみな炎かかえて四苦八苦

東大阪市 笠井 欣子

意地張って陰でこっそり痛み止め
捨て育ちのアロエが効いた手の火傷
だんだんと燃えぬ吾が身に活入れる
どの医者も歩きなさいと柔らかに
夫婦して詩吟川柳八十の幸

東大阪市 北村 賢子

神様の膝元で人騙す餅
たそがれてスローライフで永らえる
私には一度つ切りの赤い糸
カサカサのころ潤す子の笑顔
再会へ期待外れと懐かしさ

東大阪市 中岡 妙

付き添いはこちらと患者バスを見せ
入院が増えてサインも馴れてきた
どちらでも良いに心が踏み出せず
情けなや騙されて出す金も無し
畑地持つ友に季節を届けられ

東大阪市 安永 春

ひとりより二人で生きる金メダル
半世紀過ぎて喜寿ですエピソードな
夏衣料とことん値段下げるまで
アレひとりラインダンスに泡が出た
コーラスのソロに憧れ黄な声に

東大阪市 佐々木 満作

絵空事抱いてカンバス描き殴る
人生の修羅場幾つも越えた自負
差し伸べてきらりと光る介護の手
毒を持つ花も健気に咲いている
音痴だが身振り手振りで歌ってる

枚方市 二宮山久

枚方市 森本節子

スキの穂ゆれて散歩のペアシューズ

満月へ夫婦で味わうコップ酒

歩くことだけが薬と血糖値

ラッシュ時へ胸の谷間に気をもらい

幸せにすると誓った妻の愚痴

枚方市 寺川弘一

もはや異性でない女房をいとおしむ

DNAを疑うわけにいきません

大器晩成だから長生きしていてね

おびんずの様撫でると親父思い出す

おふくろの味はオンリーワンの味

枚方市 丹後屋 肇

吊皮の欠伸が移る休み明け

せせらぎの釣師と鷺が対峙する

薪能五重の塔が揺れ動く

カーナビが八十八ヶ所巡り切る

無表情で届くケイタイのメール

枚方市 伊達郁夫

サングラス外し童顔現われる

Tシャツがだんだん派手になる老後

くちなしの花が飲んでる白い雨

回復を待つて検診受けに行く

ストレスがいっぱい詰まるゴミ袋

かくやより満月の裏面のプレゼント

駅前の安くて美味しいミックスジュース

お忙しい中をで始まる電話は注意

出かけ際くさり縫れるペンダント

十時きっかりお買物兼散歩の時間

枚方市 海老池 洋

いい相棒お持ちと思う仁王さま

子も孫も帰らぬ過疎の祭すし

父としてしかとバトンを子に渡す

聞き流す度量も持つている微笑

マッチ棒久しく見なくなる文化

藤井寺市 鈴木 いさお

注射より薬より効くたまご酒

ともかくも平均までは生きてきた

親の柵にもう囲えない十五歳

試食して買わずに帰る強い意志

サブちゃんの鼻が吸い込む紙吹雪

藤井寺市 太田 扶美代

小心で大胆わたくしの裏側

焦るまい焦るまいサンダルがグネる

不完全燃焼があるあちらこちら

つらいけど生きてゆけないほどでない

鍋にするちよっと気まずい夜だから

藤井寺市 若松雅枝

玉砂利の音厳かに伊勢参宮

カラフルな案山子は秋の風物詩

萩の寺この先ずぐと書いてある

街の子に空気と水を送りたい

異常気象毛虫が庭の木を枯らす

藤井寺市 中島志洋

目に見えぬ絆で回る夫婦独楽

言い訳はしないと決めた太い眉

本心はとても優しい毒舌家

薬より酒一合でなれる風邪

親が言うほどは内気でない娘

藤井寺市 高田美代子

スニーカー履いてる老いたシンデレラ

着地点間違つたまま根を降ろし

野暮天をその気にさせた罪な風

食べる見る遊ぶで秋は忙しい

CTスキャン頭の良さも写るのか

藤井寺市 鴨谷瑠美子

音をみな消して恋しいひと想う

吉本に笑いころげた硬い椅子

口紅が斜めにちびる慌て者

秋冷えが急を要する肌ぶとん

音痴でもうたう達者な母がいる

守口市 井上桂作

民間の手によるかぐや大空へ

内助より女性主導に様変わり

年金を勝手に己がふところに

学習の削り過ぎこそ見直しを

道徳の教科はさける日教組

八尾市 村上ミツ子

城跡のすすきへやつと秋の風

がたがたと居抜き内閣走り出す

別れてもパパはパパだしママはママ

とうさんと話すおはぎを食べながら

きっぱりと認め言い訳などしない

八尾市 吉村一風

足の裏妻と子と踏む雨の午後

元氣よく医者の子で忙しい

ふり向けばいつでも妻の居る安堵

女の匂い覚えてるかと彼岸花

太陽は明日があるよと言うてくれ

八尾市 宮崎シマ子

つらいのは母にそっぽを向かれた日

はつきりと好きと言うたら考える

担ぎ上げられ後はつたらかしにされ

火の玉のポーズでママを呼ぶ赤児

応待は口の達者な妻にさす

八尾市 生 嶋 ますみ

ハンサムの基準が孫とずれている
手抜きして雑草に勝つ除草剤
人の目を気にするほどは見てくれぬ
生きのびて今が一番幸せだ
気晴らしをした娘との長電話

大阪府 澤 田 和 重

子守唄歌って母を眠らせる
埋まらない溝ひと言が悔やまれる
土壇場でふと生き様を振り返る
即答を避けて妻から知恵を借り
妥協する外なし酒でもてなされ

大阪府 米 澤 俣 子

取り敢えず味方の顔です握手
大笑い脳活性のアルファー波
意地悪のサインだろうか無視される
十連勝あればまぼろしタイガース
俄か雨罪ほろほしか虹の橋

大阪府 野 田 栄 呼

無口な子ますます黙る反抗期
また逢おう約束不発くり返し
機械化で一家総出のない兼農
はねっ娘をなでしこにする浴衣帯
トゲのある言い草深く残る耳

大阪府 初 山 隆 盛

盲目の愛直線に突っ走る
青汁をせっせとのんで句をつくる
一昔前のはなしは聞き流す
年金の永住誘うマレーシア
毒舌を吐く宰相を待っている

大阪府 桑 田 ゆきの

子に甘い親世間には多過ぎる
カーナビに頼るハンドル未知の旅
ほじくればころころと出る偽装もの
飽食に箸の迷いを諫められ
エコ心持つ癖がつきマイバッグ

神戸市 伊 勢 田 毅

後輩の計報に滅入る雨の朝
古希過ぎて敬老会を思案する
単身赴任本社の情報精査する
神様の死角で古希が浮気する
また偽装老舗ののれん泣いている

神戸市 山 口 光 久

大輪を咲かす明日へ根を伸ばす
鼻っ柱折りたい上司に認められ
ばあちゃんと会話がはずむ菓子作り
子に夢を託した父の嬉し泣き
酔うほどに口のチャックが緩みだす

神戸市 田中 章子

わたしつてどこかポイントずれている

初孫のヒロインの座は揺るぎない

夕茜腰痛忘れ背伸びする

家族増えると喜びも心配も

旅がえり何はともあれ梅茶漬

神戸市 山田 婦美子

忙しさに気づかず仮面つけ忘れ

一言を飲んでその場の和を保つ

駆け足で来た人生の折りかえし

いらぬ事ばかり覚えてる頭

ごめんねと言わせるようにもっていく

神戸市 山口 美穂

秋海棠亡母が愛した薄い紅

陽溜りでお昼寝犬の軽い息

朝寝した私へ老犬逆らわず

もう一品のために豆さん煮ています

美術館へ心もお洒落して行こう

神戸市 両川 無限

真相を知って空気が凍りつく

ハンドルは孤独だふつと眠くなる

炎メラメラ象形文字が浮く嫉妬

この世への未練炎を掌で囲う

三度目は離婚届けが置いてある

相生市 中塚 礎石

結び目が裏切る時もある絆

正直な切符に釣りが音を立て

縄のれん目刺し一匹微罪酌む

野仏に野菊一輪そえてある

縄のれん乾杯のあと二三杯

芦屋市 黒田 能子

母の膝甘えるためにあるのです

大人です大きな声でもう泣けぬ

カットされた話の方が面白い

運だめしちよつと横道それてみる

ペン先のスクープ風を巻きおこす

尼崎市 軸丸 勝巳

待ち合やす町の本屋が消えている

脳トレにクイズ番組かじりつき

早口のテレビを追えず耳検査

血液検査さよならしたいハイとロー

スローライフ球根植えて春を待つ

尼崎市 長浜 美籠

爆睡に良いコトンの肌ざわり

顕示欲つよいと花も飽きられる

何でもこうなるの点滴打ちながら

定位置でコーヒーを飲む負の美学

人柄が滲む手書きでくる手紙

尼崎市 山田耕治

かる鴨のように子供をつれてくる
電話にはいつも夫が先に出る
新入りの金魚一匹和を乱す
携帯をいじるかねるかする車内
常識という枠内にいてただあきれ

尼崎市 春城 武庫坊

はや師走心の準備まだ出来ず
合掌の形でとまる糸とんぼ
六十五年よくも続いた夫婦著
青空奇麗白い芒の穂が冴える
力瘤たしかここらにあったのに

尼崎市 春城 年代

やっと秋乱れ咲く萩かき分けて
いつか来た径少女が秋を知った径
ふるさとのとおい祭に着た袷
アンパンマン一度読みたいおばあさん
秋の酒菌にしみとおる連れという

伊丹市 山崎 君子

老夫婦揃いのベレー高野路を
老い松の豊かな緑今日寒露
長電話明日のデート迷ってる
ギンナン落し幼児喜ぶ秋の色
月探査アポロ懐かしかくや号

川西市 西内朋月

他人から見れば気楽なひとりもの
飽きもせず焼そば食っているお昼
チョコレートあてに飲んでる秋夜長
ゴム紐の伸びたパンツで靴磨く
古稀過ぎて恋の炎が揺れている

川西市 米原雪子

豊かさに感謝の気持忘れがち
風呂好きで手間省けてるおしやまさん
ぎりぎりまで動かぬ人と居るあせり
出かけては二三度戻る忘れ物
顔見れば待った不安は何処へやら

三田市 久保田 千代

いい妻を演じ過ぎたか寝つかれず
戻らない記憶が向う岸にある
花言葉耳にしてから迷う蝶
空気にはなれずため息深くなる
ケータイが突然聴かす童歌

三田市 石原 歳子

千の風歌えば涙こぼれでる
傷ついた心静める森がある
へそくりが無い安全な場所なのに
芋蔓のうまさ知ってる戦中派
好きな人乗せた電車が遠ざかる

三田市 堀 正和

雑草と言われきれいな花咲かす

娘には王子僕には掠奪者

日本語が怪しくないかレポーター

元氣よい音痴の園児いる舞台

土に生き四季の乱れを見逃さず

西宮市 秋元 てる

妙齡を辞典で引いている米寿

妙齡は若い女性と限るまい

好きな服は平凡に少しのひねり

空元氣見破られそでなおはしゃぐ

いい姑止めたら息が楽になり

西宮市 牧 渕 富喜子

ほつといてくれる氣配りありがとう

まだ暑いしかし今夜は秋の月

くしゃみするもひとつおまけついで出る

地に足のつかぬ日のあり深呼吸

花東に隣り合せた人も笑み

西宮市 緒 方 美津子

救急車三回乗って生きている

目と耳に元氣のちがい出る初老

コスモスより案山子と写したい女

拉致未だ空氣の凍る思いあり

カラオケによく誘われる音痴です

西宮市 坪井 孝一

武骨な指紙ヒコキはまだ折れる

オカリナを吹くとひろがる故郷のこと

酎ハイに言い聞かしてゐる裏はなし

アカンベエして見えています抽象画

ビートルズ聞いて昔を手繰り寄せ

西宮市 片山 忠

生きがいを聞かれりや妻と言つておく

遊んであげると孫から誘われる

すかたんを言うては歳のせいにする

別れ上手なのに独りで生きられぬ

当然のようにセルフに慣らされる

西宮市 井上 松煙

寂しさを忙しげにして隠してる

同情はされたくないと言葉をはり

太陽を母と拝んだ幼い日

耳奥に仏に祈る母の声

病院の各科にいてる顔馴染

西宮市 菊池 トミエ

金木犀家の中で秋運ぶ

秋風に過ぎた猛暑が嘘のよう

西風に乱れて山の萩らしく

コスモスが好きに生きよと風にゆれ

ギャルが群れ老いが小さく乗る電車

西宮市 山本義子

奈良市 米田恭昌

煮こみうどん手つとり早い馳走なり

雪だより元気ですかと十二月

十二月慌てる振りをするひとり

冬の街見上げる月があればよい

ほんとうのサンタに会ったことがない

西宮市 西口 いわゑ

インテリも飲めば普通の人になる

明日も咲く薔があつて安堵する

助手席でうとうととして叱られる

太陽にもらったひまわりの黄色

時により聞えぬ振りもして平和

西宮市 亀岡 哲子

人工島へ渡る橋あり浜消える

雨やどり小さい画廊にある出会ひ

外来の種で育った京野菜

ピアノの音パタリと止んで震度三

オール電化の暮らしへ日毎仏の灯

姫路市 古川 奮水

味噌汁の香りに朝の玉子割る

部屋籠りハイビジョンにて世界旅

万華鏡透して謎の秋を見る

習い事三歳からの楽譜読む

春は藤秋は山車弾む杜

カラオケの下手より受けている音痴
人間の驕りを嘆く神仏

しがらみがあつて面子をつぶせない

五欲まだめらめら炎えて惚けられず

椅子を手にさてそれからの長電話

奈良市 天正 千梢

チャンス到来靴紐をしめている

感動にブレーキかける悪いくせ

サイコロを振りなおしたい青テント

一期一会料理はうまし諏訪の宿

引き算が出来ずに暮らし火の車

生駒市 飛永 ふりこ

さわやかな講師にぼつと夢心地

一抜けた自分自身の絵が描ける

石炭の風呂で燻した焼芋よ

コスモスの根つこの強さ所望する

思い切りスポーツジムで灰汁燃やす

香芝市 大内 朝子

他人より自分に負ける腑甲斐無さ

理性とや燃える炎を折りたたむ

我武者羅に生きてかわいい気無い女

わたくしのらしさを生きて蹴躓く

赤い服着ると活気の湧く魔法

檀原市 安土理恵

錆びついた遊具子どもの声がない
癪だからもぐら叩きをしに行こう
悪女かも妙なところへ好奇心
やり残し指折り数え黄昏れる
不満足ながら動いてます五体

檀原市 居谷真理子

ブナの子になろうブナ吐く息吸って
一匹の虫の命のセレナーデ
許してと母がまた言う火傷跡
疲れたな素早さだけで生きのびて
満ちてくる逢う日のルージュひきながら

大和郡山市 坊農柳弘

団塊の世代年金素浪人
初恋のタイムカプセル老いぬまま
本能の赴くままにはしご酒
成し遂げた充実感にひたる酒
好き嫌い否応なしの民営化

奈良県 渡辺富子

親友のネットいじめに身がすくむ
ドア隔て妻の不満が漏れてくる
弱音吐く男を叱る盧舎那仏
自分流にこだわり味方減っていく
胸底の想い胡弓へすすり泣く

和歌山市 福本英子

待望の秋ひき連れて風が行く
足踏みミシン母のお守りをしてくれる
抽出しの奥から錆びた肥後守
片方が溜まる手袋イヤリング
三キロも痩せた分だけする厚着

和歌山市 古久保和子

秋たのし栗も小芋も届くから
天高し家出しようか小半日
じいちゃんの首にワイシャツ馴染まない
自販機に突き返された札の皺
まだ青いみかん未来の味がする

和歌山市 田中みね

我が家には何てことない民営化
ほらごらん出過ぎたまねをなさるから
ほいほいと買う氣にさせる五割引
相談は誰か一人になさいませ
食べるのに妻は骨皮筋右衛門

和歌山市 武本碧

ほいほいと編んだ絆はすぐ解け
床の間で威張る化石が一つある
人生を渡る小舟は波まかせ
マンネリの刺激に丁度良い素足
折り返し地点に來てもまだ迷う

和歌山市 玉置当代

和歌山市 福井桂香

石舞台古墳馬子を偲ぶ秋

大和路の秋を満喫したふたり

彼岸までと残暑に耐えて汗流す

秋風にやっと落ち着く野良仕事

墓参り胸のつかえがとれました

和歌山市 堀畑靖子

食欲の秋に値上げはあんまりだ

見ぬふりをした目に月がやさしくて

独り居の灯りたしかめ閉める窓

老人が老人いじめするなんて

秋の夜クイズ番組見て学ぶ

和歌山市 喜田准一

もしもしと言って一気に堰を切る

につこりと味方もどきで寄って来る

核心に入って声が細くなり

目標を捨てると老いが速くなる

幸せな日が続くから眠れない

和歌山市 細川稚代

彼岸会に汗をふきふきお経上げ

一夜明け秋が突然やってきた

スタッフの心遣いに手を合わす

コンビニの味にならされ一人住む

この里がついの住み家か蛭とぶ

和歌山市 松尾和香

努力する私の背を亡夫が押す

うっかりも日常的になる暮し

ブランドのコピーを飾る僕の部屋

澄み渡る十五夜風の私語聴こえ

ダンス熱女性が目立つ長寿会

和歌山市 宮本三喜夫

空の旅命がけとは許せない

打ち上げる衛星かぐや成功す

成績で揉めたあけくに祖父危め

政治家の杜撰な経理ボロが出る

新しい日本郵政発足す

海南市 堂上泰女

ミヤンマーの風は世界にどう響く

楽しみな運動会を流す雨

子の帰省温もりという土産持ち

千の風BGMにして作詩

名月を拝しもせずに秋活ける

海南市 三宅 保州

古時計お前も俺もまだ動く

敵ながらあつぱれという敵多し

本心はスーブの冷める距離がよい

アンコールの最中に帰る人もいる

ケータイという写真機に馴染めない

鳥取市 福田 登美

飾らない言葉が過去を引き戻す

点と点繋げば見えてくるドラマ

懐かしく枯野に花が咲く如く

人それぞれ語りつくせぬ傷もある

倅の波に乗つてと祈るのみ

鳥取市 武田 帆雀

入れ知恵の謝礼に潜る縄のれん

誰とでも手を打つ色のない鴉

タイムリーヒットは固い信用度

同じ水飲んでも苦い負け投手

農政をよく知っているもぐらたち

鳥取市 太田 幸枝

認知症無邪気にこぼれ飯ひろう

突然に友の訃報に手がふるえ

貧乏神私の袖をねらつて

才媛がつぎつぎ痴呆になる恐さ

死ぬほどの恋しなかつた悔い残る

鳥取市 永原 昌鼓

人並みに呆けが進んだなと思う

人類のエゴにうんざりする地球

影法師お前も歳をとつたなあ

ヘルシーな水よ空気が過疎の里

オシドリの夫婦ヘルールなどいらぬ

鳥取市 宮脇 道子

しなやかに白萩ゆれて母の風

くすりより医師の一言身に沁みる

子供らの長電話です我慢する

手を握り愛を確かめいい笑顔

一度きりの命日々感謝です

鳥取市 平尾 菜美

雲つかむ話しているおばたりあん

姑のいるお蔭天下は回りもの

減っていく借金望み捨てないで

天井に終止符明日へよく眠る

逃げ水を見切る覚悟は出来ている

鳥取市 埴 寛子

側近の明かす内幕その裏は

認知症まさかの級友に絶句する

寝る時ぐらい歳を忘れる夢おくれ

食卓の話題に溶けず耳独り

その日までシャンと背筋を伸ばしたい

鳥取市 富山 檳榔樹

限界とたるむ心に鞭を打つ
リハビリに生きる力を抱いて見な
苦勞嘗め妻とゆつくり老い日和
青空をたんたんと舞う奴風
素直さが消えてじわじわ風変る

鳥取市 中宇地 秀四

煩惱が神に逆らう鬼あざみ
露天風呂月に洩らした愚痴一つ
秋風にそつと残り火吹いて見る
羞じらいもあつて八十路のフラダンス
欲望の最たるものが無欲かな

鳥取市 山本 益子

年金の不服今更怒り出す
ちぎれ雲何を拗ねたかひとり旅
ふるさとをゆつくり歌う婆の群れ
秋の風イノシシ御用おとし穴
成すことの多い余生に弾み出す

鳥取市 近藤 佳子

生かされて今年も逢えた曼珠沙華
枯野ゆく亡母は小柄で早足で
赤紙と黄泉路へ行つたままの兄
あの駅でまたねと言つたのが最後
長生きはするもの今年梨美味し

鳥取市 土橋 はるお

一等のテープを切つた児は踊る
納涼祭ジゲの活性化を踊る
あたり前が出来なくなつて来る不思議
どつかりと流れを変えるあぐらかく
脑梗塞の気がありやせんか字が踊る

鳥取市 福西 茶子

不美人のおかげ元気で長生きで
人様の批判するほど偉くない
粗食だが三度の飯に掌を合わす
猪と競う畑の栗ひろい
身の丈に合せてクルマ軽トラに

鳥取市 岸本 孝子

苦勞性人の分まで苦を背負い
お彼岸のだんごにきな粉添えてあげ
日曜は眉もやさしく描いておく
天高く体重計は隠しとこ
身の始末きれいにつける流れ星

鳥取市 岸本 宏章

腹回り九〇秋が怖くなる
嘘のないスポーツ紙にも色がある
山の端の月がでっかい顔で出る
消えそうな村に子供の声がない
糸切つた風が孤独を募らせる

鳥取市 有 沢 せつ子

鈍行で見る十五まで住んだ町
十四歳孫もつともな意見言う
思い出となつて苦勞を懐かしむ
外れくじお守りにして持ち歩く
皺の手に歳は争えないと知る

鳥取市 録 沢 風 花

親友から届く野菜は無農薬
大食いのテレビ淑女に程遠い
ごみ捨ての日はおしゃべりの脳弾む
激動の昭和を越えた友が減り
履歴書に六女と書いた羞恥心

鳥取市 倉 益 一 瑤

母の海ポカリポカリと浮くヒント
母卒寿今も苦勞をかけている
電池切れしたのか記憶抜けている
迷ったら風におなりとささやかれ
ずる休みしようか胸に雨が降る

鳥取市 夏 目 一 粹

職退いて想定外は暇の無さ
わたくしの余命あやつる酒タバコ
愛すればどこか素振りに現れる
握手より勝る手だては話し合い
正直に生きてトラブル避けている

鳥取市 池 原 天 馬

ゾッキ本先輩の名を発見す
国連の謝辞鬼の首取ったよう
成人式昭和もやつと縁切れる
異常気象竹は元気で松枯れが
川柳の醍醐味くれた友が逝く

鳥取市 奥 谷 彩 子

いい予感につこり笑顔すれ違ふ
老いて今孫等と遊ぶうれしい日
旅の無礼講飯面外して飲みあかす
利に聡い風を読んでる二枚舌
畑仕事やめてさびつく腰と鎌

鳥取市 植 田 一 京

自分にも判らぬ自分居て困る
ほどほどの距離で続いて居る友よ
歳などと諦めませぬどっこいしょ
思い出の中に消えない始発駅
夢抱いて生されば元氣湧いてくる

鳥取市 中 村 金 祥

ヘルシーな熊は里には出て来ない
いじらしい老母が年金貯めている
限界を悟り写経をして暮らす
温暖化マンモスだって出て来ない
正直な花に季節を教えられ

鳥取市 加藤 茶人

ひとつとしてひとつ忘れたひとりごと

その昔肥満健康美と言われ

夫唱婦随そんな美談はその昔

まず神と仏があつて老母の朝

口下手についつい妻の背に隠れ

鳥取市 田村 邦昭

美しい顔に似合つた刺をもち

幸運に嫌われたのかとまらない

青い鳥ばかりじゃないと鳥の愚痴

風呂敷が手品のような母の知恵

まだ走る馬に引退決めさせる

鳥取市 春木 圭一郎

黙っていたら分かつてはもらえない

運命を覚悟をもつて受け入れる

志貫さ何ら悔いはない

品格は遊び心についてくる

分を知ったときから人をうらやまぬ

鳥取市 土橋 睦子

この歳で消火器使う事習う

指先の老化を防ぐ木綿糸

調子いい言葉に乗つた日の不覚

寂し気な女が見せる腕自慢

車だけやたらと多い過疎に住む

鳥取市 下田 茂登子

人間も地球も狂う温暖化

文化祭終えて一息秋の風

四〇キロの体に湿布貼りまくる

したたかな女仏も逃げている

八十路来て良妻なんてまだ言えぬ

鳥取市 杉本 孝男

良いことが明日もある気である愚か

殿様がほめた宿場でいつも混み

秋の彩山から裾へ降りてくる

風まかせうろうろしたいひとり旅

投げだした総理よさぞや無念だろ

鳥取市 西川 和子

運動の畑仕事に目を回す

言う事も無いからにこりしていよう

にっこりが来ればにっこりしたくなる

仏さま今朝もにっこり差し上げる

あと幾度作れるかしらせち料理

鳥取市 吉田 弘子

生き様は死に様余生心得る

物忘れ思い出す度よぎる老い

儲け話老いの煩惱狙われる

古稀は未だ老春なのだピンク着る

わたくしのピンチ救つた家族愛

倉吉市 最上和枝

にこにこと懐火種持ち歩く

コンビニは隣我が家の冷蔵庫

女対女何時でも火花散る

台所狭いわたしの遊び場所

子を宿し美しさ増すお嫁さん

倉吉市 野口節子

野も山もファッション競う秋の景

マネキンのポリスが睨む行楽地

男には涙を溜める池がある

外敵に備えスプレー持ち歩く

豪快に食べて贅肉つけている

倉吉市 猪川由美子

ああ恐い数の論理が幅利かす

我慢して地球無言で熱を出す

レジ袋だんだん貰いにくくなり

価値観は皆異なると思い知れ

この次はどの大臣が辞任かな

倉吉市 山本玲子

消費税込みで捨てちゃう勿体な

八十歳嬉しい悩み五十肩

鉄分が不足で血の気衰える

再点検ガス戸締まりへ指呼称

せつせと歩き命の貯金しています

倉吉市 牧野芳光

草の名は知らないけれど草を抜く

物知りの母が忘れた僕の顔

新米がとれる頃にはやって来る

修業のようにむいてる柿の皮

老人になり老人が好きになる

倉吉市 山中康子

先代の注意今項目を覚ます

逢うたのにまた恋しくて電話する

いい婆になろうなろうと目を瞑る

この先をためらいながら今日の旅

閃きがはつと浮かんたい目覚め

米子市 光井玲子

平穏すぎる暦のありがたさ

いつの日も無口な老父の背に感謝

健康を感謝感謝と米を研ぐ

恩に着る事ばかりだな長い道

洗いざらい打ち明けほっと息をつく

米子市 野坂なみ

父も子も時のめぐりで総理の座

花言葉おぼえて好きな花ふやす

ありがとうどちらも笑い合っている

ハンチング隠れたままで風になる（亡夫三十五回忌）

言いわけにドクターストップ担ぎだす

米子市 政岡 日枝子

もうそろそろ景色ながめて流れよう
床の間の石に似合わぬ内輪もめ
はつきりと医者は恍惚だと言わず
長い物にまかれて以来怠けぐせ
土堀くぐった竹がのぞき見して困る

米子市 青戸 田鶴

ひと休みすると血圧正常に
花よりも友の笑顔をたずねよう
無表情な総理の顔がもう漫画
酷暑過ぎる仏さまにもありがとう
大声で童謡歌い暑氣払い

米子市 白根 ふみ

稲穂たれ地球の果てのコンバイン
なまけもの意外と急所心得る
神さまのサイン時どき見落して
屋敷うちいちじくだけが熟れるもの
名石はどの向きからもわくわくす

米子市 門脇 晶子

長い治療で脳が無口になってくる
検診に医者顔の色気にかかる
傷口の深さで覚悟できてくる
柔い髪は母より受けしもの
ありがとう優しい友が居てくれる

米子市 中井 ゆき

じらされてじらされやと秋の風
やせられぬ酷暑に汗をしほったが
うっかりに悪気はないとなくさめる
石仏を爆破までする罰あたり
腕よりもやさしさがいい街の医者

米子市 澤田 千春

父がくれたちさな畑に夢をまく
かけぬけた風が噂をおいてゆく
尾底骨びしやり打たれて冬になる
集団で走る若者おそろしい
曲り角いつもわたしを迷わせる

鳥取県 谷口 次男

ひと口の水水水と被災地が
大切な弟子をいたぶり憂さ晴らし
山火事を巧みに利用種の知恵
自転車が自殺している駐輪場
あの議員二足草鞋で足重し

鳥取県 細田 裕花

つま先のプラス思考に引つ張られ
生きて来た私の地図を信じてる
信じてる人の前なら素になれる
滅亡へ一直線の無駄遣い
無駄話こぼして心晴れて来る

鳥取県 深田 俱久

たやすくは消せぬ史実だ沖繩戦
氏子中たばこふかすは君とボク
温暖化防止ポツケにマイ箸持ち歩く
外孫も子も書き表札大世帯
流れ弾などではないぞ狙い撃ち

鳥取県 竹信 照彦

衣替え迷っています神無月
変り目は静かにどっと里の秋
秋蒔きの野菜芽を出しや虫が寄る
虫食いを間引き菜にして旬を食う
虫食べて太る野菜は無いものか

鳥取県 松川 行男

草かきわけて一瞬草にけつまずく
凡人は百回叩き門開く
毛は無いがすそだけを刈る理髪店
化石からペンタコ残す文化人
妻って誰だ俺んち山の神

鳥取県 盛田 夢路

捨て台詞受けて今夜は眠れない
背伸びして夢掴みたいハイヒール
内視鏡が見せた臓器の無言劇
詐欺コール優しく誘う魔の手口
照りの良い柿を野猿に先越され

鳥取県 佐伯 やえ

しあわせのタネまきました仏さま
川柳と花のおかげボケてる暇がない
小さな良心見てみぬふりができませぬ
花詩 畑生きる勲章かもしれない
生きる張り大山さまのおかげです

松江市 三島 淞丘

せっかちとのろま愉快な老いの旅
忠告が石より重く圧し掛かる
雨に濡れ個性を見せる石の面
列乱す蟻には蟻の意地がある
独り居の二十四時間持て余す

松江市 松本 知恵子

秋ですね湖岸の風に吹かれましよう
天高しうっかり食べる秋恐れ
石段よりゆるりと登るおんな坂
心の内打ち明けているお月さん
諦めがよくて弱者の生きる術

松江市 川本 畔

露めいてゴソゴソ虫は秋の虫
座禅くむ月見だんごも真似をする
ススキの穂暑かった庭覗き込む
六ツ打つお寺の鐘は電子音
満月は一瞬人を黙らせる

松江市 小川 注 湖

帰らぬと決めて振り向く無人駅
おもちゃ箱手もげ足もげ孫育ち
人だかり名作だろう見ておこう
美人の笑顔は引力ありますね
試食会うまいと言わせ拍手する

松江市 銭 山 昌 枝

落葉はらはらがてのわたし見るよう
うっかりと零した愚痴に波が立つ
弱音吐く壺は見えないとくに置く
船頭が多くて脇が固まらぬ
しゃんとせいポロポロこぼす手を叱る

松江市 佐野木 み え

バスの窓築地松から雲流れ
彼岸花燃える想いを秘めている
温泉につかりもやもや捨ててくる
深夜放送寝たままに聞く御説教
彼岸すぎ32度はこたえます

松江市 安 食 友 子

平和の使い鳩までいじめあるそう
ハンカチも演ずる曾孫見続けた
せせらぎも秋色の中従順だ
真善美恐れ入ります高望み
戒めて抱擁してのね海よ

出雲市 岸 桂 子

時時は噛み合うチャック似た夫婦
お早ようの一言今日が軽くなる
灯を消して私を消して窓の月
本心を書く無記名のアンケート
身の丈に合った倅せだけでいい

出雲市 多久和 敬 子

ざりざりの暮し女を強くする
美しい国がたがたとくずれ出す
ストレスを晴らすカラオケ声囁れる
言いたい事も言わずに花が散つてゆく
ふる里の山は私の味方する

出雲市 小白金 房 子

空間を生かすわたしの花ばさみ
丸ひとつ多い備前の品を買う
新米の艶サラサラと手に受ける
安酒で癒す息子の高斟
白髪の息子にすまぬ白髪染

出雲市 持 田 多 輝 子

平凡でひらめきのない脳細胞
何時の世も人情に変わりはないと知る
歳月の節目節目をくぐり抜け
家族への恩はとうてい返されぬ
闘病の私家族も共に病む

出雲市 石倉 美佐子

出雲市 園山 多賀子

ありがとうその一言を忘れずに
桃太郎意外と母に理屈っぽい
箒の目たまには入れる古い庭
白々と月は止るよ夢の間を
時々には四角い座敷丸く掃く

出雲市 佐藤 治代

うつかりと敵の手中に居る私
山盛りの秋と笑っているお腹
傘を干す金木犀の匂う庭
気の弱い夫の背を押す私
静止画の中でゆっくり色褪せる

出雲市 森 茂美

無人駅草を抜いてるひとが居る
十葉の香りをのせた風が来る
敗戦日昨日のように覚えてる
片陰を拾うて辿る駅の道
無人駅降りれば秋の風に会う

出雲市 伊藤 玲子

いい風だ竿で家族を踊らせる
欲や見栄なぜか私もたと持ち
新しい靴がわたしを噛んでいる
時々ルール破って流れよう
その時はゆらりと旅に出るつもり

まだ卒寿未練がましく陽が沈む
命まだ夢が見たくて生きている
あわよくば生きるかもしれないぬ百寿まで
曼珠沙華秋を彩るしおらしさ
はらはらと散るのは落葉はた涙

出雲市 吉岡 きみえ

仮の宿ベッドがきしむ午前二時
はしゃいでみたところこは病院
病窓も暮れる長あい夜となる
まだ着地決まらぬままに転院か
リハビリの遅々と八十路の峠坂

雲南市 毛利 幸

孤独者は路傍の石を蹴っている
米飯がパンに主役を奪われる
新米の秋を迎えて肥り出す
秋祭り小銭手にして急ぐ子等
理不尽な意見を通す頑固者

島根県 伊藤 寿美

見つめれば物言いたげな亡父の石
無医村の峠に響く寺の鐘
鰯雲明日はゴメンときつと言う
空っぽのバスに乗り込む秋の風
秋霖が胸の花野に降り止まぬ

倉敷市 喜子

荷の紐に思いをこめて娘に送る
一人居に肉じゃがが二日食べ続け
娘の家で作らされてる煮ころがし
不安なこといっぱいあってまだ死ねぬ
誘惑をしりぞけ妻の待つ家へ

真庭市 国米 きくゑ

廃校となる夕焼けに燃ゆ母校
築百年文化財へとなる至宝
廃校となる学舎を眼にしまふ
勇気あるシングルマザー子育て記
四面楚歌自説まげない勇気持ち

真庭市 福嶋 智恵子

喜寿の紅意欲掻き立て赤を塗る
地図を見てカーナビを見て辿り着く
もみじ萌え私を染めて秋更ける
巻き戻しきかぬ歳の瀬すぐそこに
敬老会そんな齢なのもう嫌だ

美作市 小林 妻子

使い分ける笑顔もやはり年の功
卒寿越す笑顔に嘘は見当らぬ
本物の笑顔敬老会持参
絶やさない笑顔で大家族の夕餉
百日紅咲いて彼岸の微笑仏

美作市 福原 悦子

回想の節目の中に亡母がいる
横文字に今日も混戦する脳だ
新築の匂い小さな城守る
高望み過ぎた椅子から転げ落ち
ポストだけ二人の秘密知っている

美作市 大石 あすなろ

鍵のない部屋で隔てのない親子
新しい風に話題を持ってかれ
百均の皿にあふれる愛を盛る
向い風いつかはジャンプして見せる
鍋ものが恋しくなつて秋深む

竹原市 岩本 笑子

もう誰も待つてはいない雨宿り
無理やりにデジタルにして金儲け
遍路笠どなたも重い過去があり
尋ね人テレビの時間足りません
まあいいか月に一度はボカをする

竹原市 石原 淑子

真実一路燃えつきた曼珠沙華
母の忌や母恋しくて栗を煮る
風となり修羅場をくぐる子も見据え
貝殻を翳す大きな海の詩
ひまわりの迷路で愛を見失う

竹原市 時 広 一 路

可愛さがい四コマの持つ笑顔
僕の眼に見える空だけ日本晴れ
吉の字が有ればお神籤良しとする
手相は当ってましたいま傘寿
眼がものを言ってるしかと受け止めよ

宇部市 平 田 実 男

美しい国安倍さんの夢は消え
稔るほど頭を上げて天下る
天然も養殖もない僕の舌
妻の居ぬ余生考えても怖い
晩酌の味が私の聴診器

美祢市 安 平 次 弘 道

正論はわかるが少しくどすぎる
なごやかな朝一巻の経を読み
検診がすんで気楽にくらせませす
重い日も軽い日もある箸の位置
骨肉の争い喜劇かも知れぬ

東かがわ市 神 保 坊 太郎

飯の世を曲りくねって九十年
不器用な昭和の頭のせており
利き酒は嚙んで飲むべし舐めるべし
百までは生きると九十の出来ごころ
寄っといで仲よく談合して遊ば

東かがわ市 伊 勢 八 重 子

名月が包む二人のシルエツト
見かけより中身が良くてみちづれに
ありがとうは倅せ招く潤滑油
世知辛い中にもあった人間味
忘れ物また原点に立ち戻る

東かがわ市 原 賢

使い道ひとつ変えると涌く構図
もう肩の力を抜こうおじぎ草
気に入らぬ話は他人の所為にする
聞いてすぐ忘れる歳を愁いあう
残り火を煽ってくれる秋の風

東かがわ市 清 川 玲 子

秋ですぬチラシに旅をめぐらせる
がんばれが重荷になった少年期
パンコンに押されペンダコあくびする
星の名をおぼえた頃の涼み台
どの椅子も人待ち顔の無人駅

松山市 高 橋 宏 臣

遠近に乱視が混じり僕の影
カマキリは音痴だからと歌わない
男下駄仕舞った場所も忘れられ
いろどりで自分をだます万華鏡
ポケットのうそが浮いてる洗濯機

川柳塔のぞみ 12月句会

日時 12月25日(火) 13時
場所 銀座区民館(地下鉄東銀座③出口)
宿題 「添える」「ボール」「これから」
欠席投句 12月22日必着 各2句「自由吟」1句
〒193 0832 八王子市散田町2-31-3 播本充子宛

装いを変え雲秋を告げに来る
秋最中あの世この世の虫しぐれ
落ち鮎を狙うの人間だけでない
せわしない秋よ来年また会おう
静かな森には無駄な音がない

西予市 黒田茂代

真相が微妙に違う人の口
チャックした口が秘密をばらしそう
行く先を時どき阻む記憶力
格差という壁で未来を遮断され
日の丸をどこに仕舞ったかも忘れ

松山市 宮尾みのり

猛暑続きの反動が怖い冬
段畑も棚田も荒れてゆく日本
やがてピンチ来るかも知れぬ自給率
先例に学ばず老舗破綻する
握手した握り具合を読んでいる

松山市 古手川光

『川柳・明日香』

(創刊13周年記念全国誌上大会ご案内)

☆課題 & 選者 (女流作家・5人共選)
「綺麗」

荻原美和子 (きやり吟社・神奈川)
篠崎 紀子 (埼玉川柳社・埼玉)
白崎 道子 (明日香川柳社・北海道)
柏井日出子 (松江番傘・島根)
木本 朱夏 (川柳塔社・和歌山)
2句詠 (表現自由)

用紙 自由 (清記します)
参加費 1000円 (発表誌呈)
締切り 平成20年1月31日 (消印有効)
賞 総合点10位まで呈賞
(同点は到着順)
発表 投句先 『川柳・明日香』20年4月1日号
〒369-1102 埼玉県深谷市瀬山21-9 明日香川柳社 宛

第28回 ときせん賞作品募集

作品 雑詠2句
選者 大野 風柳 森中恵美子
河内 天笑 赤井 花城
小松原爽介
応募締切 平成20年1月21日(月) 消印有効
賞 ときせん賞 準ときせん賞 佳作
表彰は20年5月17日(土)
時の川柳交歓川柳大会
応募方法 便箋大(B5サイズ)用紙に作品2句、
郵便番号、住所、氏名、電話番号
及び所属柳社を明記
応募料 1000円 (定額小為替) 発表誌呈・
切手不可
応募先 〒664-0836 伊丹市北本町2-69-2
山口 千尋 宛
主催 時の川柳社

川柳塔の

川柳讃歌

(36)

木津川 計

心配な人が居るから生きられる

島 ひかる

思い残すことがなければ、従容として死ぬましようか。そうではないからひかるさんは生きてゐる、ではありません。「生きられる」と、むしろ感謝してゐるのである。

他方で、心配な人がゐるのに生きられない人が沢山います。歌人・吉野秀雄は逝く妻を詠みました。「をさな児の服のはころび汝は緒へり幾日か後に死ぬといふものを」。二度目の妻への祈りは「われ死なば靴磨きせむと妻はいふどふかその節は磨かせ下され」と。

金貯める人はやつぱり使わぬ

川端 一歩

中野孝治さんは「清貧の思想」で私欲を求めない清貧の人にはお金が集まつてくる、と述べていました。なるほどと思ひ、私欲を僕は捨て去つて十二年です。いっこうに効き目がないのはなぜでしょう。一歩さんの言う通り使うから貯まらないのです。

大金持ちになる秘訣をですから編み出ししました。買いたくなつたら次の呪文を三回唱えるのです。「もつたいない、もつたいない、これ買つたらもつたいない」。あなたも是非。

億シヨンにも橋の下にも人は住む

山門 タミ

福沢諭吉の「学問のすゝめ」は次の書き出して説かれました。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と。ですが、タミさんの言われるように、人の上に人は居、人の下にも人は居るのです。その存在の軽重ではありましようが福沢の右の言葉の真意は、貴賤貧富の別なく人は同等の権利を持つということでした。

億シヨンの人間は「人生双六」の勝者ではありませんが、橋の下の敗者が疎んじられてはならない。これが民主主義というものです。

哭きながらひたすら走る夏の穂

松原 寿子

「鞠と殿様」は西条八十の作詞でした。江戸の鞠は垣根をこえ、屋根までこえて殿様のお駕籠に飛び込んだのです。紀州へ行った鞠は「山のみかんになつたげな／赤いみかんになつたげな」なつた。鞠はみかんになりました。一心で紀州へ帰る殿様の行列を待っていたのです。念すれば花ひらくのではありません。行動せねばならないことを教えています。

寿子さんの「夏の穂」は、夜空に輝く丸い月になつて泣きながら走つてゐるのです。

宮仕え終えて自分の時計持つ

江見 見清

長い間「宮仕え」は嘆かれてきました。狂言「武悪」は六百年の昔に「致すまいものは宮仕ひ」と言い、「菅原伝授手習鑑」も「せまじきものは宮仕ひ」と松王をして悲嘆させ二六〇年が経過しました。

それから今、見清さんが自分を殺して耐えた宮仕えを終えたのです。長い間「苦勞様」でした。これからは自分を生かし楽しむ自由の身です。しばらくは羽を伸ばすことです。

ゆつくりと花を眺める年になり

林 昭三

若い頃思いました。盆栽をいじる老人にはなるまい、と。路傍の草花に目も呉れようとしませんでした。義母が亡くなり、育てていた鉢の花が全部枯れた中に一鉢、暑い夏を生きたのびた芙蓉に気がついたときの驚きでした。それから僕は花を育てるようになったのです。ペランダに並べた紫陽花他に来年も元気に咲いてくれよ、と毎朝水をやる長い待機の楽しみです。ですから昭三さんの気持ち分かります。老いるとは自然と共に在ることを知ることだ、とこの頃つくづく思ふのです。

〔上方芸能〕誌代表

自選集

小島蘭幸

斉藤 嘉

千の竹千の灯りの幻想や

竹の灯りのひとつにかぐや姫がいる

竹の灯の重なり合うて蝶が舞う

竹筒にいたたく癌封じの酒よ

竹の灯りを辿ると古い街に出る

小西雄々

塩満 敏

生き抜いた生命へ早い十二月

ハミングで株式欄に目をとおす

悲しみを忘れる酒が多すぎる

墓場から夕陽動かず離れない

大敗をしたのは去年ラスベガス

小林由多香

新家完司

宝くじ一億の夢まだ捨てぬ

出直しへヘアースタイル変えてみる

天高し安近短の旅を組む

チャンスには強いがいつも出番ない

どなたにもやさしい人で頼りない

赤とんぼ唄うと邪心飛んでゆき

いつ来てもははの匂いのする小川

ダム底で眠り続けている伝記

ふるさとに帰って来いとりんご箱

やるだけはやつたと子等の野球帽

金木犀秋を忘れず咲いている

秋が来て棚田の里は稲刈りだ

故郷の友は帰郷せよと言うてきた

冷房が済むと暖房待っている

孫達の結婚式まで生きたいな

夕方の頭の中は酒のこと

焼酎を傾けながらメザシ焼く

貝殻節うたうといくらでも飲める

お酒さえあれば鬼とも打ち解ける

うまい酒飲むただけに生きている

玉置重人

真相を葬り去つて以下余白
掛け捨てたる保険も幸せのひとつ
愕然と段差でこけた足を見る
ドクターを見ると血圧上がり気味
人褒める話相槌打ちやすい

恒松町紅

のろいのがいいよ貴方も歳だから
血筋かな自慢したがる癖がある
もう八十路浅瀬を渡るのも疲れ
軍隊の余得気軽に鉤つけ
またしても三日坊主の思いつき

津守柳伸

虫の声話相手が欲しくなる
めぐりくる四季へせつせと種を蒔く
吟行の笑顔集めて酔芙蓉
感謝する心潤いある喜寿
しごきにも耐え幕下で通す自負

遠山可住

一陣の夜風へ栗の秋終る
一泊の湯へやれやれの秋が済み
トランクに秋をつめ込む里帰り
念仏も半分老いの寺巡り
失業はしない石ころ拾う畑

都倉求芽

神さまに言えないこともある祈り
転がりそこねて角がまだとれぬ石
この次の潮満ちるまで旗を振る
ライバルの手紙のなかの広い海
のびてゆく平均寿命と肩を組む

土橋螢

秋色をたたえる恋をもうひとつ
漱石の虞美人草を読んでいる
何糞と舌打ちをして稲を刈る
来た道をもどる親孝行がある
心臓が動いていると医者が言う

西出楓楽

隠し球投げて仲間にしてもらう
美しく老いよだなんてジョークでしょ
昼寝から覚めるときと異空間
忘れたい忘れたくないバースデー
生きるとや今日も米研ぎ菜を洗う

仁部四郎

未練とはナニかおカネと言う人も
給食費払えぬ親の罪はナニ
ブルが来たシヤッター街はナニになる
村は市に忠霊塔はナニになる
永田町ナニがナニしてナンとなる

波多野 五楽庵

八十田 洞庵

焦点の合わぬ理屈に蹴躓く

目を閉じて昔に還えるすべがない

鳴き砂が途切れてからの挫折感

湖に白い涙の過去がある

放浪記書いては消した雪あかり

林 瑞枝

両川 洋々

稜線の一途なものを追うて朝

冠雪した暗夜行路の大山仰ぐ

故郷の風に生命を洗われる

あの人の余韻が星に流れ着く

よく旅行したな川柳ふたり旅

宮 西 弥生

阿 萬 萬 的

すこし間をおくとすこしずつ愚がはれる

残り火の底にまだまだいのちの火

悠久に流れる雲を追う泥まみれ

美しい時間とたたかう花の首

上げ底の器にまつられているサンマ

森 下 愛 論

板 尾 岳 人

老いの身に注射一本耐えきれぬ

せち辛い世に出回っている粗悪品

鉛筆を削り直して一句書く

流れ雲僕は駆けっこがしたくなる

名月も雲の流れで四角見え

湯上りの素肌女を取り戻す

トントンと雨がたたくよひとり寝に

尾の切れたトカゲどこかでミスしたな

台所母の仕草に無駄が無い

戦争の無い貧乏は我慢する

人生暮色夢のつづきはいつ見るの

僕の余命神よ断言できますか

火の辻を曲がると修羅が待ち伏せる

石を積み罪の数だけ積んで逝く

愛だつて無尽蔵ではないはずだ

曖昧模糊しみじみ自分の頼りなさ

背伸びした一言悔いる帰り道

自問自答ほんまに頼りなく思う

玉虫色はやけたまんまする答え

世渡りのうまい男のうすい影

天長節お祝い申し上げ候

天皇も僕も生れた十二月

金借りるほどではないが十二月

いつもやの並で済ました十二月

戦争が始まりました十二月

奥田 みつ子

井の中の蛙のままに古稀になり
思いがけぬハガキ舞い込む昼下がり
旅ひとり得がたい友に囲まれる
ブルースもタンゴも流れ生きたとは
気まぐれに生きてみようかこれからは

河井 庸 佑

しなやかな柳に思う処世術
山頂でひと味違う水を飲む
誘われた釣りが今では趣味の道
マンションが建つて借景様変わり
逆転のテレビ思わず止まる箸

川上 大 輪

これからをどう乗り越えていく 乾季
妻が逝ってから隠れるとこない
都合ならいつでもつける葱坊主
鰓呼吸ぐらい練習しておこう
流れ弾が今日も浮いている湯船

木村 あきら

小豆島見渡す丘に川柳碑
北風に笑顔で帰るランドセル
夕茜明日の晴れを信じよう
虎落笛鳴らして寒気団が来る
地球儀も大掃除せむ年の暮れ

温故知新

豊中市 戸田 古方

おのこありき小林一三傳を読む
ただ酒へ社長になった生徒と座り

大阪市 川村 好郎

御遺骨と一緒に下船^おりて拝まれる
嫁付けたらもう死のうナー女房

大阪市 正本 水客

幸運に包まれている齒の白さ
バスの窓打つ雨の文字旅愁の字

池田市 黒川 紫香

兎も角も女きれいに死にたがり
みんな寝てしもうて母のいゝ月見

鳥取市 杉谷 湖山

悲しみの中にお布施の相談す
鳥取の砂丘に佇てば異国めき

『川柳雑誌』麻生路郎主宰
三三一号（昭和二十九年十二月号）

水煙抄

西出楓楽選

岐阜市 平野 あずま

友呼ばか独りで飲もかヴィンテージ

着古したスーツに飾る赤い羽根

大会の投句へポストまで選ぶ

私の函だが鍵は妻が持つ

自動ドア小笠原流など不要

お見舞いの嘘と知ってる苦笑い

今治市 塩路 よしみ

花いちもんめ唄えばそこに里がある

みの虫は糸にすがっていて孤独

過去語る母がおんなの顔になる

燃えつくす花のいのちをいとおしむ

和菓子よしお薄の秋へ湯はたぎる

漬物の石に母さん自負を持ち

大阪市 原田 すみ子

やさしさを知るほど愛は深くなる

句を書いたノートに見える苦心跡

なにくそと思えない日は早寝する

漬物がうまくて箸を持ち直す

うまいなあそのひと言が決定打

月以外誰も見てないラブシーン

奈良市 乾 春雄

ふり向けばあの日が還る風の音

まだ海の夢を見ている冷凍魚

句読点喜寿を過ぎれば多くなり

読めばすぐ焼いてほしいと女文字

しきたりを頑固に守る白い足袋

延びている寿命の先に地図がない

堺市 大久保 伸子

何もかも運命にしてまでもがき

嘘おいて帰る見舞いの足重く

どん底におちても弱味晒さない

忘れることが普通になつてくる怖さ

スマイルの裏にも別の顔がある

人間の勝手に耐えている地球

豊中市 神野 宇乃子

ごみ屋敷にならない前に大掃除
旅したい手抜きの家事も放り出して
めんどくさ息をするのも食べるのも
お前もかしっぱ振らない犬のウツ
顔洗う手を止めている猫のウツ
箒折れ飛べなくなった魔女の鬱

池田市 上嶋 幸雀

五感ゆったり遊ばせている秋日和
こだわりが秋の夕陽に溶けてゆく
思いつ切り背伸びしてみる秋の空
逢いたりぬ想い募らす秋の風
金木犀人恋しさを掻き立てる
台風が去って無罪のような空

紀の川市 木村 徑子

深呼吸森のサブリを溜めている
スランプを抜けた回遊魚になった
限りある道でいのちの詩うたう
お静かに晩学が今羽化をする
送信受信恋のメールが止まらない
エンドレスの戦してます草を引く

大阪府 伏見 雅明

カルチャーで肩書消した名刺出す
代償は何も求めぬ親ごころ
週末に妻をねぎらう皿洗い

不器用な幹事でいつも足が出る
年金のハンドル妻が離さない
大空を飛ばない鳥も羽を持つ

府中市 藤岡 ヒデコ

したたかな女意外とよく笑う
DNAひょんなところで顔を出す
出不精を促す祭り太鼓鳴る
秋風にそぞろ芽をふく旅ごころ
熟年の歩みに影も自信持つ
趣味ひとつ生き甲斐にして秋日和

阿波市 三浦 千津子

媚びるより批判するのも生きる術
晩酌にとけ合う至福秋夜長
ユーターン回顧しきりの散歩道(阿波へ移住 2句)
古里でしつかり根付く種を蒔く
忘年会持ち歌ひとつプラスする
願い事控えています神無月

豊中市 松尾 美智代

勢いがなくなつてゆく歯が抜ける
言い勝つて寂しくなつてゆく心
親不孝せめてお墓に花と水
頑張った自分に贈る一人旅
単線の駅に降りれば虫すだく
山の端にふくらみ出した月を見る

東京都 井上 つよし

横浜市 川島 良子

想う度に胸熱くなる過去があり

秋風に人も草木も生き返り

紅葉銀杏祭のように風に舞い

養生訓の教え身に沁む水枕

わが家でも一円チエツクされる破目

昭島市 野口 忠

肉ジャガの湯気でおふくろ味見する

飲み切れぬ爛酒妻の手が伸びる

三歳で口はいっぱし紙おむつ

肉になる明日も知らずに草を食み

まだゴミじゃないと粹がる花筏

立川市 柏野 遊花

丘一面の花が叫んでいる平和

引越しのゴミに物欲論される

らしさ楽しさ嘘に感動映画館

浄土まで送ってもらうのもお布施

手書きより活字のほうが冷静で

横浜市 金森 徳三

浮世の義理出す一方の倅せか

仕合せはなにはともあれ今日の無事

春夏秋けじめがつかず冬が来る

行きたいね座敷わらしの居る旅館

炎天下干ものになってバスを待ち

積み上げた歴史の中に今がある

パピペボ食事の前の口馴らし

ハイチーズ作り笑いが氣にくわぬ

優柔不断な男バツサリ切る女

笑い声漏れて寂しさ増す同居

横浜市 長島 亜希子

自分のこと分かつてるよで分らない

友人と墓が近所さんになる

旧姓に戻った友が弾けてる

物はもう要らぬと言ってシヨツピング

美しい国日本は泡と消え

藤沢市 加藤 スズコ

ほんやりと素顔を見せる昼の月

久びさの里の田んぼの様変わり

支えられ十五夜拝む車椅子

秋雨のさそいに乗って琴の弦

祭半纏遠い日ゆれた淡い恋

佐渡市 高野 不二

税納めたいふるさとの村はなし

家にいる時は内から鍵をかけ

福祉福祉と言うけど良い目には会わず

肩書がついて趣味から遠ざかる

人の出すごみにも腹を立てている

尾道市 木曾一徳

ミラノ着ジェットストリームボンジュールノ

チューリッヒ湖畔に浮かぶヨット群

インターラーケン中央アルプス雪の峰

ベネチアのゴンドラ波に身をゆだね

サンマルコ黒すみバスタおはぐろに

北名古屋市 片岡文男

お彼岸にだんご供えず月見する

暦だけ気候を待てず先に行き

ネタ探し教えてほしい週刊誌

お見舞いと香典続く季のかわり

暗算が苦手でレジを信じきる

京都市 清水英旺

満月が狼男の気にさせる

街宣車のがなる軍歌に暑気つのる

句作りに一粒の脳髓ほぐす

天高くなつてすじ雲旅誘う

生きのびた十月の蚊に血を恵む

大阪市 太田としお

長島のサインはほくの宝物

赤穂義士しのびコタツでひとり酒

それ以上脱げばおまわり飛んでくる

すれすれで通ったわりにでかい顔

左に寄せて拝見します免許証

大阪市 尾崎黄紅

嫁にいく嫁もらう孫老い忙し

頂点に立てない趣味で続けてる

ひらがなの風情が好きな原稿紙

教科書の嘘靖国も哭いている

ふところにやさしさだけはたとある

大阪市 坂裕之

共通の敵を作って仲直り

それなりの器で今もそれなりに

マツタケは嫌い避けて秋淋し

五十年感じさせないクラス会

病んで知る働くことの幸せを

大阪市 田浦實

ごろごろと夕立告げる天の声

夕立のおかげで車びっかぴか

よう粘る頭が下る残暑かな

大風をしながら躲す萩の花

さざ波と風がデュエット月が指揮

大阪市 寺井弘子

手おくれの顔色々塗るが変らない

社保庁に必要な空気清浄器

お人柄柄になる糸紡いでる

うっかりと本音をもらす深い酔い

母の記録涙の跡が多すぎる

大阪市 山本 加お里

失った記憶を戻す子守唄

いい風を運んでくれた散歩道

もみじの手親の真似して手を叩く

甘えたい里が恋しくキユンとなる

爪に火を灯す老後の税負担

大阪市 吉内 福世

共に汗子供だんじり引き回し

子に帰り参加楽しい秋祭り

祭りこそ会えない友と話出来

しがらみを捨てて総出の祭酔う

大勢で飲む水あめも祭り味

大阪市 吉川 弘泰

猫の手を借りても済ます年の暮れ

思い出が多くしみてる雑煮椀

一年を早い遅いと走馬灯

書き初めの墨を求めて奈良の里

軒下を風が通って吊し柿

大阪市 吉田 富美

ふるさとに昔からあるなんでも屋

杖ついて歩けるだけでありがたい

ふるさとは世に置き去られ木守柿

日本語はタテ書きが好き美しい

春に咲く球根選ぶ植木市

池田市 多田 契子

火のように燃えた恋もと言っておく

魂が五分ある虫に怒鳴られる

身の丈に合った豊かさしか知らぬ

すれすれの悪が山ほどあるネット

残照をふりまき家族今二人

泉大津市 助川 和美

彼岸花今年も来れた墓参り

日焼けの子受験モードに切り変える

リバウンド恐れやらないダイエツト

おしゃべりが御馳走になるクラス会

炊事洗濯未履習のまま嫁に行く

泉佐野市 稲葉 洋

病歴の頁だけ増す回顧録

何もせず何も無ければ及第だ

生きている証病もすり傷も

一二の三ぐらいじゃ啖呵出ぬ小者

格好よく幕引きたいが芸も無く

泉佐野市 備後 三代子

茶を供え今ある命南無阿弥陀仏

ゆらゆうら余生を風にやじろべえ

夫のいぬ庭雑草に陣取られ

若い衆撫でて眺めて松手入れ

旅鞆いつもお伴の陀羅尼助

河内長野市 内海綾乃

秋刀魚安家計をちよつと助けられ

暑くるしい草早く刈つてとうったえる

虫の名前事典で調べ憶えよう

古里の墓参りする身内いず

猛暑では柿可哀相色やけて

河内長野市 黒岩靖博

シロップをかけた本音に刺がある

売る極意自分の魅力つけ加え

店じまい何時もカンバン出している

盆踊り浴衣の君に一目惚れ

逆上りきつと出来るよ頑張つて

河内長野市 針生和代

幸せの種を播いてる母の笑み

五感みな解き放してる風の中

ひと言でその場の空気まるくなる

運動会どの児がうちの孫かしら

糠床にビール昆布を馳走する

岸和田市 坂口英雄

ダンジリ祭り終わった後の湿布染

定年で匠の腕が泣いている

知事よりもタレント業が忙がしい

地価上る記事を読んでも青テント

蛇口からもつたいないが漏れている

岸和田市 中岡香代

どの飴も見向きをしない反抗期

この胸の奥でのたうつ善と悪

お位牌の値段で変わるありがたみ

いつもある空気と水にありがたう

糞害の鳩も平和を祈つて

堺市 荻野像山

止めようと思つた酒のうまいこと

埃の中から出てきたような議員さん

百均の買物悔いたことがない

どこ向いて行くにも妻が杖になり

頭が高い婿も鴨居にかなわない

堺市 羽田野洋介

吹く風が四季の童謡連れてくる

間をおいたつもの後が続かない

薬にもならぬ話を長々と

さよならを笑顔で言えるうちが花

目印が変わり戸惑う待ち合わせ

吹田市 藏田光子

気分転換万華鏡手に空を見る

散りばめた思いを繋ぎ万華鏡

坂道でひとりに惜しい月を見る

帰り道のんびり笑う昼の月

阿吽で過ごせた日々が遠ざかる

吹田市 二宮 栄子

高槻市 安田 忠子

独り身へとなり近所の温い風
噛み切れぬ奥歯に残る遠いうそ
いい事がいっぱいほしい欲ですか
せつかちを反省してるサロンパス
ぎこないお経亡夫に笑われる

吹田市 早泉 早人

健診に行くとは病名ついてくる
すんなりと心を開く病み上り
元気だな今年も届く里の秋
ほどの距離を保つていい夫婦
慈しむ形に開く彼岸花

高槻市 片山 かずお

元氣そうに見えるが実は葉浸け
付き添っていつて患者に間違われ
苦勞した人だ笑顔が温かい
都合よく聞こえなくなる耳を持ち
妻に無視されてケンカも始まらぬ

高槻市 笠原 乃りこ

師の逝きて腑抜けた我に月蒼し
秘境の宿夜半に目がさめここはどこ
あちこちの句会に出てはマーキング
猫なき止み恋は成就か物別れ
モーツァルト聴いたビーフへつつく箸

懐かしい我が古里は美草園
染みついた大阪弁に孫笑う
亡き家族それぞれ思い出す庭木
毎日が今日まで生きた最後の日
かぐやから地球の写真届く謎

豊中市 荒巻 夢

たんか売り去るに去られず買った鍋
神様に啖呵切りたい時もある
ひもじさを知った仲間で許し合う
おさわがせと言つてかしまし回収車
星月夜母の上にも降りそそげ

豊中市 源田 啓生

薄雲を静々脱いで月ひとり
果物が熟れて始めるダイエット
いつまでも熟女のつもりルージュ引く
シャワー未だ夏を離さぬ氣勢あり
老いの字に厭いて私のラブソディ

豊中市 谷川 勇治

このことやつぱり来たな八十五
諸行無常失うものは何もない
四面楚歌猫と炬燵にもぐりこむ
白旗はまだ振らないぞ八十五
指切りのあとのしまつに弱つて

寝屋川市 岡 本 勲

流れ星きつといいことある予感
写真帖めぐり亡母とはなしする
曲り角いくたび越えてきたか古稀
脳味噌にカビが生えたかよくとちる
人生のよごれ落して遍路旅

寝屋川市 北 田 ただよし

吹く風の向きが気になるアキアカネ
船が出るテープがひとつ切れぬまま
ツッコミもボケも混ぜこぜ老いふたり
眠る時間がだんだん長くなる傘寿
いのち重くなり体重減らす母

寝屋川市 森 田 麗

しみじみと合せ鏡で項見る
コンビニの町に人情薄くなり
淋しさも愚痴も孫見て乗り越える
語り種になつて亡夫の安来節
一合の焼酎亡父へ秋彼岸

羽曳野市 松 本 静 子

松の木は菰を巻かれて春を待つ
まん丸い月を眺めて湯にひたる
湯に浸り洗い流した胸の内
木犀の薫りにわたしようてます
古里のお墓参りもままならず

羽曳野市 森 下 一 知

秋の下順位をつけぬ徒競走
ライバルに先入観がこびり付き
早口の語尾にくつつく国訛り
散歩道蟬を拾えば急に鳴き
土壇場で縋る邪教に引かかる

羽曳野市 吉 村 久仁雄

十五夜がきれいと言った六十路越え
行く道に迷えば風に訊いてみる
欠点もあるが笑顔の妻に惚れ
人間の方が擬似餌によく掛かる
八起き後のピンチに余力もう持たず

枚方市 小 川 良 吉

理不尽な部屋のいじめに散る力士
諭吉さん別れたのかすぐ家出
特攻の別れは挙手に想いこめ
マドロスの別れは銅鑼でブルースに
夢うつつひらめいた句は朝ぼつに

枚方市 小 林 わ こ

半額とチラシに負けた市場籠
悪女にも淑女にもなる帽子買い
未練いっぱい秋も半ばの百日紅
喜怒哀楽つなぐモチーフ身に纏い
口喧嘩できる友いる安堵感

枚方市 二宮 紫鳳

八尾市 赤木 妙子

ハワイ旅すべてアローハで事が済み
ハワイアン流れて街は眠らない
ブルメリア香りに染まるハワイ旅
月見酒夫婦の仲も丸くなり
りんどうを活けて友待つ秋の風

藤井寺市 津田 シルク

八尾市 笹倉 ひろし

メタボリのカラス森へは戻れない
いざとなればニワトリとんで身をかわし
相槌が打てない話うなるだけ
命の網点滴ポトリポトリ落ち
電動のママチャリ今朝も託児所へ

藤井寺市 増井 ヨシ枝

八尾市 田邊 浩三

スフィックスの姿で座る猫のタマ
豪邸に老夫婦だけ虫集く
ここだけの話に戻るブーメラン
新築の主は朝晩ホタルする
夏瘦せが戻らぬままの預金帳

藤井寺市 吉田 喜代子

八尾市 西川 義明

食欲の秋値上げに主婦の痛いところ
敬老会招きうれしく老いも知る
ふと秋に義母の仕草を思い出し
甘い水心の欲を引き出され
こんなにも働いていた足の指

ありがたい家に電気も水もくる
言い訳はしないで笑顔だけ返す
一病を持つ友がいて労われ
十指みな負荷分け合って睦まじい
旅馴れた孫の荷物の小さいこと

名舞台ズシリ支える馬の脚
気まぐれなペット家族を目で使う
危機感が鈍り余生も風に入る
新米を食べて食べてと穂が急かす
南無阿弥陀仏きょうも一日背を伸ばす

足跡を時が静かに消してゆく
石橋も吊り橋も渡り古希迎え
根性に少々しわが寄ってきた
お互いにシルバーシート譲り合い
一泊のビデオで元氣取り戻す

赤字家計言うてる妻がヴィトン買う
母さんへ電話をかける今朝の冷え
神様が誰に矢を射る宝クジ
昭和史を開けば核の傷の跡
父母が鎮座まします喉仏

八尾市 前田 紀雄

秋風に背なを押されて山歩き
溪流の音が聞こえる額の中
雑念を払い真つ直ぐ明日を見る
過ぎ去れば笑い話になる苦勞
たつぷりの秋をほおばる零余子飯

八尾市 松葉 君江

根性をこやしに花も実もつける
壁に耳天は悪事を見逃さぬ
お化粧は自宅の鏡老婆心
ころころと変わる祝日いつだっけ
うすよごれた辞書が私のよき伴侶

八尾市 脇 俊子

絵手紙に日々の暮しを折り畳む
のんびりと腑抜けて居れぬ電池切れ
足元がもつれぬ先の風を読む
泥水を諸に被るが意地曲げず
朝目覚め生かされている鳥の声

大阪府 小栢 こずえ

苦勞だと思えば苦勞それも糧
戦場に向かう気持の朝の床
花だけはいつも笑顔でいてくれる
体操でカロリー減らしケーキ食べ
終章を飾る草木は赤く萌え

大阪府 神野 千恵子

友といて他人という字暖かい
似顔絵の鼻をすこし高くする
傾いて自己主張するピサの塔
カレンダー通院の日も星印
顔の皺の遺伝子そのままに

大阪府 若月 裕作

卓袱台にトマトの赤を盛りつける
味覚の秋梨と柿とが競つて
赤トンボ追いつ追われつ仲がいい
待ち伏せの藪蚊に追われ水をやる
納涼に貴船の床がきしみだす

神戸市 木村 忠義

メーターの上がる手前で下車にする
美しい心は老いてなお持てる
賞罰のない履歴書をよしとする
世渡りが下手だが妻は居てくれる
国産の表示に懐疑的になる

明石市 糀谷 和郎

定年の朝の日差しは柔らかい
定年へ温めた席が次を待つ
定年へ迎えた秋は長すぎる
目覚めるとプランしたがる脳がある
心配と希望が絡む再就職

尼崎市 加川 靖 鬼

加東市 安 達 厚

犬好きは犬の目線で話しかけ
地震波を鯨は髭で受けている
ジャンケンも各地各地にあるルール
点滴をつれ歩いてるホスピタル
癌細胞お前が急いてどないする

尼崎市 河津 正 治

篠山市 谷 田 多美子

持ち前の鈍感力で世を渡り
安心を与えて育つ母の胸
同居して同じ夢見る難しさ
その頃はつぶらな瞳輝いた
天誅に似た猛暑日がある温暖化

尼崎市 小池 幸 子

三田市 上 垣 キヨミ

愛犬の終の別れの穏やかさ
趣味の会作品並べ自画自賛
御免ねの一言が出ず無視の刑
空に月虫の音添えて夜は更ける
彼岸花今年も同じ場所であう

尼崎市 藤岡 り こ

三田市 白井 二 英

姑は他人と悟る遺産分け
切り抜きにメモ添えてある母の文
キャンプの夜プラネタリウムあると孫
父の役息子引き継ぐ鍋奉行
慣れた頃新機種に替え四苦八苦

暑いねえほんまになあと誰とでも
この夏はエアコン様と申し上げ
つまらないことでも妻となら笑う
名月が出てると庭に出る
お葬式だから出会えた遠い人
名月に今朝から寒くなる兆し
十月の氷雨に昔振りかえる
診察券一枚増えて夏が近く
八十二歳欲もあります浮かれます
朝の膳干物も小鯛海の宿
迎春の準備毎年今年こそ
アイスからホットに嫁の茶がうれし
お歳暮の中に優しいメッセージ
携帯に頼る漢字の送り仮名
突然の秋に震える虫の声

出し忘れ叱られているゴミ係
忘却は都合によって許される
指を折ることないだろうリズム感
引き合いに出された末にけなされる
辛抱をすれば晴れると限らない

三田市 阪本 藤 朗

喜怒哀楽屋根で蓋した家並ぶ
皆さんと一緒今夜もサンマです
気候よくなつて医院の客が増え
タンカーを掠めて夕日海に落ち
夕暮れをいま灯台が待ちかねて

宝塚市 丸山 孔 一

妻は言うお酒だけでは生きられぬ
退院後二三日だけ勞られ
旅のピラ額と日数を計算し
繰り返すニュース飽き飽きテレビ消す
霜柱音懐しい山の道

西宮市 石野 照 代

木枯らしに昨年続きの毛糸編む
義理を欠き気になりつつも年の暮れ
折づるの形がだんだん丸くなる
ふて寝する背中が少し泣いている
期限切れ夫の皿にそつと盛る

西宮市 藤 木 直

聞き上手内緒話を耳に詰め
メロンよりリンゴの好きな子に育て
ピストルで撃たれた話日本です
美しい敗者に拍手音高く
ゴミ出して隣近所の顔を知り

西脇市 七反田 順 子

青い空秋のタクトを振っている
秋分を飾ってくれる彼岸花
忘れてた父の命日詫びに行く
アンテナが低いとニュース届かない
道の駅地場産を買う人の列

三木市 広瀬 房 江

ぶどう狩たつた一房食べ切れぬ
大臣になれば出て来る脛の傷
診察券一枚増やし生き延びる
フルートを静かに聴いて午後のお茶
成りゆきをじつと見ている遠眼鏡

奈良市 阿部 茶 々

悴の外泳いでみてはすぐ戻る
気まぐれに切子を買って注ぐ冷酒
路地裏におはん佇む風情あり
墓参りのりちゃんと呼ぶ母の声
家計簿は残高だけを合わしとく

奈良市 尾 畑 なを江

また逢おう言つて別れてそれつきり
辻褄が合うと家計簿合つて来る
まつたけのすき焼窓は全開す
月光にウソのひとつが浮き上がり
飽食の国での餓死とダイエツト

奈良市 矢野良一

真夏日も空はすっかり鰯雲
縄張りを争う鳧のせからしい
雨あがり旨い空気に歩が進む
ウォーキング月は生駒に日は奈良に
コンバイン音軽やかに嬉しげに

和歌山市 柏原夕胡

ほいほいと片付けられぬ恋ごろ
ひとり消えまたひとり消え曼珠沙華
まだ未練あつて捨てられない写真
嘘つきな化粧で本音届かない
土足厳禁ところが病んでいるのです

和歌山市 坂部かずみ

正直な答えばかりの万歩計
心配でテレビ体操やっている
寝転ぶと見ていたようにベルが鳴る
慌てだす予定をたてる十二月
秋風に急ぎ二倍の保湿液

和歌山市 田中すすず

輪廻転生流れはいつも摩訶不思議
神さまと話がしたい日の孤独
言っても無駄と判っているが切る口火
達観をするには苦勞まだ足りず
性格の不一致孤独かみしめる

和歌山市 土屋起世子

芸術の秋に気になる胴回り
自分だけの月を浮かべて露天風呂
冗談も飛ばして介護する天使
病む子抱き自分ばかりを責めている
ラストまで自分流儀でゆくつもり

和歌山市 根田よしこ

秋読書めがねかけたりはずしたり
健康のバロメーターは畑仕事
久しぶり農婦労働のような雨
颯爽と歩けばうつも逃げて行く
長生きも賭け事みたい不幸

和歌山市 堀富美子

返事するよにローソクの灯がゆれる
御先祖の寄進碑ひそと寺の隅
ナツメロがその時々を映し出す
ブランドを持つて離さぬまだ女
余生なお視野に見えないものがある

和歌山市 山田侃太

先輩が残していったプラスネジ
決定打出す牛丼は大盛りに
雑草の庭へ鈴虫来てくれる
失敗を許せる歳になりました
アリバイがないので今日は休みます

海南市 小谷 小雪

歯ブラシがゆうべの灰汁を擦り取る
ほかほかの壮志を皿に載せたまま
今日だけと言われスタコラ買いに行く
カタカナの氾濫漢字おぼれない
大切な時に止まった腕時計

紀の川市 宇野 幹子

頂点の道は険しくなるばかり
嘘ついた口から冬が忍び寄る
本当の雑魚は擬似餌にかからない
絹糸で繕ってやる子の心
自販機が乾いた声でハイどうぞ

紀の川市 辻内 次根

正眼に構えて時をやり過ぐす
太陽と親しくできる二十五度
まだ今日も夢を見る鶴折っている
風澄んで影は跳ぶ気になっている
背伸びして少しのところで届かない

橋本市 石田 隆彦

居酒屋で今日のストレス脱ぎ捨てて
名産地買った品物他国産
預金額確かめながら日々生きる
身に錆が付いた心にある隙間
財布にはいつも絶やさず五円玉

和歌山県 森下 よりこ

華やかな人の周囲に立つ噂
これがまあ行列出来るラーメン屋
時々茶粥梅干アンコール
味噌汁が飲みたい秋になっている
草を刈る私トنبオに囲まれる

鳥取市 大前 安子

故郷はこと告げ来る彼岸花
通い田にやさしい風の黄金揺れ
何気ないやさしい言葉胸開き
すすきの穂手に取り吹けばふわり飛び
立話またねまたねと握手する

鳥取市 近藤 秋星

敬老の日の大役を無事に終え(謝辞)
大勲位君にあげたい真心に
月見茶会主役の月は影も無い
春夏秋冬花の咲かない四季は無い
ホームではサンマ半分しか付かぬ

鳥取市 津村 律子

せつないがベッドの髪を拾う朝
真夜中にしんしん大気身を包む
ビールシャワー巨人ファンも酔ってます
孫が読む絵本の世界夢話す
飽食の日本が餓死を出している

鳥取市 松岡照美

倉吉市 前田喜美子

個人情報守られ過ぎて手間かかる
無二の友老眼鏡と深い仲

カーテン替え孔雀草生け私色

しみじみと茶をすすり添う夜長の日

豪雨なる空の怒りの証だろう

鳥取市 山岡紀子

無理を言う時はやさしい声になる

近所にはやさしい顔を見せる姑

チャンスには縁のないまま生きている

むずかしい話へそつと出るビール

幸せなふりして作るちらし寿司

鳥取市 横田春名

億の挙式テレビに映り祝えない

不器量も老いがすてきな顔にする

毛染めしてひさびさの娘を待っている

古希すぎた息子をちゃんと呼ぶ母よ

身内でもそれぞれタブー守ってる

倉吉市 藤井美津恵

一人居てコーヒータ임は寂しいな

香り良い秋の味覚は素通りだ

一人でも意気込みだけは持っている

日和良し祭の神輿威勢良く

路地通り木犀の花真つ盛り

限界か病める地球が熱っぽい

ご苦労さま今年の夏の洗濯機

重い腰チャンス逃してうろたえる

歯のトラブル秋の味覚に悩まされ

家の殿可愛い孫の馬になる

米子市 小塩智加恵

遠い地の孫の声聞く敬老日

来賓の胸のリボンが反り返る

指しゃぶりしていた孫も二十六

中国産松茸求め誕生日

食べ切れぬ新米担ぎ友が来た

米子市 見山温子

クラス会老いもうきうき若作り

花を摘み束の間癒す野良仕事

年金の枠はみ出さぬ知恵を持つ

うちの獺昔の夢を今も食う

男料理振舞う妻の誕生日

米子市 吉田陽子

口ずさむ歌に昭和のよき時代

日が射してプラス志向が背を押す

弔いの家人事と思えない

大笑いして真実は確かめず

ない袖は振れずひたすら草を抜く

鳥取県 飯野 菖子

母さんの玉の汗から教えられ
人生って長く短い旅でした
それからは考えません進むだけ
嘸むことは長寿のことと忘れない
今日生きて明日の自分がみえません

鳥取県 岡村 孝明

上る地価景気の波と浮かれ出す
すいすいと走る車にローンの荷
すり減った敷居暮らしを知っている
花嫁は華やぐムード醸し出す
省エネを守り地球の危機防ぐ

鳥取県 北村 稔

町の子に新米送り秋終る
もうちよつとなのにナイターテレビ切る
休耕田亡きじいさんのおいする
お父さん働きすぎよ休んでよ
コーヒーよりひえたビールと言にくい

鳥取県 斉尾 くにこ

あくびしてのびして眠る乳母車
とほとほと裸のころろ歩いてく
逆流を起こした血今朝静かなり
ハンドルの遊びに愛を隠しとく
土足厳禁こは少女のテリトリー

鳥取県 橋谷 静江

弱点を支え合ってる夫婦です
恵まれてやさしい人のだ真ん中
毎日が多忙で老いていられない
秒よみで曾孫の誕生待ちわびる
板前になった気持で台所

松江市 相見 柳歩

首ひねり恋煩いを診てる医者
喜んで患者の恋を聴く名医
うっかりとしてたら恋のだ真ん中
退屈な人と思わせ油断させ
君と僕静かに恋を温める

松江市 松浦 登志子

予報より神経痛が先回り
怠け者いい時代を待っている
あの人がずっとキレイな理由知った
食前のところてん食ベダイエット
トキメキのパワーが脳を若くする

出雲市 川島 和歌子

もやもやもゴミと一緒に灰にする
黄金波刈入れ急ぐコンバイン
愛の鞭はらはらさせる問題児
手枕のうたた寝耳は立っている
蕎麦枕喜怒哀楽を知っている

雲南市 菅田 かつ子

安来市 原 煩惱児

緊張の中で咳する二つ三つ

お互いにはちばち惚けた受け答え

夕茜俄かに騒ぐ鳥の群れ

ふと見ると後ろ姿の温かさ

二番手がびたりと付けて来る怖さ

雲南市 武島 ちよえ

新米に陰の苦勞を噛みしめる

聞かれると孫の自慢がしたくなり

ささやかなゴミの協力エコバッグ

計算が好きなお方で遠ざかる

多忙でもお茶飲む刻はとつてある

雲南市 福岡 博利

ローカル線今日は車内に人の影

秋彼岸亡兄は米寿になったはず

年金が孫のくるのを待ってます

レントゲン千軍万馬胃の歴史

自前の歯亡父母に貰った宝もの

雲南市 渡部 好栄

今日は今日明日は明日とわりきって

太陽に逆らう雲の悪あがき

新米の手品師道具にかみつかれ

風に愚痴言つてるように鴉啼く

きつかけはくしゃみひとつの仲直り

いい奴が酒に命を狙われる

美しい日本の夢が破れたり

夕焼け小焼け明日の風を信じよう

足湯して戻れば今日の日が暮れる

憂きことを忘れて孫と戯れる

府中市 岩本 雅代

青空に飛んで跳ねたい里の秋

新米をたつぷり買って安堵する

病む夫も新米食べていい笑顔

今日至福明日の命は風まかせ

身に合ったスニーカー面白い趣味の会

宇部市 高山 清子

口紅で昨日の嘘を塗り替える

どんぐりが陰で牙研ぐ次の椅子

お茶にごすつもりギャグで蹴躓き

慎重という臆病の隠れみの

出る杭が打たれもせず朽ちている

今治市 渡邊 伊津志

決断をすると歩幅に音が出る

やがて咲くバイオに賭ける夢の彩

手作りは繊維が多い蓬餅

幸せの掌を合わすから希望湧く

思うほど相手は氣にしていなかつた

大洲市 花岡 順子

伸び盛り明日を追うてばかりいる
端っこに居る皮肉屋が気にかかる
足上げて歩くと老いに言い聞かす
我慢なら嫌と言うほどして課長
親と子の間に深い闇がある

香南市 桑名 孝雄

王道を歩めばすぐにけつまずく
集合写真真ん中のひと端の人
ご意見はさて置き爛の冷めぬうち
忘却とは君の名はだけだったのに
頼る杖愚妻呼ばわりする勿れ

香南市 近森 功

メルヘンの夢を破った探査船
もう一度噛まれてみたいこの小指
八十の微熱子を呼び孫を呼び
好き好き好き頬にチュウする膝の孫
良妻賢母はてさて妻はどうなるの

高知県 いの 静草

追い詰めぬはつきりしてる力の差
打たれ強くなって狙うはカウンター
知っていることも肯き聞ける歳
感謝せぬ両手の中にある我欲
ややこしいことは言わない青い空

北九州市 岡田 幸生

寂聴の法話に軽くなる悩み
薄味に歩け歩けというカルテ
疑いを招く親切から逃げる
お帰りと旅のあいだに咲いた花
健康という財産を子に譲る

福岡県 林 さだき

上辺しか見えぬ私水澄まし
病室へ朝の光が活を入れ
生きることに楽しくなってきた老後
職退いてもう研ぐこともないナイフ
ひとり旅まなざし変わる時間もつ

唐津市 岩崎 實

踏みしめる一步一步が力なり
手助けの車椅子にて師の個展
知らせてはならぬと事故をふせておく
病床で読書の味をまた覚え
決断は何はともあれいさぎよく

唐津市 北村 松風

故郷の鉄塔消して写生する
鉄塔が二つ三つ増え山変る
飾ってる父の形見の感謝状
大正と昭和を使う十五年
スジ肉が我が家のカレー肉でした

山鹿市 阿部 ミツ子

かぐや号月の世界へ旅立ちて
ブラジルで柔の国が大苦戦
秋彼岸夏と秋とが意地つぱり
秋の日は赤い夕陽で染まり行く
定番のおはぎ戴き彼岸なり

メルボルン 藤原 ポン吉

北向きの日当たり良しにまだ慣れぬ
ドル表示円に直して我戻る
英語だと文句の言えぬ日本人
日本語が通じたとたん威張り出す
手を広げ背伸びするよな青い空

シドニー 三谷 たん吉

国会の野次の汚さ息乱れ
こんなのも議員にさせた日本人
人死なせ解雇で重い処分とか
過失致死解雇で済ます野蛮国
八ツ当りされるテレビも辛からう

シドニー 森本 クックバラ

病院へ走る首相のサバイバル
自決させ己は自決せずに生く
かわいがる道具バットとビールピン
不発弾内に抱えつつ今日も生く
憂き記憶浮きつ沈みつ闇の中

札幌市 小沢 淳

年金を国に狙われ身が痩せる
歯も友も別れは辛いものと知る
ほどほどの欲がからんで人の味
名月にサンマ一本純米酒
再検査あれこれ思い当る節

札幌市 三浦 強一

バイキング高いものから食べてゆく
狂わない時計も味気ないものだ
その先を知って言わないのも情け
蒼天に脳細胞を解き放つ
北国のロマンを掬うひしゃく星

日立市 加藤 権悟

一様に祈るかたちですすき揺れ
ユーロなど無縁明日の鎌を研ぐ
豊穡の四季に祭りと唄がある
雑沓を師走の風が気を急かす
健康を馬齢ひとつにありがとう

栃木市 岡野 すみれ

金貸して出世払いという情け
明治とはかくも懐し古着買う
柚子の香よ昔々はいい身分
一杯のうどん分け合う日が来たり
かけ引きを知らない父と子のケンカ

横浜市 巖田 かず枝

授乳室増えてデパート活気付く
手を抜かず食育まずは離乳食
眠ってた着物ドレスに変身す
フランスのみやげ中国製とあり

大阪市 江島谷 勝弘

人の世は仏心で生きられぬ
延々と続く会議は不効率
カラオケは音痴の方が盛り上がる
月の裏あばけばロマン消えて行く

大阪市 澤田 定子

世界陸上メダルの重さ銅一つ
鉢植の稲穂も頭下げており
大臣のポストに届く七光
次世代の角界案ず今朝の記事

大阪市 萩原 大朔

いい知恵がないからひとの金を撒き
しずかさやパソコン相手の打合せ
大声の老兵ひとりまた去りぬ
脱皮などしない老舗の粘り腰

大阪市 橋村 容子

久し振りに生花活けて気をほぐす
おみやげの匂い袋が威張ってる
ダンジリにかける男の意地に惚れ
息切れのハイビスカスに水をやる

大阪市 平井 露芳

ニュータウンオールドタウンでみんな年
水族館寝てる魚も見せまっせ
不眠症同士気が合う神経科
カラオケの先ずは一曲千の風

茨木市 島田 誠一

宮仕え賭ける上司を値踏みする
賭けるもの無い者同士顔が寄り
告白のこだまは山に捨てたまま
物分かり良すぎて筋を取り違え

門真市 矢阪 英雄

鍼灸の針が快方道開く
皮膚通し全身凝りが散って行く
中国の気功に気付き人気呼ぶ
新機器の設置噂で足が向く

河内長野市 木太久 正一

金木犀忍者のように香りくる
秋刀魚焼く匂い流れる路地が好き
同窓と本音で語り合った宿
お洒落には元気の効き目きつとある

岸和田市 米富 淳風

ママで金お見事でしたやわらちゃん
茶柱に寝るまで期待捨てませぬ
うやむやに慣れて私は悔いばかり
美容から生きたためのダイエット

富田林市 古田 千華

藤井寺市 俣野 登志子

錦繡をまとう穂高に張るテント
穂高の夜降る星空に胸が鳴る
祥月の父が好んだ小豆がゆ
ふくふくとこの人余命五年とは

寝屋川市 小嶋 みさと

浮世には不条理という枷があり
テノールの偉大な星が世を去りぬ
忠告を聞かず今の不倖せ
老後には生きるテーマが難しい

羽曳野市 仲谷 真一

私よりお洒落な案山子風に揺れ
食品の安全神話消えていく
原発も安全だとは限らない
あたり年良い事無くて過ぎてゆく

枚方市 坂本 ミヨノ

風向きが変らぬうちに旅に出る
猫と私日向ぼこして満たされる
誕生祝やっぱり諭吉様にして
名医にて二時間待ちもがまんする

藤井寺市 伊藤 アヤ子

赤い羽根胸にちよっぴり威張ってる
食欲の秋何にでも手がのびる
秋雨に急がされている衣更え
コスモスが揺れてやさしく頬撫でる

満月が孫の笑った顔に見え
目覚しが鳴ってる早く目が覚めて
思い切って捨てられなくて狭く住み
下戸二人寝酒のはずが笑い酒

箕面市 寺井 柳童

青春に答を出した佐賀北校
開票ゼロ早や当確の画面でる
山の宿月と混浴露天風呂
秋ですねオウム返しに秋です

八尾市 田中 トシエ

いろはからABCに変わる恋
神無月貧乏神に居座られ
バーゲンのチラシ目につく衣替え
ほどのよい返事が何となく不安

八尾市 寺川 はじむ

一か八か賭けると決めてまた迷う
やんわりと急所を攻めてくるジョーク
温暖化柄だけでかくなる野菜
メタボ症聞いてシューズを買い揃え

八尾市 中島 春江

栗飯の皮むく苦勞嫁知らず
猫じゃらし誰彼となく愛想よく
秋日和夫より外出多き妻
出そうなるくしゃみ出ぬこのもどかしさ

大阪府 安藤 なつこ

お向かいのビルの窓みてる月見

負けまいとムキになるから負けるねん

髪の毛を染めて第二の人生へ

ゴキブリを殺し野性の血がさわぐ

大阪府 高木 道子

どんな風受けても燥ぐ猫じゃらし

平凡という幸せ今宵サンマ焼く

ブライドを充電させて虚勢張る

夕陽去り秋冷え里に忍び込む

大阪府 西川 冷子

焼岳の噴煙溶け込む夕かすみ

元番犬仰向けで延び昼寝中

セキレイはいつもつがいで拍手とる

桜の葉風と戯れ舞い上る

大阪府 畑中 節子

一葉落ち秋の空気が小刻みに

明日こそと背のびしすぎて迷う日々

いたわりの言葉戴くほどに老い

バイキング食べきれぬほど皿に盛り

神戸市 武田 恵美子

一族があつまり交換ポチ袋

トタン屋根大雨のとき声きけず

いらぬもの整理しながら足場なし

子育てが終りこれから孫の番

尼崎市 桑原 東園

赤とんぼ竿の空くまで飛んで待つ

ステップ踏む二人は愛の曲に酔う

花時計デート見詰めて止ってる

パソコンの世に達筆の逞しさ

加東市 岩本 美緒子

ベレー帽似合うのわたしグレー髪

同窓会嫁にいい顔見てもらう

嬉しさがいつか佯しい敬老日

迎え出る愛犬に負け菓子一つ

加東市 黒崎 美紗子

講習の美味しい料理アイエッチ

日本人ばかり日本語ハワイ旅

雲海を飛ぶふわふわと寝てみたい

野菜たち元気だったよ旅の留守

篠山市 永井 かほる

ゆき帰りにやしてくれるコスモスよ

菜園の芽立ち喜び分かち合い

朝がたの夢の続きが見られたら

新米とまびきな漬けてまた太る

三田市 辻 開子

衣替え夏から冬へジャンプする

娘と歩く介護の道も先が見え

新米で豆ごはん炊き里の味

食欲も里にも秋の匂がくる

奈良市 田中賢治

湯浴する美人画そつと目を凝らす
ラブレター挨拶抜きで好きと書く
お早うと校門駆けるランドセル
美辞麗句給油たのむと決議文

生駒市 小西稔

かけつこに賭ける子供の意気盛ん
青春を仕事に賭けたよき時代
子供から告白うけて親あわて
大自然早合点のくるい咲き

岩出市 村中悦男

巧言の深意は時にまかしとく
本題にそれた話に華がさき
墓まいりお願いごとの長い妻
心にもない礼状の美辞麗句

田辺市 大峠可動

天国と地獄は民の罰だろう
国政は民の頭上でゴロ合わせ
枯葉舞うやがて大地は鬼の面
自我捨てて童話を探す心電図

鳥取市 坂本智子

月光に抱かれひたすら歩く道
ぬくもりがジワリ伝わる母の手よ
我慢して自制して身にこたえます
美しいことだけ選って走馬灯

鳥取市 谷岡清子

でこばこの人生それも吾が道だ
涙おち空を見あげば頼つたう
松茸は今が旬やろ香り来る
人生の歴史百まで続けよう

鳥取市 山口千代子

野も山も次第に派手な衣裳換え
虫の声肌が淋しい秋の風
子供のようにつまらぬ喧嘩老夫婦
世話になる身だ我慢がまんて今日も暮れ

倉吉市 酒井美美子

のほほんと気楽に生きて古希迎え
母の手は握ると心通じ合い
おもちゃ箱子供の夢がはじけそう
思い出を胸いっぱい抱いている

境港市 遠藤那珂子

べらべらの言葉の中にある本音
アイデアが意外な時に顔をだす
わたくしもぼちぼち丸い顔になる
手塩かけ咲かせた花が窓飾る

境港市 中井虎尾

どこだって旅行の友はお月様
ああ寒い値上げの秋のわが財布
政治家は真面目だけではだめみたい
満月と違う十五夜知る九月

やさしさは言葉かけより目が語る
まどろんで雨音久し心地よく
年のせいやる気が無いと責められる
夕飯の用意もできて花飾る

鳥取県 岩崎和子

投げられた振りして孫に勝ちゆずる

三文の徳を探しに散歩する

右脳を壊さぬために筆を持つ

こおろぎが残暑いやしたしまい風呂

鳥取県 岡本幸枝

川柳だなんてばあちゃんおしやれだね

騒ぎかた知らないままの独りっ児

うろろろす老父に嫁の瞳はやさし

毒舌の奥にやさしさ垣間見る

東かがわ市 中塚寿々女

すいとん汁に亡母の味がする

スイスイと走る童の一輪車

若者の輪に入りたくてピアスつけ

自家製の梅酒で二人クリスマス

取手市 葛西清

童謡に小節きかせて仕舞風呂

思惑が外れたままで総入れ歯

老眼鏡ピンク誌買うに要る度胸

ツーショット雲間の月に見守られ

修羅越えて実力という宝受け
青汁とニンニク飯を旨く食べ
実力がオベッカなどをせずに生き
セールの美人品物買つてやり

草加市 飯土井健夫

原稿募集

○エッセー——本文たて20字×70行(1400字)
○ひとこと——本文たて15字×20行(300字)
○柳界展望に掲載記事(字数不問)
原稿の採否、掲載号については編集部に一任して
ください。

編集部

第59回 三原市神明祭協賛川柳大会

とき 2月10日(日) 10時開場
ところ 三原市市民福祉会館
(JR三原駅前南へ歩3分)
挨拶 備後番傘 八島 白龍
祝辞 三原市教育長 植木 章弘
広島県川柳協会会長 中村 義雄
事前投句 「笛」 中村 義雄(広島市) 選
(2句) 「一歩」 三浦 宏(呉市) 選
事前投句・欠席投句共1000円同封1月10日必着
宿題と選者 各2句 出句締切 11時30分
「石」 小島 蘭幸(竹原市)
「未完」 大村美千子(奈良市)
「道」 定本 広文(広島市)
「スタート」 赤井 花城(神戸市)
「雲」 田頭 良子(大阪市)
「響く」 田中 新一(大阪市)
会費 2000円(昼食・発表誌呈)
懇親会 3000円(同所7時まで)
投句先 〒723-0012 三原市旭町2丁目1-8
八島 白龍(0848-63-2947)
主催 備後番傘三原万松川柳会

愛染帖

新家 完司 選

瓶の蓋開けてと言われ仲直り
和歌山市 喜田 准一

(評) つまらないことが原因のちよつとした口喧嘩。「瓶の蓋開けて」というのは「仲直りしましょう」というサイン。賢い奥様!

臨月の腹には誰もさからえぬ
豊中市 吉田あずき

(評) 刺青をちらつかせている極道も、厚かましいオバサンも、礼儀知らずの若者も、臨月のお腹を見ては、席を譲らざるを得ない。

老母の肩揉んでわたしが癒される
和歌山市 根田よしこ

(評) 「ああ、楽になった、ありがとう!」と喜んでくれるだけで嬉しく、ちっぽけな悩みや、もやもやなど吹っ飛んでしまふ。

故人には權一対ほどの義理
藤井寺市 鈴木いさお

(評) 義理ある人が他界しても、義理は消えない。恩や義理はゼニカネでは量れないが、せめて權一対くらいでお許し頂こう。

泥棒もスリも見上げる秋の月
大阪市 萩原 大湖

(評) 生まれつきの悪人はいない。何かの事情で何かの弾みで、泥棒やスリになったのだ。月を見て来し方行く末を想うのは誰も同じ。

芋のつる貫つた為に忙しい
東大阪市 笠井 欣子

(評) せっかくの好意を「いらない」とも言えず貫つてしまったのだが、大切な時間を芋の蔓に食われるとは、予想も出来なかつた。

他人なら言わぬと伯母のおせつかい
大阪市 大川 桃花

(評) おせつかい伯母さんの口癖「他人なら言わないわヨ!」。子供の頃に可愛がつてもらつたのは忘れないが、もう大人ですから。

休ませてあげたいひとが休まない
鳥取県 石谷美恵子

(評) 怠け者はいつ見ても怠けている。働き者はいつ見ても働いている。生まれつきの性だから、仕方がないのだろう。

高齢党つくれば天下夢でない
大阪市 前 たもつ

(評) 若者の票はあてにしない。高齢者のための政策を高齢者に訴える。中年たちも「明日は我が身」だから、支持も多いはず。

本棚の整理わたしの秋仕度
突然がよい拍手も花束も
藤井寺市 太田扶美代

インテリにみえますという眼鏡買う
橿原市 安土 理恵

タレントの家見せられるアホらしさ
堺市 村上 玄也

巢に帰る道だけ忘れなけりや良し
大阪市 古今堂蕉子

肝心を忘れ余計を買うてくる

札幌市 三浦 強一

皮下脂肪溜めるわたしのウォームピズ

仲直りしたいが臍がノーと言ふ
三田市 上垣キヨミ

名月と虫の音詰めて送りたい
箸袋にまた来るからと書いて発つ

鳥取市 土橋 螢

エンジンが無駄な力を出している
鍋焼の葱畑から抜いてくる

大阪府 森田 明子

髪と爪だけはまだまだよく伸びる
わたくしのためにワインと花を買ふ

堺市 加島 由一

母さんに謝つときで父はすみ
明日こそ飲まぬと決めて高いびき

逆らわず年相応の薄化粧
おもてなしほどほどがよい秋の宿
大阪府 鴨谷瑠美子

夕日には過去と未来が混じり合ふ
ほどほどが人によつてはちがう酒
豊中市 水野 黒兎

蟻だつてすれ違いざま会釈する
八王子市 播本 充子

起き抜けにさつとコーヒー出たムカシ
河内長野市 村上 直樹
和歌山市 福本 英子

子のいない家に入学案内書
丁寧にメニユー見てから素うどんに
海安市 三宅 保州

雑食種と言えはヒト科とゴキブリか
海あつた名残の色か青い月
大洲市 花岡 順子

千羽鶴自分のために折つている
裏方が走り舞台の幕が開き
寝屋川市 籠島 恵子

器自慢されてコーヒー飲み残す
南天を敷いてサンマを鯛にする
島取市 土橋はるお

絆創膏貼れば貼つたで痒くなる
ちんどん屋がさつと通り抜けちやつた
紀の川市 木村 徑子

砦です亡夫とともにいる仲間
羽化しても派手に飛べないしじみ蝶
京都市 高島 啓子

五時きつちに帰りはる大工さん
保険会社の高層ビルが建つている
松江市 三島 湊丘

ジャンケンも阿弥陀くじにも見捨てられ
雨の日は鼻毛を抜いてころ寝する

母ほどの母であつたか子は巢立ち
高槻市 笠原乃りこ

桃太郎拾えなかつた老夫婦
豊中市 谷川 勇治

エプロンを掛けてパパのカルボナーラ
欠点を個性と思う歳になる
高知市 小川てるみ

合掌と同窓生の住所消す
腰痛で亡母の動きやつと知る
大阪市 坂 裕之

死んだ子の歳を数えている株価
見通しがあまいと笑う唐辛子
和歌山市 木本 朱夏

大役が済んで座れば眠いこと
一生を華には遠い割享着
加東市 中上千代子

つい騙すみんないい人たちなので
駐車場百台みんないい車
弘前市 高瀬 霜石

母ひとりたわわの柿と話して
元氣かと問う絵手紙の栗はじけ
奈良県 渡辺 富子

秋というのに口内炎に沁みる酒
ハートマークにしよう二人の接統詞
和歌山市 古久保和子

動いては何度もシャワー浴びる夏
停電にたちまち困る冷蔵庫
大阪市 松尾柳右子

喜寿過ぎてこどもニユースが面白い
鳥取市 岩崎みさ江

秋の森みな曲線で柔らかい
立川市 柏野 遊花

甚にこつて夢でも烏鷺が入り乱れ
居酒屋に我が家と同じ冷凍魚
堺市 和田つづや

いつまでもビール離せぬ温暖化
池田市 上嶋 幸雀

宗教屋やわらこう来て厚かまし
二枚目も古稀になつたら大差ない
堺市 奥 時雄

秋冷に膝の奥なる痛み虫
虫の音を若いバイクが消して行く
八尾市 中島 春江

二階から石焼芋を呼び止める
人間の言葉に犬が妥協する
枚方市 伊達 郁夫

旅の宿ボチのご飯が気にかかる
どうですか新嘗祭と書けますか
藤井寺市 若松 雅枝

体力は同じぐらいの友がよい
吹田市 太田 昭

東かがわ市 川崎ひかり
唐津市 仁部 四郎

三田市 北野 哲男
酌しても魔法かからぬ無粋者

橿原市 居合真理子
ふとこころに滝猛る日の原稿紙

吹田市 早泉 早人
団塊が去り空洞化する技能

倉吉市 野口 節子
おもちゃ屋の前で喚いた子も五十

大阪市 岩崎 公誠
ほどほどが良いと勝手にマイペース

松江市 松浦登志子
空っぽの心に温かいふかし辛

吹田市 穴吹 尚士
子の出来の悪さの罪をなすり合

寝屋川市 北田ただし
白熊の水を溶かすのも私

倉吉市 松本よしえ
切り抜いたレシビ胡瓜のビール漬

大阪府 米澤 優子
もう無駄と知りつつ買った化粧品

枚方市 海老池 洋
棒切れに振り回される大合唱

鳥取市 岸本 孝子
面倒だ今日はカレーにしておこ

大阪府 初山 隆盛
目の毒をくすりに老いの皺が伸び

神戸市 田中 章子
うつの日は何てたってプレスリー

紀の川市 辻内 次根
みかん水とても幸せだった頃

米子市 政岡日枝子
長いもの持つと戦う仕ぐさする

奈良市 矢野 良一
帰りたい田圃畦道赤とんぼ

和歌山市 田中 みね
見て閉じてまたも開いてあたしの句

鳥取県 谷口 次男
エコとエゴ一字の違い雲と泥

羽曳野市 徳山みつこ
冷蔵庫あるからものを腐らせる

大阪市 太田としお
どんどんかわる妻もテレビも国会も

唐津市 市丸 晴翠
ただ今に出れば存るのはランドセル

大阪市 津村志華子
茜雲ふと風に掛かる老母のこと

堺市 山本 半銭
丹波栗上手に焼いて母達者

唐津市 宗 水笑
アルバムを開けて茶色の母と会

米子市 小塩智加恵
古い二人手に余るほど米届く

豊中市 松尾美智代
苦しさを吐き出しながら一句生む

松原市 玉置 重人
ノーカット期待しすぎたのが不覚

高知県 いの 静草
貯えがないから元気一人とも

黒石市 相馬 一花
芯のない夫に食わす五穀米

寝屋川市 富山ルイ子
迷惑をかけるので好きだとは言えぬ

河内長野市 針生 和代
毎年よ季違えずに彼岸花

熊本県 高野 宵草
世話女房スタイルなどに目もくれず

鳥取市 岸本 宏章
獣との住み分け森が苦悩する

西予市 黒田 茂代
枕元のラジオ朝まで喋ってる

日立市 加藤 権悟
添削が過ぎて私の貌がない

鳥取市 土橋 睦子
一枚の皿で間に合う昼膳

羽曳野市 酒井 一壺
勢いに乗った女に近寄りぬ

藤井寺市 中島 志洋
本人だけ意外だと言う鐘一つ

大阪市 榎本 舞夢
キッチンで生き生きしてるお父さん

鳥取県 山下 節子
ポケットの中でガッツの掌を握る

茨木市 藤井 正雄
読み返しました読み返す子の手紙

高槻市 富田 美義
三十歳で老後気になる国に住み

シドニー 坂上のり子
酔ってないと言ったすがたが揺れている

弘前市 福士 慕情
大吟醸舌の喰りが止まらない

鳥取市 福西 茶子
初生りの味のししに先越され

大阪市 榎本日の出
本を閉じさあこれからはお昼寝よ

羽曳野市 森下 一知
手作りの温もりだけの小商い

出雲市 園山多賀子
不整脈有めて卒寿サバイバル

大阪市 小谷 集一
書き溜めた知恵が溢れているノート

藤井寺市 高田美代子
暑い暑いと千回言って秋が来た

大阪市 井丸 昌紀
ハンドルは二つなかなか進まない

西宮市 牧瀬富喜子
ゴミの日を確かめてする魚料理

芦屋市 黒田 能子
川柳が趣味ですなんという平和

三田市 堀 正和
リハビリで皆勤賞を褒められる

岸和田市 雪本 珠子
大好きな猫と同棲しています

八尾市 吉村 一風
男には定年無いと酒が言う

大阪市 神夏磯典子
青アートの上にも秋のちぎれ雲

岸和田市 井伊 東吉
老若の意志疎通する祭の日

西脇市 七反田順子
スランブだ歩いてみよう秋の空

河内長野市 坂上 淳司
わくわくと披露待ってる自信作

宇都市 平田 実男
選をする私が選をされている

鳥取県 斉尾くにこ
おっぱいを煎餅にして癌検診

横浜市 金森 徳三
遺言を書いておいてと娘に言われ

堺市 西村りつえ
決着は酒の入った二次会で

八尾市 田邊 浩三
カリスマでなくて良かったわが女房

鳥取県 大塚美代子
風呂敷の家紋が語る五十年

大阪市 小泉ひさ乃
道しるべ嫌いあぶない橋渡る

鳥取県 竹信 照彦
妻も嫁もおらぬ日孫が熱を出す

八尾市 宮崎シマ子
借りに来るときは立派な土産物

京都市 都倉 求芽
人身事故車内放送さらさらと

松江市 津川 紫晃
丸腰で来る相談は断われぬ

大阪市 伏見 雅明
個を捨てて賭けた会社の肩叩き

米子市 白根 ふみ
お寺さんの好み彼岸にお供えす

栃木市 岡野すみれ
篤農の実り自慢の穂がたれる

和歌山市 松尾 和香
ふるさとの流れに月と影法師

大洲市 中居 善信
暇ですかパンに針など刺すなんて

三田市 阪本 藤朗
よく撮れた写真は妻に預けとく

奈良市 尾畑なを江
曼珠沙華己の居場所告げて咲く

西宮市 藤本 直
失敗を笑って語る友と飲む

堺市 矢倉 五月
貯金箱粗品でもらい溜めはじめ

大和高田市 鍛原 千里
ラブホテル前を通れば近道だ

篠山市 円増 順子
前列で居眠りしてる太っ腹

八王子市 川名 洋子
女です小さめの服試着室

同人特集 ユーモア百句

平成十六年～平成十八年
同人吟から 編集部

歯が痛いそうかと亭主出てしまい

路 郎

可愛らしい目になって来た酔うている

生々庵

酢昆布の匂いで妻にささやかれ

葉

昼の月 お前も二日酔いなのか

薫 風

葬式も結婚式も同じ靴

天 笑

土瓶蒸 松茸らしいものもある

森本 弘風

こちら年金円が上がり下がろうと

亀井 円女

よく見ればジャガイモどれも美男美女
香典を開けたら空気だけだった

福島 万年
最上 和枝

ばあさんや雀鳴いてる起きようか
たこ焼きの熱さを口で踊らせる

南原 正和
軸丸 勝巳

魚屋の午後は魚も昼寝する

古久保和子

変身にウルトラマンは飽きている

水野 黒兎

鶏が健康診断受けに行く

谷口 次男

探しても出てきませんよ捨てました

石森 利昭

もう一人人生で下さい国のため

大橋 鐘造

合併で市になったけど熊はでる

松本よしえ

おしゃべりは金がなくてもよく喋る

新家 完司

長所つて鼻につく日もあるのよね

池内かおり

松茸一本暫く飾ることにする

小島 蘭幸

矢印の先に香典受けがある

北野 哲男

教えたら本当ですかと辞書を見た

榎本日の出

少年になつてうるさい桃太郎

政岡日枝子

おじいさんは笑いおばあさんは怒り
 大阪に派手なおばちゃんわんさいる
 俺々詐欺みんな頭のいい奴だ
 こんなええ妻いてへんでというてある
 嘘八百まだ半分もついてない
 正直に生きて時々風邪を引く
 セーターを編んでいる間に恋が逃げ
 厄年といえは毎日厄日です
 段々と呆ける自信がついて来た
 良き友に育てられたり蹴られたり
 帰ったら手を洗おうと孫が言う
 どう見ても良妻である客の前
 予報士が美人で天気聞きそびれ
 本代引く酒代余ったのが教養
 銀行のくれた種子だが芽が出ない
 バーゲンにバーゲン品は着て行かず
 言っておかねば親が廢るというものよ
 植山へ行く日もやはりおーいお茶
 包丁を研いではみたが冷奴
 神さまは酒豪と思う樽の列
 ごく稀に夫婦気の合う時がある

谷口 義
 高瀬 霜石
 森 茂美
 古今堂蕉子
 水谷 正子
 浅野 房子
 太田扶美代
 天正 千梢
 山口 美穂
 坪井 孝一
 土橋はるお
 坂本 蜂朗
 岸本 宏章
 内海 幸生
 高島 啓子
 有沢せつ子
 中崎 深雪
 宮西 弥生
 板山まみ子
 津村志華子
 居谷真理子

あなたにはついて行けぬと言うて古希
 良い運勢出るまでチャネルを替える
 悪いのは酒で私は悪くない
 手の平で豆腐のように俺を切る
 追悼をされてるときは人格者
 蟹解体 女を脱がす手つきなり
 秋深し隣は遊んで食える人
 レシピにはどんな味かは書いてない
 いい人はお金を貸してくれる人
 リサイクルしたい夫が今日も居る
 ウォームピズ首に手拭い巻いておく
 カップ麺じつと三分耐えている
 正直な鏡で化けるのに苦労
 大笑いしたら尻尾が出てしまひ
 絶滅の危機に瀕して来た預金
 スキヤキへ英語の牛が攻めてくる
 国保にはすまぬ大病してしまひ
 もう何度妻の王手をかわしたか
 手振りまで同じ二度目の話聞く
 割り勘か奢りか分からない誘ひ
 犬よりも安い食事をして達者

喜田 准一
 三宅 保州
 早川 遡行
 奥村 五月
 藤井 則彦
 早川 清生
 神保坊太郎
 寺川 弘一
 板東 倫子
 出口セツ子
 村上ミツ子
 初山 隆盛
 澤田 和重
 倉益 一瑤
 平田 実男
 山岡富美子
 須郷 井蛙
 江見 見清
 大川 桃花
 村上 玄也
 木下 敏子

三日目のカレーのような僕と君
 百円で僕の苗字が売られてる
 悪いけど見た目で決める時もある
 お爺ちゃん大好き孫の二枚舌
 出るところへ出ようと妻に迫られる
 足で椅子引き寄せ妻の長電話
 折棒料納め一喝されてきた
 本日のお詫びは以上五件です
 廃品回収お酒よく呑むお宅だな
 金借りた方が楽しく飲んでる
 化粧して待っていたのに誰も来ぬ
 仏様指先の丸あれですか
 ちよっとだけ騒がしてみた老いの恋
 年金の成る木夫をなでさすり
 日本の力士が混じる国技館
 落書きにまともな事が書いてある
 人じゃない椅子に頭を下げている
 ホームレスおいしい店を知っている
 秀才のかき上げ用の長い髪
 停電にすれば少子化防げます

藤田	泰子	牧野	芳光	楠見	章子	武田	帆雀	村上	直樹	石堂	潤子	伊藤	博仁	田岡	九好	高野	宵草	小谷	集一	若松	雅枝	吉岡	修	柿花	和夫	安藤	寿美子	太田	とし子	神夏	磯典子	吉田	あずき	太田	幸枝	宗	水笑	坂上	淳司
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	----	----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	----	---	----	----	----

たいがいの病気は酒で治してる	百歳は聞かれなくても歳を言い	軽量化男の骨と傘の骨	先生の見立てはいつも歳のせい	ケータイ無用わたし定年ニートです	大渋滞横の車は何してる	おばちゃんが居るから街も活気付く	惚れるとは惚けることだと気がついた	収入のない家計簿をつけている	お隣はこちらを裏といつている	通帳にホクロのようにつく利息	地球でも散髪しよう草刈機	宝くじ下一桁の電車賃	大根を洗うわたしもこんなもんやろか	一日の機嫌をトラに左右され	おビールと言う彼が嫌さようなら	赤い糸手繰り寄せたら今の妻	愛してるけれど命はあげられぬ	思うほど誰も私を見ていない	バーコードみたいな髪を整える
----------------	----------------	------------	----------------	------------------	-------------	------------------	-------------------	----------------	----------------	----------------	--------------	------------	-------------------	---------------	-----------------	---------------	----------------	---------------	----------------

奥	時雄	升成	好	播本	充子	野崎	勝	前	たもつ	津守	なぎさ	田辺	鹿太	堀	正和	高杉	千歩	加島	由一	米澤	俣子	竹信	照彦	林	昭之	安土	理恵	藤井	正雄	瀬戸	まさよ	野下	之男	徳山	みつこ	齋藤	さくら	中村	金祥
---	----	----	---	----	----	----	---	---	-----	----	-----	----	----	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	-----	----	-----	----	----

■各地句会だより

南大阪川柳会・句報500号記念

吟行会を終えて

前 たもつ

去る九月二十四日、秋分の日、振替休日、ハッピーマンデーに、500号記念吟行会を行いました。残暑もやわらぎ、定員六十名の会場を満員にしていたきました。

予想していた以上の出席者で、蓋を開けてみると半数以上の方が南大阪川柳会に初めての参加であることに驚くとともに、とてもうれしく思いました。

私がかかわっている教室の人が応援してくれたということもありましたが、初出席者の半数近くの方が句会初体験で、会場に緊張感が張り新鮮に感じました。

忙がしい中、時間の都合をつけて参加して下さった天笑主幹の「句会に出ると得をする」という話は、間近かで初めて聞く人にとって大変有意義だったと思います。

会場は、世に謳われたくらわんか船で名高い東海道（京街道）の枚方宿を代表する船宿

の「鍵屋」の大広間です。平尾館長さんの熱のこもった「鍵屋の今昔」のお話に、すでに江戸時代の船宿のお客の気分になり、美声の船歌にうつとりとして、これから始まる句会のこととは忘れてしまふほどでした。

選者は、南大阪川柳会生えぬきの柳伸さん、楓楽さん、千里さんと枚方在住の祥昭さんで、



それぞれ味のある選をしていただきました。ベテランの佳句の発表に大広間が静まり、生まれて初めて呼名する新人の句に出席者から感嘆の声が走りました。

清読した入選句を見ると、初出席者の句が二十句ほどもあり、殆んどの人が入選してとてもよかったと思います。

くらわんか船の頃からの名物「ごぼう汁」の付いた弁当に、地酒も加わり一時間半ほどの間、初出席の人達も和気藹々と川柳の話を中心に親交を深めました。

句会、懇親宴終了後、館内見学をし、ボランティアガイドの方の案内で、旧京街道を枚方駅まで散策をしました。旧家や本陣跡、常夜灯などの説明を聞きながら、小雨の中、ひと時江戸時代の旅人の気分になりました。

当日の秀句を紹介します。

出られない生まれまたまの風を抱く 求芽
昭和史の汚点拭いても洗っても 楓楽
化粧した言葉心に届かない 楓楽

五〇〇円玉貯金の夢は果てしない 祥昭
参加者から、次からも来たい、「川柳塔」

を読みたいなどの声を聞くと、私までも元気を貰いました。

五十年 六〇〇号を見届けん

たもつ

誹風柳多留一篇研究 28

小栗清吾・伊吹和男
山田昭夫・増田忠彦

山口由昭
清 博 美

187 大根八後におろしたものと見へ

小栗 全く不明。ご教授願います。

以下思い付き。

①徒然草の大根役者。その頃は太根おろしに
しなかつたから、武者に変じて出て来るこ
うできたろうと。

②曾我五郎の大根の馬。大磯まで積み荷の大
根を下ろさなかつたろうと。

増田 ②の五郎の大根かと思ひます。鞭がわ
りに使つたあとの大根は、貧の五郎のことだ
から、オロシにして喰つたことだらう。駄勞
解です。

山口 増田説が川柳趣味に満ちていて説得力
があります。

時宗八大根て馬をふちのめし

東馬明元112

しかし、大根の句の数は大根武者が圧倒的
に多い。いづれにしても「後におろした」は
事後に大根おろしにしたという事だと思いま
す。

清 同。荷を下ろした、という意だけだと思
う。

188 よし原さなとゝ母にハつよく出る

伊吹 どちら息子。親父のように恐くはないか
ら、自分に甘い母親には隠し立てしない。そ
こで「今夜の外出先は、吉原さ」と堂々と母
に告げる。厳しい父親にはこんなこと言える
はずもない。

とまつたら御めんと母をばかにする 九12
よしハラとことわつて出ル高まんさ

天四智2

小栗 賛。「吉原さ。だから何だつてんだよ」。
清 賛。

189 むし干を馬上でするハ法師武者

伊吹 法師武者は六月十五日の山王祭に、渡
御の御輿に従つた甲冑姿の僧兵。十騎が行列
に加わつたという。甲冑の土用干を馬上で武
者行列のついでにする。

どうにがついてあつたのはほうし武者

一九18

法師武者其夜ふたれたやうに寐る 一三三
小栗 賛。土用干で甲冑を並べる光景を下敷
きにして、「丸で虫干しだね」とおかしがつ
ている句。時あたかも虫干しのシーズン。

清 賛。

190 あの衆へ酒でもと取ルほうし針

伊吹 帽子針は、被つた頭巾の端を留める針。
純銀製に拵えて、それに蟲眞の役者の紋所を
彫らせたのもあつたらしい。奥女中あたりが

頭巾の帽子針を抜きながら、一緒に付添つて来た供の者たちに酒を振舞つてやるよう命じている光景。宿下がりか。

茶ハそこにおきやとほうしの針を取

宿下り供の吞内ふみを書キ

八29
三21

山田 賛。宿下りですね。

清 賛。

191 けふこそ八本の紅葉と母へいひ

伊吹 いつも正灯寺や海晏寺の紅葉見にかこつて遊里へしけ込むどら息子。今日こそは本当の紅葉狩りだと母親に告げても、おいそれとは信じてもらえまい。例句は何もかも理解している母。

紅葉ハ彼と承知して母ハ出し

三29

山口 賛。今日も嘘。

清 賛。

192 来がゝりにとん死のくやみいつて行

伊吹 何かのついでの人に、急死をした人の悔みを言ひに行く。あまりに急であつたから弔問の都合がつかず、近くまで来たためのお悔みということになる。

小半月とん死のくやみちらほら来

明六鶴2

山口 来る途中で頓死の騒ぎに出合つたのである。早速のくやみ。わざわざ出掛けたのではない。

清 同右。

193 糸々年してしほの目をするにくらしさ

伊吹 潮（汐）の目は、目許を細めたあいきようのある目つき。子どもの笑顔などという『日本国語大辞典』。子どもなら可愛い潮の目であろうが、そこそこ大人になつてからは、異性に対する媚びる目付きだろうと思つ。塩の目を十七八で又はじめ

三六13

増田 賛。年増の女だろうか。

清 賛。

194 雨舎り子の行けといふ氣のとくさ

伊吹 雨に濡れるのが嫌だから雨宿りをしてゐるのに、連れている子どもが退屈して早く帰ろうなどと言ひ出した。そばで見ていると、まったくお氣の毒である。現代でもじゅうぶんに起りうる風景だ。例句はそんな子どもをあやしている。

雨やとり子に餅花を壺本遣り

明四松3

山田 礎ともとれますが、「行け」と言つてゐるのは、その家の子どもと思つていました……。例句も同じ。

増田 賛。わが子だと思つ。

山口 山田説賛。子どもだから無慈悲なことをいう。しかし反抗もようでない。

小栗 以前から悩んでいる句。礎説・山田説どちらもありうる。礎説の方がほほえましく、山田説の方は、イジワル餓鬼で後味の良い句ではない。

清 「子の行け」で「子が帰ろう」ではない。後味の良い句ではないが、小生は雨宿りした家の悪ガキと思つている。

195 座敷らう薬をのめにゆたんせす

伊吹 道楽が過ぎて座敷牢に入れられたドラ息子。まさかこんな目に遇うとは夢にも思わなかつたので、世の中のことすべてに疑心暗鬼。家族のものが親切心で薬を飲めとすすめても、毒が入っているのではないかと警戒する。

あはれむへし終にむすこハさしき牢

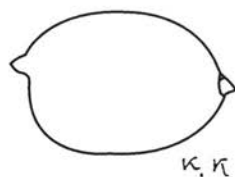
拾七19

清 賛。

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カッタとも)



「サイン」 鈴木公弘選

カード漬けサインばかりが上手くなり
内定のサイン集めて悦に入る
どう見ても読めぬサインの顕示欲
目くばせをされて動悸がおさまらず
大物のサインで黒が白になる
子のサイン気付かず冷めた核家族
休んでと体がサイン出している
ノーサインでも五十年つつがない
亡き人のサインと思う星流れ
王さんのサインボールが家宝です
回復へ向かうサインとなる気力
二人きりなんのサインもない暮らし
好きですとあなたの背なにサインする
沈黙は妻不機嫌というサイン
私だけあなたのサイン読み取れる
愛のサインはボディブローのように効く

立川市	府中市	吹田市	鳥取市	芦屋市	池田市	大阪市	西内	吉岡	豊中市	神戸市	和歌山市	長岡京市	横浜市	唐津市	神戸市	豊中市	四條畷市	川西市	西内	板東	栗田	久子	黒田	能子	中宇地秀四	早泉	早人	藤岡ヒデコ	遊花
伏見	山田	小野句多留	坂本	蜂朗	武本	山田婦美子	松尾美智代	修	山田	山田	山田	山田	山田	山田	山田	山田	山田	山田	山田	山田	山田	山田	山田	山田	山田	山田	山田	山田	山田

「サイン」 西口いわゑ選

温暖化異常のサイン野に山に
百歳のサインしつかり気を貰う
ネットいじめ人恋うサインかも知れぬ
自己主張君のサインはよくわかる
モナリザのサインに眩惑されている
愛のサインはボディブローのように効く
告白のサインはじつと唯見つめ
手を叩け笑え公開録画中
蚤の市ピカソのサインかも知れぬ
何気なく出したサインに縛られる
サインしたペンから雪崩音がする
異見述べ途端隣に足踏まれ
オバサマの波が囲んだサイン会
野球より恋のサインの複雑さ
子には子に分かるサインを持っている
義理で書くサイン心にシミ残し

札幌市	大阪市	奈良県	和歌山市	豊中市	立川市	東かがわ市	大阪府	紀の川市	弘前市	鳥取市	橋本市	河内長野市	松江市	狭山市	海田市	小沢	岩崎	渡辺	細川	吉田あずき	柏野	伊勢八重子	古今堂蕉子	辻内	次根	慕情	倉益	石田	隆彦	針生	和代	相見	柳歩	矢野	梓	堂上	泰女
-----	-----	-----	------	-----	-----	-------	-----	------	-----	-----	-----	-------	-----	-----	-----	----	----	----	----	-------	----	-------	-------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	---	----	----

あれこれと顎が特技のサイン出す

豪雪のサインか虫の巣が高い

百歳のサインしつかり気を貰う

ドナードカード重いサインへ正座する

法的に自筆サインがものを言う

何時からか出掛ける妻のノーサイン

骨壺に寺のサインをして貰う

生きてるよ現況届サインする

サインして生死を賭けた手術台

ウィンクがイエスかノーか判らない

手を叩け笑え公開録画中

目が痒いだけのまばたき誤解され

一軍になつてサインもそれらしく

らくがきと間違えられているサイン

法相のサイン人とは裁くとは

まだ無名サインの文字も楷書体

手話仲間だけに通用するサイン

逆転のサイン代打が燃えてくる

うっかりとサインはできぬ但し書

秀句

サインコサイン恋も学んだタンジェント

手も汗も拭けぬハンカチへのサイン

ゴーサイン出ても走らぬ脛かじり

軸吟

子の名前届けたサイン忘れまじ

高槻市 富田 美義

弘前市 福士 慕情

大阪市 岩崎 公誠

紀の川市 宇野 幹子

高槻市 乙倉 武史

羽曳野市 森下 一知

鳥取市 土橋 睦子

弘前市 今 愁女

吹田市 穴吹 尚士

藤井寺市 太田扶美代

大阪市 古今堂蕉子

枚方市 寺川 弘一

可見市 板山まみ子

和歌山市 柏原 夕胡

八王子市 播本 充子

羽曳野市 永田 章司

海南市 三宅 保州

弘前市 斉藤 劬

八尾市 宮崎シマ子

堺市 矢倉 五月

東京都 長谷川康子

和歌山市 福本 英子

無理と無駄やめると星からのサイン

氷山が溶けるサインは見逃せぬ

悪魔とは知らずにサインしてしまう

童謡が身に染む老いのサインかも

秋刀魚焼く前にサインをしておこう

大切なサイン行方不明になつて

ノーサイン君にまかすと太つ腹

サインミス瓢箪から駒が出る

イヤリング片方付けているサイン

読めもせぬサインもらつて有頂天

署名する雑魚の蘭札りだとしても

わたくしのサインで島中がうごく

監督のサインへ女神とびのつた

空いっぱい大きくサインして生きる

ロボットのようサインをくれる本

妻のサイン守つていれば平和です

うっかりのサインちがいに火矢が降る

神さまのサイン見事な夕焼けだ

熱っぽいサインをキャッチした鼓動

秀句

咳払い落し所を心得る

法相のサイン人とは裁くとは

Vサイン笑顔の波がひろがつた

軸吟

悪筆のサイン心はこめている

東京都 岸野あやめ

倉吉市 野口 節子

大和高田市 鍛原 千里

唐津市 宗 水笑

大阪市 谷口 義

尼崎市 春城 年代

三田市 堀 正和

和歌山市 堀 富美子

西宮市 亀岡 哲子

大阪市 奥村 五月

弘前市 高橋 岳水

藤井寺市 高田美代子

米子市 野坂 なみ

西宮市 山本 義子

寝屋川市 森 茜

豊中市 谷川 勇治

相生市 村木 信子

鳥取市 録沢 風花

香芝市 大内 朝子

河内長野市 山岡富美子

八王子市 播本 充子

米子市 中井 ゆき

走 る

牧測富喜子選



男いっぴき望むところだ駆けて死ぬ
 寒い季節アツというまに走り去る
 夢ばかり抱いて走ってきた命
 素通りで走る諭吉を呼びとめる
 走っても貧乏神は付いて来る
 皆走る私も走る特売日
 運動会借り物にされ走らされ
 走る子へ母のカメラが待ち構え
 眼の鱗落ちて走りが速くなる
 俄雨走り込みますアーケード
 野球部がまた負けたらし走って
 角切れでブライド捨てて鹿走る
 小走りに黄昏れてゆく女坂
 お札状態でベンを走らせる
 走っても走っても影ついて来る
 救急車たらい回しにされている
 晩ごはんお寺の鐘がなりました
 走るは勝手わたしは亀が好き
 勢いで心ないこと口走る
 杯がまた正論を口走る
 洗濯物濡らさぬ母はよく走る
 直走る背にびつたりと糸命表

霜 幸 石
 鐘 造 月
 強 一 夫
 輝 水
 奮 佑
 庸 情
 慕 榮
 高 和
 正 風
 一 美
 寿 子
 歳 四
 秀 雀
 幸 男
 哲 也
 典 朗
 蜂 螢
 す ず

若さとは走って走ってまだ元気
 野を駆けたこともあったね膝小僧
 かたつむりなりにかけっこしています
 走ること止めるの恐い小市民
 駆け足で逃げた今年のカレンダー
 走っても父の背中はまだ遠い
 走れなくなった足だがいとおしい
 栄光の孤独を覇者はひた走る
 感情に走ると笑う鬼瓦
 団塊で育ち走るのは得意
 夕焼けを見ながら走る塾かばん
 この辺で休もう峠見えたから
 運動会あんなにうちの子が走る
 駄馬の背で走った遠い戦場よ
 切株に座れば遠い日が走る
 佳
 逢いたくて夜の高速ひた走る
 同点に追いついてから走り出す
 小走りの母を夕日が追いかける
 ここからは二人三脚して走る
 完走をめざす命がよく笑う
 人
 ゆっくり走るいい話聞きながら
 地
 元氣かな荷の中父の走り書き
 天
 父さんも運動会はじりだった
 軸
 かけ抜けていった月日を折りたたむ

ルイ子
 のり子
 (矢)五月
 裕之
 婦姜子
 雅枝
 千代
 岳水
 信子
 明子
 一知
 すみれ
 ぼっは
 愛論
 隆盛
 富子
 日の出
 充子
 扶美代
 朝子
 ミツ子
 美津子
 高瀬霜石

荷 物

樋口 輝夫選



出来ちゃった婚で荷物はこの鬼だけ
 お荷物をまた背負い込んだお人好し
 我が家には大きな荷物バラサイト
 荷物には成らぬ明日へ米を研ぐ
 両親の期待が重荷独りっ子
 欲と言う荷物死ぬまで捨て切れぬ
 骨と言う最後の荷物たくします
 不祥事を引きつぐ総理荷が重い
 大原女の頭の上の萩の花
 社保庁が重い荷物になる政府
 お荷物のしこりとなった捨てゼリフ
 荷物だとポストに捨てた例もある
 大荷物になっても欲しい札の束
 スランブで重荷になった四番打者
 帰り際重くないもの母がくれ
 仕来りがお荷物になる嫁き先
 蟻の列重い荷物の冬支度
 貰えと知って包みが軽くなり
 懲りもせずずらは重い方を取る
 お荷物にならぬ通帳 万歩計
 ヘルパーへ母に内緒の紙おむつ
 手に荷物妻の助手です家来です

雅 秀 四 枝
 弘 風
 洛 醉
 高 明
 活 恵
 くにこ
 水 笑
 枉 子
 としお
 (吉)幸子
 四 郎
 とし子
 志 洋
 権 悟
 (矢)和子
 正 雄
 大 朔
 明 子
 賢 子
 帆 雀
 淳

荷物にはならぬ土産の阿波おどり
 プライドを重荷と思う時がある
 お隣が預かっていた梨の箱
 指切りの数だけ背負い込む荷物
 窓際に荷物のひとが眠ってる
 六か国それぞれ荷物持つている
 洗濯の荷が先に来た子の帰省
 右肩に妻子左肩にローン
 明日狙う男は荷物おろさない
 うちの荷も橋山行きと怖い私語
 言い勝って荷物を担ぐはめとなり
 重いでしよ添える片手が温かい
 肩の荷を鈍感力で軽くする
 手にずっしり荷物が重い立ち話
 子はなれの荷物おろしてノラになる

住 佳

一升餅重い荷物の背負い初め
 特捜が運び出してるダンボール
 派手と見栄積んで花嫁荷が届く
 重すぎる団塊担う人の肩
 爺さんは荷物を運ぶ主婦の友

人

お荷物にならずにはない親の意地

地

呱呱の声もう荷を背負う鬼瓦

天

婚の荷の中に臍の緒秘めておく

軸

指令塔の妻も今では認知症

不 二
 扶美代
 蜂 朗
 幹 子
 孝 一
 注 湖
 宵 草
 霜 石
 美 義
 洋 子
 信 子
 孔 一
 碧 子
 俊 子
 茂 代
 俣 子
 武 史
 勝 視
 千 代
 康 子
 一 風

ゴミ

倉益 一瑤選



ゴミ出して家を出るひと入るひと
 ゴミ袋透けて見えてる暮らし向き
 ゴミ屋敷きつと淋しいひとが住む
 ゴミの中から札幌のミステリー
 公園のゴミもわたしも生きている
 分別収集議員叩いて出る埃
 打ち上げる衛星やがて宇宙ゴミ
 粗大ゴミとは言わせない力こぶ
 ごみ箱の中から捨てた句を拾う
 生ゴミに混ぜて捨てます今朝の愚痴
 蓋しても蓋しても出る核のゴミ
 鑑定に埃まみれがよみがえる
 ゴミの量明日の地球が気にかかる
 紙屑になっても和紙という誇り
 ゴミの中未練も少しまざってる
 年寄りにゴミ分別はややこしい
 人間のモラルが道に落ちている
 ゴミにする視点がずれる嫁姑
 ボイ捨てるゴミが仲間を呼んでいる
 そのうちにイージス艦もゴミになる
 ゴミ捨てるのも拾うのも人の業
 平成のゴミに未練のある昭和

時 雄
 玄 也
 朝 子
 週 行
 次 根
 像 山
 武 史
 百 合
 雅 明
 活 恵
 順 風
 一 知
 岳 水
 茂 代
 那珂子
 螢 子
 鐘 造
 道 子
 裕 花
 四 郎
 昌 鼓
 ヒデコ

ゴミ箱の中でも止めぬ背比べ
 飽食のゴミの呻きは掻き消され
 残照に怪物めいて浮かぶゴミ
 夢の島ゴミのつぶやき聞こえそう
 人情のこぼれる路地にゴミの山
 文明の産物ゴミとお年寄り
 バカだなあ青い地球をゴミ箱に
 九条が人間までもゴミにする
 ゴミの嵩独り暮らしを怪しまれ
 ゴミ箱に入れてあなたを消去する
 ゴミのない部屋に色気も味もない
 濁流の渦にこの世のゴミを見る
 星屑のような俺にも意地がある
 もったいない心が編んだ布草履
 広重につげ口したい富士のゴミ

住 佳

火葬場のゴミになるのも遠からず
 ごみも舞う花びらも舞うああ無常
 生ゴミの堆肥から出たカボチャの芽
 残骸が昭和の森で泣いている
 ゴミ問題主婦を議会に送り込む

人

再生の夢を発酵させるゴミ

地

就任の天狗の鼻もゴミの中

天

屑籠に時々身投げしたくなる

軸

何時の日かゴミにされてた赤いバラ

蜂 朗
 幸 雀
 妙 子
 節 子
 一 風
 帆 雀
 次 男
 日の出
 重 人
 慕 情
 茶 子
 浜 丘
 秀 四
 幸 子
 美津子
 妻 子
 一 粋
 哲 男
 幹 子
 充 子
 彩 子
 くにこ
 高瀬霜石

初歩教室

題 — 十二月

三宅 保州

「初歩教室年間賞」決定!

当「初歩教室」欄にご投句いただいた方々の力作に報い、皆さまの今後の励みとするため、昨年から「初歩教室年間賞」を制定していただきました。

第二回目に当たる今年も、毎月の「今月の推せん句」の中から、次の三名の方に年間賞を決定させていただきました。おめでとうございます。なお、表彰式は平成二十一年一月本社句会の席上で行う予定です。

平成十九年初歩教室年間賞

自分だけ無いと思っているものしも

渡り切るまでは見守る親心

指ぎつねあなたが好きと鳴いてます

西宮市

藤本

直

紀の川市

吉村

幸

枚方市

小林

わこ

【同想句】

十二月はポーナスという発想からの同想句です。他にも、忙しく慌ただしい十二月という発想の句がたくさんありました。

年金にポーナスはしい十二月

よしお

年金にポーナス欲しい十二月

堅坊

ポーナスに縁ないままの十二月

美紗子

ポーナスが逃げてしまった十二月

忠子

次の句は「日めくりも財布もやせてゆく師走 牟田口善治」という類似句があります。

十二月財布日めくり瘦せてゆく

起世子

原 頑張れと暦一枚背中押す

ヒロ

添 一枚になった暦に背を押され

松風

添 一枚になった師走が追ってくる

松風

添 一枚になった暦に追われてる

松風

【添削・批評句】

原子供達楽しいプラン冬休み

キヨミ

五七五毎にブツンと切れリズムに欠けます。

添 冬休みのプラン楽しい子供たち

次の二句もリズムが損なわれています。

原 暮に生まれ誕生祝い早目する

綾乃

添 忙しない晦日生まれの日

亜希子

原 忘年会続きあれもこれも忘れ

亜希子

添 忘年会のせいであれこれ物忘れ

亜希子

原 一年の月日の終り十二月

梶子

添 年末が来るから片のつくことも

原 押し詰まり金も女も飛んでる

瑛子

「金も女も」ではやや句品に欠けるくらい。

添 押し詰まりおれも羽が生えて飛ぶ

正二

原 十二月孤独暮しの十回忌

正二

十回忌は何回忌でもよい「動く」くらい。

添 年の瀬の孤独噛み締めてる年忌

原 火の車最後はジャンボ夢託す

(後)賢治

何もかも詰め込みすぎてギクシヤクします。

添 ジャンボくじに縋るしかない年の暮れ

美智代

原 雪が舞う師走は見れぬ温暖化

美智代

「見れぬ」の「ら抜き語」は如何なものか。

添 温暖化どうあれ雪の舞う師走

道子

原 喪の葉書今更に見る十二月

道子

「今更に見る」では焦点がぼやけます。

添 年とともにだんだん増える喪の通知

如山

原 日頃手を抜いてる煤を取る師走

如山

年末だから一年分とオーバーな表現に。

添 一年の手抜き煤を取る師走

大朔

原 当月は挨拶抜きで右左

大朔

「当月」では十二月と言いつつ切れない。

添 年の瀬は挨拶抜きで右左

直

原 十二月何もないけど忙しい

直

「何もないけど」はやや説明調。

添 忙しい振りをしておく十二月

乃りこ

原 デパセチのパンフに浮かぶ母の顔

乃りこ

添 デバ地下のお節に浮かぶ母の顔
 原 御身ぬぐい一年のあかさつぱりと 真一
 添 一年の垢さつぱりとお身拭い
 原 一年の悪夢を流す除夜の鐘
 信子
 「悪夢」を強調してみませんか。
 添 悪い夢だけ流したい除夜の鐘
 はじむ
 原 街中へ師走眺める定年後
 添 年の瀬を眺めるだけの定年後
 弘泰
 原 十二月額の裏から餅代が出た大掃除
 添 額の裏から餅代が出た大掃除
 千代子
 原 事初め手書きをします年賀状
 添 忙しい暮れでも手書きする賀状
 孝明
 原 安堵する早目に出した年賀状
 添 年賀状早目に出して安堵する
 雅代
 原 十二月胸引きしまる不況の瀬
 添 年越せるか胸引き締まる不況風
 稔
 原 十二月なんだかせわし年の暮れ
 添 何となく気ばかりせわし年の暮れ
 柳歩
 原 何事も予約を迫る十二月
 添 十二月なんでも予約迫られる
 節子
 原 この一年流転の中で般若経
 添 往く年の流転鎮める般若経
 麗
 原 エプロンがフル回転の十二月
 添 エプロンもフル回転の十二月

次の四句は助詞の使い方で佳くなります。

原 心の垢取れないものかす払い
 添 心の垢も取れないものか煤払い
 洋子
 原 ふる里が都会の風を待つ師走
 添 古里で都会の風を待つ師走
 健柳
 原 お歳暮がふるさと便こんにちは
 添 お歳暮がふるさと便でこんにちは
 さだき
 原 あれこれ無理難題の十二月
 添 あれこれ無理難題の十二月
 周子
 原 十二月あつという間に大晦日
 添 十二月あつという間に大晦日
 那珂子
 原 原早や十二月心は春へむいている
 添 原早や師走気持ちは初春へ向いている
 藤朗
 原 正月の試食している十二月
 添 正月のつまみ食っている十二月
 秋星
 原 十二月明ければ平成二十年
 添 大晦日明日は平成二十年
 文代
 原 顔見せのまねきが揚がる京のまち
 添 猛暑記録もあつという間の歳の市
 きぬ子
 原 一葉も諭吉も走る年の暮れ
 添 忘れても押しかけて来る十二月
 義章
 原 歳月は待つてくれな十二月
 添 師走でも今日と同じ明日が来る
 幹子
 原 カレンダー無ければ師走来ぬものを
 添 一気呵成にパワー爆発十二月
 靖一
 原 十二月用事ないかと猫が言う
 添 勇治

師走には師走の顔になるエビス
 もどらない月日を重ね十二月
 映子
 十二月悲しいことは忘れよう
 光子
 大晦日妻が命令調になる
 房江
 貸し借りもなく軽やかなソバの音
 次根
 十二月年金みんな予約済み
 イセ
 薬とも上手くつき合い年暮れる
 智加恵
 生きている筈で書いてる年賀状
 一男
 瑞穂の国でジングルベルのはしやぎすぎ
 徑子
 乳母車サンタの前でひと休み
 賢治
 カレンダー残り一枚寒い部屋
 昇
 【今日の推せん句】
 くれるのが少なくなったカレンダー
 神野幸乃子
 不景気が退職が何れにしろ淋しいもの。
 十月からおせち注文しています 小栢こずえ
 業者の商魂が作者がせつかなのか、何れ
 にしろ「十月から」が効果的です。
 何はともあれ無事に二人の三十日蕎麦
 吉村 幸

【私の句】

めでたさも中くらいなりの幸せですね。
 漢字一字でとても表せない今年
 一年の裁きを受ける十二月
 （登載洩れの方は役員が添削して返送します。）

秀句鑑賞

同人吟 高田博泉

— 11月号から

雑草がつくりものよりよく育ち

池原天馬

読むことも、書くことも、考えることも少しの間、休みたいと思っていた矢先、秀句鑑賞の依頼が飛び込んでくる。思案したあげく、送り返すのも失礼かと考え気を取り直してペンをとりました。

五・七・五にきっちり当てはまっている事、読む人にわかりやすい表現である事を基準にして選考させてもらいました。

今回はお年寄りを主人公にした作品、今話題の年金問題、格差問題を表現した作品が多かったようです。上手い表現で流石と思える作品に感心もいたしましたが、運悪く類想句のため、もれた方には悪しからず。

特筆すべき作品は見当らなかつたようですが秀句は沢山ありましたので、精一杯紙面の許す限り発表させていただきます。

暗算の出来る範囲で暮らしてる

高杉千歩

ご本人は非常に頭のいい方か、もしくはお

若い方かも知れません。今日一日どれくらい買物をしたのか、どれくらいお金を使ったのか、なかなか思い出せない歳になってくる私達に家計をまかせていると、すぐ破産してしまいそうです。

格差問題が叫ばれて非難されておりますが、ひとり暮らしの老人とか、年金暮らしの家庭では、多少の余裕があったとしても質素に質素に心掛けているに違いありません。暗算のひとつで全てを想像させる力があるように思います。

脚鍛え三途の川は飛び越える

板山 まみ子

最近ユーモアを感じさせる作品が少ないように感じておりましたが、この句を拝見して楽しくなりました。ジョギングをしたり、ジムに通ったりして健康を心がけている方が多いようです。本当は余り長生きをされるのも

考えものですが「三途の川」と結びつけた根性はベテランのものでしょうか。

誠にその通りでございますと言ってしまうはお終いですが、さらつと読んだ句の中に皮肉たっぷりな意味合いを含んでいるようです。世の中にはこんな事例はたくさんあります。

あとひとり足らない時に声掛かり

齋藤 さくら

常々は知らん顔をしていながら、こんな時になるといそいそとすり寄ってくる。ええ加減なものである。

ここで背を向けられないのが凡人であり、すぐに妥協してしまう。せめて抵抗の姿勢で見せなくては……。

ガンのこと知っていたよと言って逝く

藤井則彦

本人のために神経を使つて隠してきたのに、一体誰がもらしてしまつたのか。あつさり「知っていました」と言われる

と拍子ぬけしてしまふ。努力が水の泡というものである。

幸せな野草咲きたい場所で咲く

宗 水笑

好き気ままにどこでも、どんな環境にも生きてゆかれる強い精神力、自由でさぞかし幸せと思つてゐるでしょう。私も一度はこんな生き方を真似したいものだと思つています。

日本の四季順番を間違えず

澤田 和重

どこの国でも四季を楽しめるものではない。日本では多少のずれはあつても、確かにきつちりと四季は巡つてくる。四季それぞれの歌があり、四季それぞれの食べものがある。四季それぞれの服装でオシャレも楽しめる幸せな国である。地球温暖化によつて、こんな自然の恵みが消え去つてしまうことのないよう祈りたい。

定年の夫ネコより手がかかり

須郷 井蛙

収入のドル箱が消えたからと言つて、こん

な言い方はないだろう。しかし、お父ちゃんも現役と同じ姿勢では、いずれ女房にはこんな目で見られるようになるのが目に見えてゐる。あつさりとしていて川柳味のある句だと思ふ。

親孝行した氣にさせる墓まいり

海老池 洋

成人になれば墓まいりのあとは、氣持がすつきりとして何か良いことをしてきた気分になるものである。自分の親ならなおさらである。生前の不孝を詫びながら手を合わす。清らかな心になつて歸つてゆく。日本のいい風習だと思ふ。

ひと回り大きくさせたのは挫折

加藤 茶人

人生には挫折する事態が何度となく巡つてくる。そこで幕を引いてしまふのか、その都度反省しその都度勉強し、その都度人の心を理解するようになるのかは、大きな分れ目になる。挫折を機に大きく羽ばたいて欲しい。

招かない人にも聞く自動ドア

安芸田 泰子

さらりと言つてのけているが、皮肉たつぷりの句である。人間様でも見抜くことは出来ないのに。機械ではなおさらである。

極楽は遠慮氣兼ねのない昼寝

川崎 ひかり

誰にでも一度はこのような心境になつてゐる事だと思ふが、文面から察するに、一日中働き詰めの人か、定年で氣楽に過ごせる身分になつた人のように受けとれる。極楽トンボは多分後者、うまく表現している。

他に余生を詠んだ句が沢山ありましたが、目に止つたものを拾つてみました。

背伸びしたつけが回つてきた余生

原 賢

年金が減れば減つたで生きている

中塚 礎石

ふたりして水と空氣のように生き

福西 茶子

鈍行で乗りつぎながら行く余生

奥谷 彩子

だんだんと青信号が減る余生

平田 実男

生かされて診察券が増えていく

小泉 ひさ乃

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 11月号から

岩崎 みさ江

里の荷に母の達者が転げ出る

森下一知

いくつになっても母が元気でいてくれることは嬉しいことです。下五の「転げ出る」がその喜びを生き生きと表現し、非常に効果を上げていと思います。

原発を活断層は区別せず

伏見 雅明

地震が起きて解った活断層の存在。自然の恐ろしさをつくづく感じさせる句です。大宇宙の仕組みの中で、どうしようもない人間の無力を痛感いたします。

時々は叩くりズムを変えてみる

羽田野 洋介

何を叩いているのでしょうか。肩、太鼓、扉、胸、または木魚?...等、想像を逞しくさせられます。制限された字数で表現する不自由さが、思わぬ効果を産むようです。

すっぱんの私に戻りゆく余生

田中 すすず

すっぱんで産れてすっぱんへ戻る。女として、不安もあり、またさっぱりと清々しくもあり複雑です。すっぱんの余生。せめて心にお化粧を願わずにはいられません。

国政は揺れても稲穂重く垂れ

岩本 雅代

我が国の、食糧自給率など何処吹く風と、党利党略に明け暮れている諸先生方に、この句を是非読んで欲しいですね。

答弁のようにかみあわない会話

長島 亜希子

もしかして国会答弁を上手にからかって、とも思いますが、果してどうなのでしょう。

夕焼けがきれいだ明日を信じよう

原田 すみ子

明日の晴れを予言している夕焼け。この壮大な饗宴の前には、明日を信じる気持ちも湧いて来ようと言うものです。ほのぼのとした希望に満ちた句です。

食べるのはちよつと待てまで京料理

小林 わこ

すぐ食べてしまうのは惜しいほどの京料理の見事さが、目に浮かぶような句です。言回しがユーモラスで、にこっとさせられます。

千の風とうあろうとも墓参り

増井 ヨシ枝

「千の風」には、私も随分癒されました。でもやはりお墓に参らずにはおれませんでした。残された人は、自分の心の済むようにするほかはないのですから……。

幸せのバズル最後が嵌らない

藤本 直

やり直しの利くバズルと違って、人生のバズルはどうも厄介なようです。まして老いて後の幸せのバズルを完成させるのは難かしい。鍵は「感謝」でしょうか。

甲子園の純真無垢を疑わず

清水 英旺

子供に罪はありません。「純真無垢を疑わず」この言葉に拍手を送ります。

守るものあって消えない力瘤

吉田 陽子

人として守らなければならない諸々の事を大切に生きておられるのを感じます。家を守り人を守るのは大変ですが頑張ってください。

無人駅今日もやさしい風に逢い

渡辺 好栄

花が一隅に、花壇にはコスモスがやさしく風に揺れている無人駅。それに目にとめて和む作者を想像させるやさしい川柳です。

続選おそろし

選者層の厚みが川柳発展の根元

早川清生

(承前) 川柳は選に始まり、選に終わる。私は柳壇の情勢にうといので、選についての好論評があればぜひご高示を得たいと思う。私も各ジャンルを通して選に関する先人の言を探したがほとんど見当らず、わずかに三省堂の現代短歌大事典に「一略」選歌は添削とともに、主宰者や選者の理論にもとづく具体的な作歌指導」とあるのを見たにとどまる。

薫風さんによれば、路郎師は作者の個性や創造性を伸ばそうと選をされたという。師から直接指導を受けた私として、そうであったと思う。師弟関係の中でということもあり、人数も少なかつたのでできたことであろうが、このため不朽洞は多士済々の状況であった。

いわゆる大家を除いて、一般作家の場合、自分の作品は自分が選定するのではない。選といふシステムが厳存し、選者との共同作業に

より選別する。この場合も選者の方が優位であり、作者はいわば素材の提供者たるにとどまる。もちろんこうした中で文芸としての伝統が再確認され継承されていくわけでもあるが、しかし選者と作者の間に主張や手法や表現についての違いがあり、あるいは鑑賞力に格差のある場合、作者期待の名目もしばしば永遠の冥句となってしまう。あとで没句供養をしても追いつかない。先に述べた朝日新聞の歌壇俳壇など、共選制度はこの弊を除くための措置であり、本誌でも採用されているが、選者がバランスよく配置された場合をわめて有効に機能する。選といふシステムを拒否するなら、十八歳の寺山修司がいきなり短歌雑誌募集の新人賞特選をかちとって、歌壇デビューを果したやり方がある。才能がいるが。

選者に技術的なまですさがある場合は困る。小集などで選者が安直に選ばれることがあり、理由もあるが、そんなときはこれも勉強、試練と達観するほかはない。選者が自らの能力を超えた作品を選ぶことはない。自分の目線より上は見えない。互選などで初心者の句はほとんど初心者が選んでいるのを見てわかる。他面、大衆文芸として川柳は誰にでもわかり、得心されねばならない。他の短詩型に比し圧倒的な広がりや包容力をもつものである。作者にも一般読者にも当り前だがお

もしろいことが要求される。作品が生まれる過程でそれに応えるのが選者の技でもある。歴史をみても、初代川柳以来、六大家に至るまですぐれた選者がある限り川柳の大発展があるからである。今日の複雑な社会象をすべて捉え、模倣や剽窃まで目配りし、併せてかつての小泉純一郎のバワーがあればさらによい。選者にはそんなマルチ人間が求められる。昔も今もリーダーはたいへんなのである。

資料探しをしていたら、古い文献だが、初期の川柳雑誌に「選および選者」と題する路郎師の論考があった。時代的な変遷にご配慮の上参考とされたい。「選する人の人格や、社会に関する知識の深淺、川柳に関する研究範囲の広狭等によって、選ばれる句風が余程違ってくる。であるから個人選の場合にはその選者が、どんな選者であるかを一ト通り知っておかなければ、折角巧な、特異な句を作っても、それ等の選者によって全く闇から闇へ葬られてしまう」これは前稿塩野さんの「傾向と対策」論を彷彿とさせる。別号だが「川柳雑誌調」というような言葉をちよいちよい聞くが、本社は、各目の特長を伸ばし個性の發揮を目的として進んで居るのであるから、決して型に囚われるような事はない」ともあった。選は普遍的なものだが深奥なものだ。

本社十一月旬会

十一月七日(水)午後一時
アウイーナ大坂

昨日の悪天候が嘘のような行楽日和。
旬会は11月から昼間の旬会となる。

出席は95名。お話は理事の岩佐ダン吉氏。

まず、念願の鶴彬顕彰碑建立への皆様の協力を感謝し、併せてその進展状況等々、活動内容のくわしい報告があった。つづいて氏が敬愛して止まぬ、鶴彬の歩みと川柳、そして今、なぜ顕彰碑建立か、と今日のテーマに入る。

鶴彬の代表句であり(顕彰碑句)である。

暁を抱いて闇にある書

他、鶴彬の句を八句披露して、一月の植樹祭、九月十四日の顕彰碑建立、植樹記念川柳大会へのお誘いもあった。

最後に顕彰碑建立の達成へ皆様の更なる御支援、更なるご協力をお願いして熱い三十分間が過ぎた。

月間賞は堺市の柿花和夫氏に輝く。

(司会)昭・美籠 (協取り)扶美代・蕉子

(受付)葉子・美花 (清記)直樹

席題 「苦い」 玉置 重人選

苦瓜を最初に食った向う見ず

鮎のわたビールに泡に落けてくる

母ちゃんの苦言やんわり効いてくる

友の悩み苦い水でも飲んでやる

地球には苦い思いがたんとある

噛みしめて甘味に代わる苦い味

苦い経験積んできました今の僕

頑固だが苦味のきいた父が好き

饅頭のお後は苦い茶が怖い

苦すぎる薬今頃効いてくる

裏のあるお世辞ちよつぱりほろ苦い

苦い過去包み隠さず子に伝え

弱点をズバリ突かれた苦笑い

苦い酒飲んで私が試される

ほろ苦い思い出がある傘の中

ブラック珈琲息子はもう大人

従軍の記憶日ごとに苦い味

苦勞した頃は何でも旨かった

苦いお茶に母はやさしい目をしてた

あの人に貰った飴は苦かった

苦い水飲んで少うし欲が抜け

ひと言が胸に居座る苦い酒

花嫁の父苦虫を噛んだ顔

栄転という名の苦い杯をほす

男はんもさんまも苦い方がよい

淳司 靖鬼 一步 孝一 雅文 哲子 太郎 更紗 いさお 能子 萬の 天笑 萬的 丹吉 寿子 みつこ 深雪 孝一 いわゑ 千代 恵子 時雄 尚士 富美子 房子 泰子

ロボットに甘い苦いは分らない

ハードルを越えろと恋が苦くなる

苦手だと言えバソコン押しつける

苦いのちつとも効かぬ惚れ薬

枕許でリングを摺って待っている

コーヒの苦さ別れが切り出せぬ

佳

苦い水厭だとホタル消えました

なんべんも苦汁を吞んできた器

いのち真紅に炎やして苦い片想い

苦虫へびつくりぜんざい食べさせる

苦かった男添うほど甘くなり

人

苦い顔したから多分オーケーだ

地

大笑いしてくやしさを噛み殺し

天

山ほどの苦い薬で生きている

軸

エビローグ妻の科白が苦くなる

兼題 「煩わしい」 安芸田 泰子選

煩わしいことはなくて済む齡

見込まれて煩わしいと言えぬ自負

二次会は煩わしいと思わない

呼ぶまでは来ないで欲しい台所

煩わしい手続いやでまだ夫婦

そ知らぬ顔で補聴器をオフにする

日出子

アキ

瑠美子

修

耕治

希久子

柳昌

朝子

寿子

みつこ

蕉子

見清

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

天笑

食べることも煩わしいと思わない
数えるのも煩わしいほどあまり
煩わしい話に猫が顔を出す
計算が苦手になって百均へ
煩わしい話になった遺産分け
挨拶が煩わしくて迂回する
情報過多煩わしくなる昨日今日
気配りがすぎてトラブル絶え間なし
喋りたくないのに話かけてくる
煩わしい介護もします母だから
煩わしい家事押しつけて妻テニス
電話ベルまた信心を売りに来る
何処へでもべったり付いて来る夫
煩わしいけれど大事な夫です
家系辿ると複雑なことたとある
面倒と言ってる顔が嬉しそう
煩わしいはなしを嫌う夫婦著
しんどいな情報処理がたまりだす
面倒と一度もいわぬ亡母でした
煩わしいお人が傍にいてくれる
朝昼晩きつちり食べるひとと居る
お隣の香水きつい新幹線
差し伸べる手が煩わしい反抗期
厄介なことが嫌いで阿呆で居る
煩わしい話はめしの後で聞く
淋しいが煩わしくはない孤独

佳

東吉 天笑 ダン吉 和夫 鐘造 正雄 萬的 ばっは 美代子 保州 章久 重人 幸雀 哲子 太郎 柳昌 岳人 ばっは みつこ 光久 朝子 五月 富美子 昭 能子 いさお 能子 雅文

三猿が煩わしさを遠ざける
うるさいとテトラボットが思う波
煩わしい地球遊はす大宇宙
空の蒼に煩わしさも吸い込まれ
人
わずらわしい影が黙って従いてくる
地
人間に疲れて海が見たくなる
天
妻の愚痴ジャズと思えばまた楽し
軸
義理だ思だ狭い世間が住みにくい
兼題 「底」 山口 光久選

光久 好 たもつ いわゑ みつ子 富美子 直樹 美義 准一 郁夫 東吉 玄也 たもつ 一步 鐘造 則彦 いわゑ ダン吉 欣子 柳昌

土下座しかない言い訳が底をつく
底冷えがしてる年金物語
腹の底見せた男と飲み直し
へそくりの底ついたので寝ています
散骨は乙姫おわす海の底
嬉しいと底がなくなる父の酒
えんぴつに脳の底までのぞかれる
耳底に母のひとこと生きている
即答は避けて心の底を読む
胸底で静かに燃えているマグマ
踏まれても咲く雑草の底力
本当の自分に返る夜の底
眼の底に焼きついてるキノコ雲
談合の沼は深く底がない
いい話心の底に溜めておく
人間の底で発酵させる愛
底抜けに明るい妻が居る安堵
愛情が出尽くしたので別れます
闇の底から少年きつと這い上がる

佳

幸雀 義 天笑 玄也 楓楽 柳昌 いわゑ 葉子 泰子 哲子 集一 洋 正雄 好 一風 アキ 鐘造 舞夢 たもつ アキ 五月 哲子 ばっは みつ子 人想うひとりの夜の底の底

地
どんな底でリベンジの火を温める
いさお

天

一番手が底にファイトを溜めている
能子

軸

底抜けに陽気な妻がいてくれる

兼題 「キャンセル」 河内 月子選

飛行船キャンセル待ちのお金持ち
慰謝料がないから書けぬ難縁状
キャンセル待ちしても貴方に嫁きたい
一泊の旅行キャンセルする介護
長生きもキャンセルしたい時がある
あの事故機神がキャンセルさせたのだ
同期会やはりどたキャンしたあいつ
キャンセル料ケチり嵐のゴルフする
キャンセルしたい妻に敷かれている弱み
キャンセルは致しませんが誓詞読む
キャンセル料取って戻ってきた娘
キャンセルの言い訳にまた叔父が死ぬ
せつかのデパートでキャンセルや
別れはつたので後釜に押しかける
できるならキャンセルしたい顔の皺
ダイエツト口がキャンセルしてしまい
ドタキャンが続いて輪から外される
なあお前クーリングオフ未だ効くで
折角のプランに台風の予報

律子 郁夫 蕉子 耕治 更紗 ばつは 和夫 時雄 像山 たもつ 玄也 淳司 天笑 とし子 美智子 朋月 弘風 重人

病院の予約忘れて飲んでいる
文化勲章辞退しますと言った人
顔立てるだけなら承知する見合い
極楽のキャンセル待ちに長い列
手をついたらキャンセル駄目と釘刺され
キャンセルの出来ぬ命で生きている
出きるならキャンセルしたい今の嫁
キャンセルのあとで行きたくなつた旅
キャンセルが出来る程度の恋に酔う
胃カメラがキャンセルさせたグルメ旅
今でこそ婚約破棄に感謝する
キャンセルが続いて信用をなくす
キャンセルが人生変えた運不運
身勝手なキャンセル泣かされる幹事

佳

キャンセルの言い訳ちゃんとメモしとく
食へ歩き待つていたのに風邪に負け
返金が少ないキャンセルは止めた
飲み会はキャンセルしない僕の主義
出来ちゃった婚はキャンセルさせません

人

キャンセルのお蔭で命拾いする
真心をキャンセルされた事がある
銀河行きキャンセル待ちの列にいる
喧嘩してハワイキャンセルしまったな

地

天

軸

真心をキャンセルされた事がある

銀河行きキャンセル待ちの列にいる

喧嘩してハワイキャンセルしまったな

軸

真心をキャンセルされた事がある

銀河行きキャンセル待ちの列にいる

喧嘩してハワイキャンセルしまったな

軸

真心をキャンセルされた事がある

銀河行きキャンセル待ちの列にいる

喧嘩してハワイキャンセルしまったな

軸

真心をキャンセルされた事がある

銀河行きキャンセル待ちの列にいる

喧嘩してハワイキャンセルしまったな

軸

真心をキャンセルされた事がある

銀河行きキャンセル待ちの列にいる

喧嘩してハワイキャンセルしまったな

兼題 「底う」 松原 寿子選

同僚を底い上司に食い下がる
叱つたら泣く底つたらつけ上がる
同じ傷察しつくから底う仲
両の手はあなたを底うためにある
火にもぐり阿修羅となつて子を底う
底われた記憶で底う人になる
口ポットが人間さまを底つてる
半端じゃないその底いよう何がある
上り坂気遣う母の息づかい
肝臓を底い地獄の休肝日
徹底的に仲間を底う蟻の群
底うのも突き放すのも愛だろう
九条に底われ戦しない国
子を底う翼そろそろぼろぼろだ
傷口を底うみんなの輪の中で
底い方異常と噂立てられる
石投げて波紋を底う赤いバラ
強がりの心の傷を底う酒
てのひらで底い折りの灯を点す
片目つぶつてにいちやんを叱る真似
どんな時も底つてくれるまるい月
よう失敗するがあのいい人よ
弱点を知っているから底い合う
底い合う頃から夫婦らしくなり
庇われてパワーの違ひ知らされる
ダン吉 好子 哲男 岳人 准一 三喜夫 日の出 重人 たもつ 直樹 善純 善純 日出子 深雪 郁夫 集一 美籠 楓楽 庸佑

弱虫を庇うやんちゃがいた昔
庇うたら腕にすがって泣きつかれ
落ち込んだわたしを庇っている私
命懸け庇ったひとと遠い空
離れ無償の愛のありつたけ
これ以上ヒト科を庇えない地球
庇ってくれた母にクリーム塗ってやる

佳

薔薇の花庇った人の傷だらけ
庇うからその三倍も痛い目に
碧い森が庇ってくれたかくれんぼ
身を庇うもの何もない裸木だ
母なるも庇い切れない罪がある

人

人間をもう庇わぬという地球

地

どんな時も庇ってくれる屋根がある

天

羊水でしつかり庇う宝もの

軸

日記閉じ優雅に庇う母唄ぶ

兼題 「退屈」

河内 天笑選

釣り堀と草野球見てやつと昼
退屈が馬券売り場に屯する
退屈を知らぬ私はロボットだ
風のないときは退屈そうな旗

淳司 天笑 アキ 孝一 幸雀 保州 昭

美代子 月子 義子 房子 深雪

洋

いわゑ

ばつは

正雄 昭 房子 保州

何遍も聞いた話を聞かされる
退屈を見透かされたか誘われる
退屈を絵にしたような檻のクマ
次々と退屈させぬ政治ショー
退屈な男と知ったハネムーン
退屈でしようねと家事を仕込まれる
午前中医者のはしごで暇な午後
相槌があくびに変わる孫自慢
カラオケで自分の曲を待つ合間
退屈の虫を殺しに繁昌亭
退屈な時は万札数えます
退屈をしてる背中には隙だらけ
退屈を救う女神がよく喋る
退屈を救う女神が傍にいる
歩こうか田舎のバスはまだ来ない
退屈を楽しんでいるハンモック
退屈な魔女は意地悪考える
何もせず欠伸もろたり返したり
退屈な鬼に欠伸を移される
退屈と言う贅沢な佐住い
小春日に伸びてもない爪を切り
どっちゃでもいけど見るワイドショウ
退屈を鈍感力で乗り越える
退屈な一日血糖値が上がる
退屈な話に耐えるのも修業
あくびした時だけ講師こっち見る
来賓はみんな退屈しています

玄也 (志) 千代 洋 修 玄也 尚士 房子 (矢) 五月 正 柳弘 たもつ 楓楽 重人 光久 美代子 能子 萬的 修 鐘造 集一 朋月 朋月 (矢) 五月 弘風 義 光久 時雄 富美子

退屈が饅頭ばかり食べている
退屈を辛抱すれば良い夫
散ることを知らず退屈した造化
雑踏へ退屈捨てにローヒール
拍手せず歌わず寝てるふりしてる

人

スーパへわしも行くわといってくる
背もたれがあつて退屈してしまう

地

退屈の拳句に覗く冷蔵庫

軸

浮気せんようになったらかすむ脳

◇

十一月までの本社句会皆出席は次の通り
です。間違ひがありましたら、事務所まで申
し出してください。(順不同)

穴吹尚士 井伊東吉 上嶋幸雀 岩佐ダン吉
榎本舞夢 江見見清 大内朝子 奥田みつ子
太田 昭 鍛原千里 川原章久 太田扶美代
小谷集一 都倉求芽 谷口 義 鴨谷瑠美子
西内朋月 西出楓楽 長浜美龍 鈴木いさお
坊農柳弘 藤井正雄 藤井則彦 平嶋美智子
村上玄也 前たもつ 三宅保州 宮本三喜夫
米澤飯子 吉岡 修 矢倉五月 山岡富美子
山本希久子 (三三名)

ふしなめ

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

京都塔の会

都倉

求芽報

マネキンに芒の秋を添えて売る
善悪の句読点ない無頓着
鬼部長しこり上手に吹き飛ばす
爆発の夫婦はしこり対しこり
誤解かもしれぬしこりを割ってみる
痛いとも痒いも知らぬ大手術
抓られた痛さを自慢そうに言う
蠅たたき痛いといえぬ虫叩く
秋風が胸の痛みを撫でてゆく
少年の痛み気づかぬまま秋に
痛いとはばかり当たる椅子の脚
長寿国化石のような人もいる
生きている化石が口をまた挟む
負けない化石になっても生きてやる
不意の計に化石になった喉仏
父に叱られ化石になったいた昔
迷い込むアメリカ村にいる化石
情報のおぼれてる化石

牛延 ふりこ 庸佑 欣之 輝美 典子 啓子 美義 宏子 求芽 綾子 則彦 福子 とし子 篤子 朝子 満子

急ぎすぎではアンモナイトのひとりごと
しきたりは化石にしない三代目

川柳茶ばしら

板山まみ子報

身の程を超えた話にある魅力
荒磯に寂しく響く海女の笛
天気予報予定はないが常に見る
アンダーライン引いた要点なんだっけ
ほほを撫できつと母なり千の風
信号を出しているのにこき使い
割引きの切符ばかりで旅の空

長柳会

村上

直樹報

柿熟れたさんまも旨い世は平和
助け合う向う三軒両隣
秋風にスパー行きが楽になり
あたりまえ着服すれば半屋行き
行く先を決めず青春切符貰う
装いのヒント姿見から貰う
初盆も終りやれやれ蟬しぐれ
いやいやで四角の部屋を丸く掃く
行政の福祉届かぬ青テント
カーナビに連れられて行くひとり旅
満ち足りて福祉に疎い私です
エブリデイさんまづくしで諸事儉約
すきま風吹いて女房が旅仕度
かんできで秋刀魚焼く目に茜雲

直樹 不二雄 正一 光弘 英美 靖子 やすひろ 正博 武男 一慧 たいし 輝子 よしお もこ

コロコロとこらんで見たい蓮の露
もらい物次の行く先決めてます
祭笛遠くに聞いて焼くさんま
季は秋にこころに福祉欲しくなる
追討ちをかけぬ福祉を待っている
難題をさつと解かれた口惜しさ
ピチピチの秋刀魚ジュウジュウかばすをギョッ
我が家にも老老介護至近距離
福祉論明日を覗く針の穴
海の彩背なに残している秋刀魚
行き先は地獄と決めて好みに生き

川柳ささやま

遠山

可住報

合図ごと京都五山に火が走る
ツーカーの夫婦に合図は不要です
まだまだの少し手加減老いブラン
温暖化自然破壊の合図かも
うす味に馴れて喜ぶ母の味
まだまだのあたり満足して生きる
秋の風呼んでくれたよ母の味
天界も晴天だから彼岸花
まだまだとビル注ぐ時気を使う
人生の味の出る頃旅立ちぬ
母の味忘れていない娘が帰る
合図ないうちに検診受けてくる
母の味包んでくれた里帰り
年金があかんあかんと言う合図

純子 章 美緒子 二英 文子 美紗子 靖子 多美子 照代 かほろ つや子 富美 哲男 可住

マサ 明子 けい子 芳野 正子 和子 淳司 敬二 富美子 正美 幸雄

西宮北口川柳会

黒田 能子報

考えが纏まりきらず眠るベン
遺言状ベンが滲んで書きなす
いちじくが並ぶと亡父の顔浮かぶ
栗こはん今年も炊いて無事祝う
記念樹のたわわの柿も十五歳
果物籠目立つところにバイン盛る
青リンゴサクリと割れて少女羽化
メロンよりリンゴの好きな子に育て
初物の果物講釈ついてくる
耳栓をしても五感が聞いている
福耳のわりに貧相な目鼻立ち
スクープへ駆け出す記者の地獄耳
メルより耳で聞きたい人の声
耳許で囁く孫の熱い息
掃除する耳をまかせ膝枕
大声を出すから耳が遠くなる
渡つておいで信じて出した第一歩
世渡りが下手で見落す裏表
亡母かしら他人の空似風渡る
バスポート渡航せぬまま期限切れ
海渡る風に平和が届かない
思いっきり飛んだら欲もふつきた
忌憚なく話しガス抜きして帰る
準備して一年になる非常品
三日月と握手出来そう十五階

五月 順子 富喜子 松煙 哲男 奮水 比ろ志 正和 光久 いたる 折杭 悦子 宏一 朋月 忠 わこ 曙蝶 りこ 弘子 求芽 紀乃 美籠 二英 歳子

好きだからきつと私に合う帽子
八月の海は悲しみ抱いて風ぐ
ささやかな実り夫婦の朝あるき
折りたたみの杖をバッグの底に入れ
オムレツの匂いが家族丸くする

ほたる川柳同好会

水野

汚いもの豊かさの裏に見えかくれ
温暖化悲鳴あげて世界地図
米寿の師まだかくしゃく墨を磨る
祭りの音遠い昔を連れてくる
豊かさの中で資源の無駄を説く
明日嫁ぐ娘が風呂で歌つてる
星空が露天風呂にも一人旅
銭湯の友は上下のない仲間
巡り来た豊かな時代戸惑いも
五十年忌祭りのような賑やかさ
追い焚きをしつつ見上げた冬の月
うたせ湯の目線の先を蝶が飛ぶ
嫁はんを宝と崇め平和です
八十が敬老の日立つ電車
はて夫婦敬い合うて生きたやら

川柳塔鹿野みか月

土橋

年金で福祉の窓にきやかい
ナイターを見終え月との仕舞風呂
物忘れ思いだす度よさる老い

哲子 嘉代子 耕治 静子 孝一 契子 柳童 美智代 祥風 見清 勇治 信男 禮子 雪子 桂子 昭子 久子 幹治 黒兎 勝 螢報 幸枝 彩子 弘子

佳句地十選 (11月号から)

黒田 茂代

真つ当に生きて背骨に芯がある
無料でも不用なものはおもらわな
十七歳無償の愛に気付かない
消しゴムを使い果たしてまだ迷い
使つたら違いが分る金と銀
少年にもらった席が心地よい
休ませてあげたいひとが休まない
感動を静かに閉じる裏表紙
名將は歩の使い道知っている
風を読むためにときどき立ち止まる

それぞれの形で粒は花になる
教壇は諸君はげます鞭をふる
諸君の辞書もボロボロになつてね
専攻と畑ちがいの職に就く
土紙めて畑の機嫌とっている
この腰も畑のせいにしておこう
芋太り畑も秋の顔になる
畑仕事段取りさせる健康体
政治家が馬鹿で畑を遊ばせる
畑ちがいの子が相続をするらしい
塩味の情が仁と利いてくる
萩すすきにつこり揺れて手折らせぬ
とりあえずにつこりしとこ姑ぐる

てるみ 桂子 美籠 昭二 扶美代 一風 美恵子 朝子 俊夫 楓楽 和子 八重 汲香 ひろこ 忠良 菊乃 久枝 公子 完司 宣子 節子 睦子 くに子

赤ちゃんがにつこり私もにつこり

につこりと自動ドアからお出迎え

お借りした傘でにつこりさようなら

残照どころろ笑う秋なすび

ウォーキングしながら笑顔作りする

初対面につこり頭下げておく

年の差をにつこりとして悟らせず

お茶の間の母に無邪気な顔がある

赤ちゃんの無邪気が少しずつ消える

相好を崩す爺さまに邪気が無い

記憶から無邪気を割ったメシ茶碗

邪気消して十五夜の月眺めてる

邪は無くよく食べてよく眠る

みどり

みさ子

はるお

きみ子

照彦

実満

孔美子

かおる

永子

和枝

諷人

武彦

螢

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

意地を張る似た者夫婦それも良し

音もなく奇る年波に逆らわず

ドア閉める音で機嫌の判る仲

平和への足音消して行く軍靴

成熟の具合を音で知る西瓜

選挙はたて焼きですと裏返し

寝静まつてしんみりと聞く秋の虫

ゴミ拾い見えないものが見えてくる

秋風に古い手紙のいきづかい

自転車で玄米パンが来た昭和

傘を干すロマンの花は散ってゆく

国会の質疑白熱テレビ好き

道子

ゆき子

和子

守弘

幸子

野薫

宏一

純

寛之

年代

東園

昭三

我が命よくももったり米寿です
同じような犯罪おこるこの乱世

川柳塔唐津

仁部

四郎報

サブリメント気にする時は遅すぎた

リハビリの窓に動くはコンバイン

身体検査無事で大臣席につき

非常食詰めた袋を置いてにげ

食べ頃は貴女次第と来たメロン

日本語の初歩がべたべた相撲部屋

方便の嘘をつくらう次の嘘

浜のゴミおや軍艦の落とし物

高知川柳社

川竹

松風報

わびしさも慣れて独りの誕生日

誕生日免許更新検診日

誕生日ちびりちびりと飲む至福

誕生日命のポスト凝視する

誕生日孫も覚えていてくれる

教え子と星座探した夏休み

流れ星かなわぬ恋とあきらめる

愚痴までは聴く間がないと流れ星

熱帯夜星のささやきなら聞こう

メルヘンのままでおきたい天の川

星の降る宿で癒した胸の傷

妥協点こそと握る仲裁者
穏やかな人とすんなり妥協する

千鳥

京子

暖

哲史

美々

典雄

功

正躬

幸子

良雄

てるみ

栄美子

千恵

大猿の仲にもあった妥協案
損得はおいて妥協のいい仲間
自己主張一応させてもらいます
不本意な妥協他人のせいにする

川柳花の輪

妻谷

重風報

揉めごとは正論皮肉割り切れず

皮肉にも足を痛めたウォーキング

冗談の皮肉が胸に突きささり

価値観が一寸違つて出る皮肉

二つ三つ皮肉を添えた寄付集め

いつまでも元気ですねと褒められる

古希迎えこれが節目と若返る

節目にはいつもおいしい御赤飯

価値観を変えた節目の大地震

団塊の節目余力の積乱雲

川柳クラブわたの花

山本

宏至報

機器音痴ネット社会の外にいる

豊かな陰で根性やせていく

気象庁よりばくら確かとカエル鳴く

湧き水のつきぬ心が嬉しくて

旅人になって優しい風に会う

カタログのモデルが良くて買われる

網一つ棒一本でバランスを

送り火を拝み訳なく涙する

根性の試練を踏んで歩く靴

善栄

一幸

ミツ子

君江

耀一

民

知佐子

美代子

莊司

博子

俊子

みどり

初江

和恵

房恵

親子二代総理の椅子は待っていた
こしかたの跡ふりかえり老いを知る

温暖化鯨も鱈も熱帯魚

安全の手ぶらが階段かけ上る

母の棺苦勞の跡も入ってる

一枚の写真が縁で半世紀

背水の陣へ根性ためされる

そろそろとポツクリ寺に願かける

ゆつくりと訳聞いてやる父の顔

錦繡の山河待ち侘び旅バンフ

欲の無い信心神の目にとまり

お荷物に成りたくなくて万歩計

根性では嫁も負けてぬい勝負

辛抱は遺書にはないぞニート族

地球にも秋がやつと来ましたお月さま

今日も雨お菜が底をついてきた

言い訳はせずに謝れ父の声

この暑さ天女も降りて水あそび

そんな訳ないやろという思いこみ

古里の風を充電して帰る

言い訳をスラスラ嘘のすぐにはば

つぶみ川柳会

小谷美ツン報

息拔きにひょうたん島に行つてくる
土壁をベタベタ守るものがある
まだ父にベタベタ羽化も近かに
こつそりとかじつたものしずくあと

美ツ千
ひろこ
孔美子
尚子

たえこ

正春

浩三

幸枝

晴美

宏

朝子

美はる

欣子

ふりこ

義明

いつふみ

宏至

はじむ

妙子

克美

愛子

孝子

和子

ますみ

一風

いつまでも選挙ボスター目に余る
携帯のどこかぬ島で夏休み

ワックスをかけ途端に孫が来る

ロケットが寝てべつている種子島

山峡の蛇行命を洗われる

トンネルが出来て蛇行の道消える

仲良しもベタベタ過ぎて興醒めだ

帰れない近くに見えて遠い島

ベタベタと話しこまれて気が急ける

ベタベタと甘える夫を塩漬けに

おつとつと頭の中が蛇行する

神様の島で育つたあほうどり

島陰で誰か吹いてるハーモニカ

もつと大きく蛇行して過去にする

無人島魂だけが住んでいる

体内に四万十川が流れとる

蛇行したかたち皮が脱いである

川柳ふうもん吟社

夏目 一粋報

ヘルシーを通り越して餓餓の子よ
寒風にしこかれ太くなる根っこ
母病んでいじらしいほど手伝う子
ヘルシーに生きて確かな物を見る
あの野郎しこをしたいが歯が立たぬ
外孫が泊まって行けと引き留める
三歳の孫がわが家の殿様だ
殿様を泣かす虫歯が一つある

洋々
一瑤
節子
無限
清信
志げ緒
一京
美恵子

和子

美知江

京子

龍枝

天人

かつみ

幸恵

芳江

和

雄人

睦子

重忠

きみ子

螢

芳光

石花菜

宣子

宣子

宣子

宣子

宣子

長生きをしたいが一人残される
正直な花に季節を教えられ

猛暑耐え律儀に季節野の花よ

空腹もじつと耐え待つ子の寝顔

生きること諦めぬ手で米を研ぐ

歩きたい夫のリハビリいじらしい

嫁姑決してしこはしなさんな

妻と子と犬が家臣のお殿様

時折は自分探しの本を読む

いじらしい盲導犬よありがと

殿様のように育てた子の狂気

我がままな女でしこに困り果て

八十路坂そろそろタンスしこしよう

ヘルシーとエコばかりでは味気ない

お守りにする受験子いじらしい

しみじみと砂丘歩いた事がない

殿様と言われたことも無く余生

殿様が威張って家来ついで来ぬ

握手してから殿様が好きになり

絵裁選チャンスの椅子はどなたかな

羽根のばし殿様だつて遊びたい

感情の錆を落として生きている

竹原川柳会

時広 一粋報

急げ急げと一番星がささやいた
急ぐからだろう信号赤ばかり
二人旅急いで歩く訳もなく

蘭幸
笑子
現代

雅女

金祥

夢路

孝男

かをる

昌鼓

春名

殺

圭一郎

義徳

茂登子

あしび

菊香

由美子

蟹郎

秘

行男

喜美子

善夫

益子

はつ江

一粋

目を入れたダルマが急にいばり出す
茫然自失急に一人で生きるとや
産卵の子亀は海へひた走る

人生の欲が求める甘い飴

飴よりもおまけが目当てグリコ買う

温かった祖母の背中とニッキ飴

金太郎飴なめ切られてもいい顔だ

蟻のボス飴玉運ぶ手段練る

ボケットに愛と平和の飴がある

川を詠む川の流れに逆らわず

人間の知恵だけでは出ぬ墨の彩

温かい一言もつたいなく受ける

母さんを癒す息子の笑顔です

どんな夢見て寝ているのか犬よ

物のない時代素直に子は育ち

十人十色子育てに在る忍一字

記念日に咲かせるバラを育てて

三人目育児ノートをはみ出てる

産みました育てましたと言えま

甘い顔すれば国技が育たない

千の手で育つ初孫という宝

遺伝子の不思議も嬉し孫育つ

東大阪市川柳同好会 森下

人間の海あやふやがよい

あやふやな男気にする風見鶏

あやふやな金が渦巻く永田町

静風

幸子

房子

笹舟

節生

淑子

和枝

貞子

あゆみ

節夫

太虚

比呂子

史子

千枝

栄恵

輝恵

汎美

敬子

慶子

厚子

一路

愛論報

美弥子

敏子

賢子

夜神楽に見とれ白々夜が明ける
続編をかすかに期待して別れ
続編は二度目の恋の事を書く

歲月の重みに耐えた背の痛み

戦争を招かぬ九条の重み

介護法いのちの重み削られる

ぜいたくをまとい心が痩せていく

朝獲りのその場で食す過疎の贅

乱丁を一つ見つける熱帯夜

合併の乱デパートも銀行も

快刀乱麻世相を斬って捨てるベン

乱暴な子に耐え母の顔になる

松露川柳会

小西

墓掃除先祖を偲び汗流す

亡父母に黄泉楽園か問うてみる

秋風にほつとしたよな墓石群

野仏にそつと花添え合掌す

千の風父母の墓にも届けたい

先代の遺徳を偲び墓磨く

高台へ行くすえ決めて墓地を買う

遠い日の戦国時代五輪塔

墓参り日頃の無沙汰すみません

盆彼岸墓参は欠かすことはいない

墓地に咲く可憐な花にいやされる

墓前では愚痴はこぼさず合掌す

いずれ行く墓だ奇麗に見守ろう

八郎

穩夫

シマ子

柳弘

朝子

和子

秀夫

克己

三重子

あや子

湖風

愛論

雄々報

信子

敦子

ちえ

澄江

雅子

鈴枝

弘子

公美枝

静江

信雄

和代

智恵子

久子

まだ余裕あると墓から来たメール
川柳塔おつばこ吟社 木村あきら報

それらしく見せねばならぬ斬られ役

悩みまで流してくれる秋の月

体力は落ちても口は元気です

この先も一途に想う空の碧

白萩の枝垂れて母の忌が巡る

共白髪誓った妻は髪を染め

方言が交り合ってる旅の宿

川柳の足跡残す句碑が建つ

ふる里で幼なき日々が蘇える

茶柱で四方丸こと吉とする

吉報がベル家中をトビ跳ねる

愚痴を聞く夫の笑顔に癒やされる

和歌山三幸川柳会 玉置 当代報

長電話不老長寿の葉かも

ぐつぐつと煮込む女の長電話

ハイハイと手を拭きながら出る電話

宇宙人とはなしが弾糸電話

寝つ転がったままだと判る電話口

砂時計何度返した長電話

朝顔の蔓からみつく長電話

留守電に風鈴の私語入れておく

ふと見れば猫も一緒に昼寝中

月がふと母と重なり語り合う

雄々

ひかり

賢

よしみ

はつ恵

八重子

弘

放任

あきら

いさむ

初恵

貞月

寿々女

当代報

瑛子

美枝子

当代

登美代

みね

美子

八重子

朱夏

信子

一步

ふと向きを交るトンボの身のこなし

ふと我に返ればヴィトン買つていた

今朝の夢何の知らせとふと思ふ

ふとその先聞きたく辻の占い師

ふと洩らした口が騒動巻き起こす

人間の居ない地球をふと思ふ

ふと入る花屋の花に誘われて

樹海へはためらう道が百とある

情報に海で迷つてゐる鼓膜

地球儀で探す私の泳ぐ海

樹海から抜けて真つ赤な靴を履く

家族思いの皿がこだわる近海魚

竜宮から招待状がまだ着かぬ

蛇行していつかは海に出る野心

大海を知らぬ魚がよく跳ねる

人間のなんと微力か海の蒼

満天の星は明日の応援歌

積み残しあるから明日も頑張れる

信じてる明日へ男の太い眉

今日生きた褒美のように明日がある

ローズ川柳会 山崎 君子報

似合うネと貴方が言つたベレー帽

明日は明日今から憂うことはない

シヤレでないつむじ隠しに着るハット

ころころと帽子追いかけて花野まで

コスモスが好みに生きよと風にゆれ

昇

義雄

かずみ

宏夫

武

次根

起世子

孝子

町子

イセ

幹子

幸

章子

菜摘

碧

和子

徑子

純子

准一

保州

てる

みつ子

藍

哲子

トミエ

父さんの我慢知つてる作業帽

ピカピカと黄色い帽子かけてゆく

明日があるこれを信じて生き抜こう

良いことは出くわすとあしたが光る

古時計よあすも一緒に歩こうね

成せば成る明日を夢みるひとり言

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

遠回しわが子のように仕込む芸

釣り人のチャンス逃さぬ竿の先

いくらでもチャンスはあつたツアウト

あこがれた都会の風を知つたとき

今一度チャンスまつてる赤い靴

上役に叱咤されてる葱坊主

苦労してきたのか丸くなつた人

上役にウインクされたは横の人

人生のぎりぎりまですは九十歳

川柳若葉の会 宮崎シマ子報

歳重ね長所もだんだん減つてくる

長い夏おいしくなつた熱いお茶

長い老後やっぱりお金いりますね

真夏日の長さには五体乾ききる

長いものに逆らわないで巻かれとく

小学校先生の顔も長かった

歩きましよう大地と足のある限り

持てるのに決断力のない息子

孝一

いわゑ

武庫坊

年代

義子

君子

伸子

聖子

はるみ

恵美子

好栄

かつ子

ちよえ

博利

清泉

烈

慶子

ますみ

加津子

能子

香住

喜美子

弘直

棚ボタの金は三日も持たなんだ
持ち時間わからずもたもた生きている
あずき

川柳塔なら 坊農 柳弘報

父に似た五百羅漢に会いにゆく

師の助言ヒントとなつて今がある

子供の目いつも持つてる發明家

古い師なんのヒントもくれなんだ

ほめられてカレー作りを任せられる

会計を下戸に任せで飲む上戸

此処までは任せてと姑線を引き

父と酌み帰るハンドル嫁まかせ

思いきつて任せ二トが奮起する

脳トレへ前頭葉がすぐあくび

判子ボン私の何もかも任せ

面白いヒントをくれた土踏ます

名月や早速一句詠んでみる

砂に書く未練を波が消してゆく

案外とヒントころがる縄のれん

肩の荷が妻のヒントで軽くなる

やり直すヒントが欲しい靴のひも

野仏と一期一会を綴る旅

ノーヒント風が私に味方する

持ち前の笑顔早速友が出来る

その報い早速井戸の水枯れる

失敗をヒントに達磨起き上がる

どの星にいます母なる仏さま

シマ子

あずき

柳弘報

美はる

満作

妙

博一

弘風

章久

千梢

さと美

ふりこ

富子

六助

義雄

孝子

一風

和夫

道子

隆盛

柳弘

朝子

弥生

良一

國治

任された天も困惑する命
親指と人さし指にあるヒント
円満のヒント驚愕から学ぶ
手の平をかざすと解けて来たヒント
賽銭をはずみ丸投げする願い
夏がゆく蟬が十日で地に還る
彼岸花母も仏になりました

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

台風のようにだんじり駆け抜ける
このあたり台風それて良い所
台風の向こうにあった青い空
台風を蹴散らす父の五寸釘
台風の目について風を感じない
膝小僧破れてますとお節介
膝小僧抱いて一人のお留守番
正座して初心に返る膝小僧
ひざ立ててもう一杯とおしゃくされ
正座した膝が野心を抱いている
愛された記憶の中の父の膝
シャボン玉をつとあなたに触れて消え
新生児外気に触れて目を細め
古傷の過去には触れぬ立志伝
美しい絵画に触れて目を洗う
本心に触れなく酒をつぐ笑窪
琴線に触れてあなたと近くなる
人情に触れる場末の縄のれん

美千子
秋雄
恭昌
洋子
真理子
成子
理恵

アヤ子
静子
章司
恵勇
みつこ
ヨシ枝
喜久子
一壺
真一
重人
扶美代
敏
ちづる
志洋
一知
りつえ
ダン吉
いさお

もりもりと家庭ささえた力瘤
もりもりと食べて溜息試着室
二の腕に筋肉ついた介護役
松茸の香り食欲をそります
もりもりと実力付けていて謙虚
空想がもりもりと湧く秋の雲
草原にころり青空独り占め
ふて寝して少年父に抗議する

川柳塔きやらほく 大塚恵子報

こぼれ種美しい花ひっそりと
バーゲンにパワー貰った日もあった
うっかりと大事なテレビ見落した
近頃はやたらと母の夢を見る
デパートのバーゲンセールでつかみ取り
台風の爪痕大地引きさいた
やさしさがぐすりになっている介護
端居するうっかり宵の星になる
ビール缶空けて話の続き聞く
夜の海世間話を風が消す
聞こえない耳をじゃけんに耳掃除
軒下の風鈴の音耳すまし
孫ひ孫愛しい宝両の手に
憂いなど見せてはならぬ秋の月
灯り消し目をとじ今日の句読点
心の広い友になんでも打明ける
体温をはるかに越えた温度計

フジ
久仁子
かつみ
正子
庸佑
美代子
泰子
猿杓

春枝
てい子
雪江
晴子
清子
亜弥
晶子
ふみ
天雀
那珂子
寿々子
章江
初枝
恵子
ゆき
玲子
蘭

南大阪川柳会 吉川寿美報

石投けるよりも笑顔がよく似合う
たしかなのが見えて明日を子に譲る
世の流れ勿体ないが遠ざかる
内閣もわが家もリフォームに揺れる
愛ひらりかばちの誘う白昼夢
梨王国の誇り 一步もゆずれない
出られない生れたまちの風を抱く
デバ地下の匂いが届く町にいる
朝晩で見事にかわる町のかお
スーパーム医者にも近いまちに住み
下駄履きのまちでゆつくり生きてます
閑古鳥鳴いても住めば都なり
蜘蛛の巣のような裏町知り尽くす
昭和史の汚点拭いても洗っても
家系図を調べ親戚だった友
天平の歴史を思ふ萩の寺
三十石淀の川瀬にある歴史
戦後史を語ると祖父は生き返る
熊野古道石ひとつにもある歴史
鯛のブライド鯖立ビンと化粧塩
紅を濃くひけば孤独な顔になる
正論に角立たぬよう薄化粧
遣らずの雨女ひとりとの宵化粧
悲しみの翳りをかくす厚化粧
メイドインチャイナが化粧して届く

日枝子
やえ
すみえ
千代
瑞枝
なみ

求芽
葉子
菜月
百合子
月子
日の出
光久
楓楽
ルイ子
志華子
章久
満子
なきさ
わこ
良知
尚士
柳弘
千里
修

古希過ぎて心の化粧目指したい

五〇〇円玉貯金の夢が果てしない

缶ビール五〇〇に格上げてして残暑

五〇〇円で買う岩波と風になる

ええことがあるよう養錢五〇〇円

エクスパック500にたくす原稿紙

五〇〇円拾つて人間試される

未熟児の五〇グラムが持つ命

五百円大金だった札だった

梅干は我が家の歴史壺の中

五〇〇円小銭入れでは王様だ

サークル檸檬

吉田あずき報

華やかで淋しい秋の森の彩

あんさんも頑固ですなと馬が合い

律儀にも三度きちんと腹が減り

喫煙所牢屋みたいと言いながら

頭より指先だけで出す答

約束をいっばい持つっている十指

成るようになって私の現在地

漫才の形になってきた頑固

頑固おやじ消えていじめが威張り出す

頑固さをカバールしている目鼻だち

頑固でも謝まる時は潔い

物差しで計られたくはないのです

気負わずに生きるとしよう柿の朱

盛り場で自分の歳を思い知る

洋子

祥昭

集一

朱夏

天笑

恵子

一步

たよし

弘風

はな

悦子

希久子

たもつ

千代

哲夫

遠野

楓楽

房子

扶美代

昌紀

美籠

みつ子

光久

義子

あずき

幼いメールにだんだん落けてゆく頑固

川柳大阪

長井

善純報

いわゑ

鉄心

洛醉

福世

修

柳弘

朝子

章久

かよこ

花笑

彦太

司

美花

重人

青道

功

笑風

和

孝一

まつお

ダン吉

隆昌

芳香

美籠

紀雄

六十路過ぎしんどのい思う日が增える

しんどいがくれる金なら取りに行く

主夫をして妻のしんどさよく分かり

美人とは言えぬ女をほめあげる

妻はしんどい夫にも耐え子にも耐え

しんどいと母は言わない一言も

いずも川柳会

佐藤

治代報

鉢巻きは良策練っているつもり

ひたひたと出来た挨拶しておこう

無人駅生きたお花が活けてある

練る度に土は妥協をしてくれぬ

浅漬けをひたひたまぜる母の味

故里へ続くホームは二番線

ドキドキとスリルに燃える好奇心

渡るしかなないつり橋を渡り切る

間食が僕のカルテを覗きこむ

ひたひたと充電出来た里帰り

熟練の技仏像が息をする

一瞬のスリルに酔った観覧車

ひたひたの酒とこぼれる笑い声

ワインひたひた企みの夜のセツト

手の腹で抑えて判る練り加減

作戦を練った相手に負けられぬ

白と黒とまざり合うまで練つてゆく

ひたひたと女の秋が忍び寄る

人間にいつもうなりたい猿であり

勝弘

東吉

一步

五月

一風

善純

佳子

美江子

キミエ

桂子

靖乃

たえこ

多輝子

徳子

しげる

敬子

寿美

多喜

治代

圭詩朗

まこと

房緒

久枝

美佐子

すみこ

無人駅三十年の夢だどる

風に逢ひ風と別れていった駅
ひたひたに浸った愛に溺れそう
君とならスリル求めて綱わたり
太陽とあしたの策を練ってくる
何事もスリルがあつて挑戦し
練り上げた作戦なのに惜しかった
練るほどに光る人生苦難のみち
わたくしをこぼさぬように練り直す
まんじゅうが大きな声で呼ぶ三時
始発駅終着駅も無人駅

豊中もくせい川柳会 江見 見清報

もつと上目指す男の眼が光る
妻や子にもつと言いたいありがとう
ママさんの秘密知つてるジンフィズ
秘めごとに両手つつこむワイドショウ
いつかまた使うだろうと戦中派
人間も使い捨てだよ今の世は
秋空へ今年の夏を振り返る
努力賞歩き続けた汗光る
地球よりもつと大きな母心
少年に秘密あるらし桜貝
女には脇が甘い見抜かれる
老いを知り身を晒せない原節子
上げ底の中にマル秘の謀
もう一寸アタマ使えと言われてる

注 湖 歌 子 玲 子 蘭 水 房 子 満 江 茂 美 き み え 章 峰 文 子 ち かし 庸 佑 啓 生 石 舟 夢 知 香 子 タ ミ 慶 子 重 人 則 彦 勇 治 尚 士 早 人 比 ろ 志 寿 美 子

甘い汁吸うたならもつと欲しくなる
頼みごと大阪弁を使います
日日新た輝きたくて朝日浴び
世渡りがうまい男の軽い洒落
オブラートで本音を包み仲が良い
真つ二つに切つた秘密が喋りだす
世の中も家も女が元氣です
こころ和むもつと聴きたい童歌
もくせいの香りをはしこして帰る
泣きながらちりり女はよを見る
お茶だけで言いたいことが言えるひと
何億と稼ぐ馬にも使うムチ
家に居る美女の素顔を見てしまふ
壊れそな恋しています秋の蝶
神様も秘密のひとつくらいある
風呂敷を上手に使う亡母が居た
尼崎尾浜川柳会 田原 宏一報
空港のタラップその国が香る
豆腐屋のチリンチリンを待つお鍋
ボケ防止テーマではげむ夫婦閉居
自転車のペダルも軽く秋の風
空港へ引き返えすとアナウンス
笑いこけると涙腺までも緩みだす
羽田からバリまでドラマ二幕目
風まかせ何のテーマもない余生
テーマからはずれた話面白い

幸 雀 耕 治 巴 子 萬 的 見 清 義 義 美 智 代 佳 恵 宇 乃 子 求 芽 寅 次 郎 美 義 十 八 娘 玲 子 紀 乃 政 江 龜 代 子 好 子 耕 治 宏 一 里 江 勝 巳 靖 鬼

不揃いの野菜名乗つて安値つく
古寺をゆく菩薩の笑みに会いたくて
エアポート君の面影消えやらす
無事着地いのち刻んだアナウンス
賽銭の効き目気になる神無月
情には返すなさけのボランテア
若返りそんなテーマの本を買う
不登校錆びた自転車磨ぐ父
暮らして背に重たいペダル踏んでいる
川柳さんだ 北野 哲男報
自然体で生きて丸あるく年を取る
思い出へ誘われて行く古日記
好きな人乗せた電車が遠ざかる
しらじらと思えどお世辞には弱い
デゴイチが走つていたのも語り草
人工のゴミほど醜いものはない
旅先の恥はそのまま置いておく
玄関で無駄とも言えず待つ化粧
倅せを求めて遠い道歩き
弁舌さまたか家でもそうですか
空白がまだ埋らない好奇心
挫折する度に歩幅を広くする
一生を華には遠い割烹着
秋風の竿にはためく大家族
遠くから見る妻捨てたものでない
ジャズナイト今夜は少し派手を着る

イ サ ミ 孝 一 義 芳 美 義 五 月 正 治 江 見 美 代 子 比 ろ 志 婦 美 子 茂 山 歳 子 キ ヨ ミ 順 子 二 英 一 泉 好 文 朋 月 忠 正 和 章 子 千 代 子 哲 男 光 久 孝 一

可能性いっぱい秘めた白い画布
現実のはるか彼方にある政治
白と黒その中程で生きている

川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報

正論を歪めてしまう多数決
チャレンジにストップはないあすの夢
さらさらの雪は悩みを宿さない
さらさらと書いたおんなの果たし状
母の檄いつもさらさら草書体
思い出がさらさら消えて夜は長い
シュレッダーサラサラササと捨てられる
さらさらの水には所詮棲めぬ人
買う気などさらさらないが聞く値段
風の誘いが欲しいと思う水中花
美の誘惑弱い女の化粧品
誘惑によわいカードを持ち歩く
君ならば誘惑されてかまわない
悪友の誘いに張った予防線
恋が羽化するから蓋をするのです
今地球止まれば生きて行けますか
ストップで奮い立たせてみる意欲
無我の恋ストップなんてナンセンス
ひよっとこの顔は職業病だろう
柿の実がいびつなままに太り 秋
根性まで歪んでないと許される

美 籠
みつ子
いわゑ

登美代
富美子
小雪
保子
徑子
裕美
美子
豊太
智三
准一
翠子
和子
稚代
順子
さち子
あきこ
紀子
克子
佐一
大輪
朱夏
三男

千年後歪んでいるかなあ地球
何故に歪むか母に出す手紙
歪む身にエキスをかけに来る娘
性格の歪みリフォーム出来ません
実直な夫婦へ似ない子が育ち
砂時計さらさらと絶つ絆

岸和田川柳会 土橋 房枝報

外泊が嬉しい母と膳にいる
あんた逝きわたしや後は追いません
2DKゴミとあんたも共に掃き
肩がこるやと終ったクラシック
いつまでもうちのあんたでいて欲しい
ゴミ出しはあんたの役と妻が決め
あんたなんか大嫌いでも共白髪
上司ふとあんたと呼んで来た不安
邪心ない笑顔に今日も癒される
病む妻が口ずさんでる千の風
律儀だなあ虫は季節の通り鳴き
甘言に誘われ落ちる欲の虫
古希過ぎてジーンズはける腹になり
今一番若いと思う時うれし
水やりの手間が省けた俄雨
寝ない子も聞くこおろぎの子守歌
二世帯の上から洩れるモーツァルト
五十年妻クラシック俺演歌
シューベルト静かに聞いて歯の治療

伶
輝子
和香
三喜夫
英子
緑良
ダン吉
ふみよ
洋
植代
俊昭
幸子
和美
蛙城
珠子
笑司
淳風
守
泰弘
昭
東吉
香代
弘子
岩夫
仁緑

モーツァルト聞かせた子だが普通の子
咳一つみんな振り向くクラシック

富 柳 会 池 森子報

地球儀はCO2に濡れかけ
チャンピオン出て来る釘を打ち続け
しつかりと基礎打っておく幼年期
打ち寄せる老いの波とも妥協する
ゴスベルも読経も腹からの祈り
準備万端お嫁サンバを聞いている
聞き流すコツ息災のマイホーム
猫背でも筋を通して生きた父
真実が心の中でもがいてる
溺れるならきれいな花のどまん中
溺れないように泳いでいる浮き世
風船に吹き込んだのは青い息
各論に炙り出された覇者の影
句の中で転がされてる人間味
赤い爪落として母になる備え
去る人は追わぬ都会のアスファルト
赤トンボ梅雨明け十日遊びどき
茄子の馬皆乗れますとこ一緒に
はつきりと言えば崩れる砂の城
庭育ちのトマトが威張るサラダ鉢
囁きに溺れてみよう絵ろうそく
夜逃げする梯子二階に備えとく
まだまたと打たぬシュートのいらだちか

和子
七朗
千華
伸雄
淳司
佳子
よしみ
高鷲
登彦
隆彦
鐘造
恵子
ひろし
未知
澄子
奏子
寿之
彦次
一慧
深雪
アキ
晴美
糺

相槌をこまめに打っていい笑顔

夾竹桃あの八月は死んでいった

生かされて花の萎れるように往き

人間を苦もなく含む肝つ玉

誕生日来てはしくありほしくなし

恋文にふくめ沸き立つ心の絵

見えよりもハートで勝負無農薬

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

お守は君です一緒に進みます

幾百のすすき手を振る通過駅

夏の夜の一瞬の夢月下美人

傍目にはたやすく出来る鮎細工

仕切り線一瞬の技士俵はう

食が進んでも喜ぶ母でした

若さゆえ大志で村を去ると言う

平和です米がたやすく手に入る

簡単に妻が他人になる構え

簡単に行けば苦勞のなる政治

七十路に時計の針が速すぎる

亡母さんが一瞬見えた消えた夢

鍵ひとつ持たぬ暮らしにすぐ慣れる

掌を合わす一瞬真人間になる

小さな石にも転んだ酒の足

雑踏で一瞬は風の風にあう

一粒とてぞうたやすくは出来ませぬ
佳い日旅立ち鈍行列車と駅弁と

紅紫朗

ダン吉

伸雄

欣之

壽峰

武人

森子

和香子

洋子

美鈴

成柳

一呑

順風

銀波

ふさゑ

花匠

雅城

愁女

井蛙

黙人

岳水

花峯

慕情

五楽庵

翠洋会

谷口

義報

夕闇に窓の灯恋し赴任先

新幹線窓越し別れ出来ぬまま

入るなり窓の外見る旅の宿

ゴンドラで窓拭くまるで軽業師

いざと言う時の味方がまだ見つからず

風吹いてやつと出口が見えました

手さぐりの人生やつと峠越え

どの道を行けばよいのか霧の中

長崎の雨が好きです亡夫の故郷

しつとりの手練手管にだまされる

しつとりと歩く和服の母想う

秋雨のしつとり降る日句が溢れ

明日ひらく蕾しつとり夢を抱く

お転婆も今日はしつとり和服着て

星一つ流れむなしさつりの出す

朝令暮改八十路おちおち染しめず

平成の未来図見据えた風を読む

仲の良い家族ちらしへ混ぜ合わせ

国会の討論歳に容赦ない

せめてものお礼返しという看護

老々介護杖がペアで並んでる

アカンベエして見えますピカソの絵

自分なりの花を咲かせている余生

思い切り楽しませよう日本晴
二度の職釣り仲間にも頼んどく

さてと立上る秋刀魚を焼くために

躁の時まだ見ぬ日々へ腕まくり

戦を知り平和を知った林住期

新しい靴が旅行の足を噛む

旅は夢静かに暮らす老い二人

おでん煮て妻は日帰り旅行する

定年後旅を夢見た夫は逝き

旅立ちの顔考えて夜が更ける

旅よりもうかがいいよと負けおしみ

一人旅夫も子供も忘れさり

いやらしい形している白い桃

いやらしい話で笑うのもこの世

獣になつていやらしい事をする

いやらしい逃避で二人口つぐむ

大臣の自宅事務所はいやらしい

盛装してブランド自慢いやらしい

熱燗でサンマ一匹平らげる

慣れたのかゴーヤの苦味薄くなる

老人と言えど味覚は元気です

よく飲むが味覚は今も確かです

初サンマ柚子の香りで味覚よし

古里の味覚届ける母もなし

なかなかの味覚研究家アリとハチ

松茸の味覚忘れた訳じゃない
五十年妻の味覚にならされる

義

昭

和枝

喜美子

睦子

日出子

萩江

秋草

由紀子

完司

きみ子

螢

和子

瑞子

みちる

賀寿恵

京子

風露

泰輔

美津恵

勝誉

次男

ひろこ

悠子

一人では法螺がふけない一人部屋
まだ一人立つて歩ける医者に行く
雨の中ひとり降ろした路線バス
一人ずつレッドカードが降ってくる
いつもより重たい夏を漕ぐ一人
一人では出来ぬ喧嘩がまだ出来る
一人でも生きる覚悟をしておけよ
日本海相手に一人魚釣る

高槻川柳サークル卯の花 釜野 公子報

しがらみを切つて自分を取り戻す
涙腺がやはり緩んだ義理の数珠
過ぎた事と涼しい顔で美女は言う
トンネルの出口で出会う秋の風
夜遊びは古稀でぶつくり止めに
ぶつくりと過去を断ち切る曼珠沙華
幼な児の瞳涼しく空映す
ぶつくりと途絶えた友よ星になる
人が向えば真面目になる鏡
百選の滝の冷氣が引き止める
ちぢみのシャツステコでした父の夏
失恋の日から日記は白いまま
義理がたい人だと聞いて気を許す
義父さんと呼ばれうれしい嫁一号
台形の面積小学校でよみがえる
縁台で腕をまくったへば将棋
人間のために蚤は糸吐かぬ

重忠
よしえ
玲子
石花菜
康子
龍枝
鬼一
照彦

昭
郁夫
稲子
恵美子
かずお
一央
慶子
高栄
孝作
宏章
砂輝守
石舟
節子
草木
隆充
とし子
鮎弘

馬の足なれども俺の晴れ舞台
喪を脱いでもう面影は追いかけぬ
行列をぶつくり横切る救急車
子もやがて等身大の嘘をつく
踏み台になってあげたい嫁と住む
頭髮も財布も年中涼しおす
悔しいが台本通り老いてゆく
処暑白露彼岸もむなくなる残暑
風格を樺の台が語りつぐ
飛躍した意見ざわつく会議室
ラップした過去も時効になつてくる
里の駅花一輪が涼さそう
萩こぼれ酒もたばこも止めました

すみよし川柳会

岩崎

公誠報

過去はよし未来みすえて生きてゆく
お小言が通りすぎるのじつと待つ
のど元の熱さ過ぎててもまだ熱い
大器かともうに婚期はすぎている
焦り過ぎ一人相撲で終わつて
信じてはもらえぬ過ぎた日の恋路
何事も過ぎてしまえば過去のこと
かき氷喉もと過ぎて汗止まる
近頃は過ぎ行く日々が早すぎて
過ぎ去った昨日を追わぬ自分褒め
言い過ぎた口が今更引つ込ます
喉元を過ぎてても妻はまた怒る

尚士
晴子
半蔵門
雅文
典子
美稲
美義
求芽
祐作
庸佑
葉子
義一
律子

伸子
裕之
明江
萌
日の出
舞夢
幸子
定子
ヒロ
篤子
かりん
昌紀

過ぎたことにしとく親から借りた金
出来すぎた姑にはいつも尻尾巻き
過ぎた日を時々思う柱キズ
出来すぎた女房が居て影薄い
言いすぎる口に自分でガムテープ
丁寧過ぎると嫌味だと思ふ

城北川柳会

伊達 郁夫報

ホラ一つ吹けない私意気地なし
人形の眼が一人つ子にぬれる
ラッパの音今日の機嫌が分かります
義理堅く過疎の村にも曼珠沙華
コスモスの迷路でまよい元氣出る
冷淡な氣になり切れぬから困る
のし袋雀の涙義理と言う
ノンキアアあくまで通す意地がある
堪えて咲く時も違わず彼岸花
許すとは言わぬがビール冷えている
逃げ込める隙間残しておくポッケ
大川でのボート遊びが夢に出る
平がなでさらさらと書く嘘もある
老人を監視に使う通学路
赤とんぼ来すにコスモス淋しげな
自己主張ころころ変わる老人会
帆を下ろす男の顔が丸くなる
内助役などはそろそろ飽きてきた
先生が好きで叱られ役してる

桃花
りつえ
遠野
半銭
蕉子
公誠

勝弘
求芽
典子
正
容子
あやめ
高栄
昭子
福世
郁夫
昭
達子
萬的
章久
美智子
千歩
典子
修

役どころ決めてかかつて外される

脇役に徹した妻の助演賞

冷やかに焼棒杭を吹いてみる

しみじみと語れば愛が深くなる

残り火を吹いて命の火を手繰る

お早うの笑顔が揃う丸い膳

携帯の中から孫の風が吹く

意気と意地男が燃えるマグロ船

宇宙から見れば地球は難波船

喧嘩した夫の寝顔ふけました

お互いに添え木の役をして夫婦

川柳塔まつえ吟社

三島

三島

豊作へ心も和む収穫祭

笛太鼓聞えて秋の陽が和む

和やかな亡母の笑顔がそばにいる

大空で天女と和む夢だった

話上手人引きつけて座が和む

むらくも川柳会

毛利

こおろぎも秋の最中大合唱

こおろぎがついて来そうな散歩道

飛びはねるこおろぎ稚児が追っかける

こおろぎが秋の訪れ連れてくる

こおろぎが仲間集めて大合奏

愛なんてどこから出るの美しく

女にもおんなの戦さ種を播く

人生は一度つきりと盃を挙げ

夕焼けの下で静かに呼吸する

ただよし

倫子

順三

集一

柳弘

ひさ乃

叡子

朝子

一步

とし子

志華子

三島

豊作へ心も和む収穫祭

笛太鼓聞えて秋の陽が和む

和やかな亡母の笑顔がそばにいる

大空で天女と和む夢だった

話上手人引きつけて座が和む

むらくも川柳会

毛利

こおろぎも秋の最中大合唱

こおろぎがついて来そうな散歩道

飛びはねるこおろぎ稚児が追っかける

こおろぎが秋の訪れ連れてくる

こおろぎが仲間集めて大合奏

愛なんてどこから出るの美しく

女にもおんなの戦さ種を播く

人生は一度つきりと盃を挙げ

夕焼けの下で静かに呼吸する

博子

多賀子

たけし

桂子

紫晃

日出子

政子

雪代

喜美子

邦代

柳歩

ちえこ

静恵

幸子

茂美

注湖

幸報

彰

美保

美恵子

幸

定子

蘭水

瑞枝

俊夫

秀夫

体重計もつと減食せよと言ひ

送り火を出して今年の夏もゆく

国民のためにあなたは何したの

追伸に本音一言混ぜておく

鏡よく見た日は遠く遠くなり

何不自由ない暮らしにも愚痴がある

貧しさで耐えて一票祈りたい

四世代時々自分見つけてる

今もおテロがやまないかなしさよ

岩美川柳会

石谷美恵子報

美しく見たい景色に距離をおく

恋人を好みの色に染め直す

丸い輪が好きで私に彩がない

菊作り色あざやかに酔う日暮れ

桃色の白衣の天使夢に見る

うろうろとこの世の出口探している

うろうろと私を何処か連れてって

うろうろと何も分からぬまま老いる

山家にこそ岩魚が棲んでいるのかい

岩雲に乗せてヒト科の愚を棄てる

夫婦岩どちらか仮面つけている

太るでも痩せるでもなく巨大岩

男なら登ってこいと屏風岩

南島岩だ島だと国境い

しめ縄でつながれている夫婦岩

源線はこんな小さな岩清水

嘉寿子

愛子

信夫

義良

秀子

恵美子

ます美

喜美

清子

清帆

孝男

一京

稔

幸安

完司

螢

圭一郎

はるお

茶子

一瑠

一粋

重忠

よしえ

蟹郎

公乃

真夜中のピーポー遠くへ行く安堵
まよなかに初恋のゆめ濡れ枕
深夜便モントタンに酔う久しぶり
コラボレーション徘徊族と深夜族
夜深く壺の小銭を数えてる
人間の脆さを包み込む深夜
ほう 鱈の棒のまんまを見かけない
棒引きにすると難題頼まれる
世渡りに天秤棒が放せない
指揮棒を持てば絵になる燕尾服
大臣の椅子ささえ金で棒にある
しあわせは鬼に金棒友に医者
生まれ来て九十五年の日が流れ

弘風 日生子 茜 勇太朗 じゅんこ 柳弘 たたよし 庸佑 集一 かすみ 賢子 薰 一笑

とし子 忠央 寿男 寅幸 博泉 朝子 鈍甲 高栄 さち子 敬 麗 仁清 一風

美人はきつとヒカソノモデルにはならぬ
別荘の隣で格差考える
台風に幾度も耐えた夫婦松

大原川柳社

ふる里に遠い日がある風がある
遠くから見守るだけの祖母の愛
全快へ空の青さが目にしみる
傾いた脳裡ひよっこり嵐吹く
転ぶなと言われて老いの足底う
肩書きを外すと世間広くなり
この先は神仏の愛にゆだねます
ゴミばかり増える過疎にも大家族

山本 工

弘一
修
洋
玉惠報
あすなる
たづ子
みささる
美佐子
喜美子
悦子
辰江
妻子

境遇に負けて悲しい自爆テロ
裏方の苦勞吹きとぶありがとう
甘えない境遇変える強い意志
忘年会幹事裏方兼ねている
薔薇の目でゲストの欠伸読む空
裏方に徹して凡夫美しい
天真爛漫きつと境遇よい証拠
裏方は手腕を試す幕がない
境遇に耐える女の紅を引く
追伸の短い文にある想い
大きな字短い便り暖かく
無駄口のようにヒントは親心
聴衆を呑んでかかっているゲスト

東茂富年洞令俣蛙和珠桜和と
吉平美子庵子子城香子琴美み

川柳塔おとし

福田 登美報

したたかさそつと隠して生きていく
したたかならねばこの世渡れない
懐の中したたかな血が騒ぐ
大脳に絞る答えはひとつだけ
逆境は力と知恵の絞りどこ
親の腰絞ってみて骨髄
退職でゆくり旅の友ができ
一人旅弁当の腹の虫
言い過ぎた言葉を旅に許される
五大陸すべてを歩き旅したい
産声をしたたかに上げ歓喜湧く

八尾市民川柳会

富西 弥生報

高齢者医療制度に燃えて立つ
あつさと母には負けておくけんか
秋の夜長静かに燃える手話の恋
迷うたらこつこつと亡母の声
地球には住んでおれぬと宇宙人
ケータイの中に娘の地球あり
母の胸に帰った時は小さい箱
昨日まで軽うに跳べた水たまり
まっ白な握手になつていく笑顔
踊りからさめて踊りの輪の中に
路地裏に聞えて来ない子らの声
地球儀のいづれどこかがキナ臭い

酔わせて下さいと残り火が燃える
秋野菜ふつつ家庭を温める
弥生 美美代

堺川柳会

河内 月子報

いま下手に動くのにされそうだ
百歳になつても愛の歌うたう
百歳になつても淡い恋したい
貸す方も悪いとお灸すえられる
ありがとう百度言うてもちびらない
初孫のわるさ百態アルバムに
百歳にお尋ねしたい生き心地
葬送は百点つけて送ります
百八十度違つた人と結ばれた
口下手の挨拶すぐに終わらない
寝たきりで百まで生きるのは御免
愛おしい寝息に貸した腕枕
高級車乗つてあちこち当てまくる
百たき受けたおかげで今がある
この夏は百葉箱も茹であがる
ばあちゃん力無いいけど知恵は貸す
喧嘩した訳はケータイ貸してから
時という大事なもの貸しません
かお貸してかおつぶされてかおたす
下手な嘘ついて本音がすぐばれる
ジャンケン是最初の子で負けける
百葉にまざる笑顔のある看護
おじいちゃんばくの年玉貸したら
か 弥生 美美代

柳 伸 雄 花 雄 螢 ヒロ子 道子 小生 清子 以和万津 真一 登美 紀雄 栄一 朝子 浩三 加央里 賢子 一風 欣之 定男 寿鶴 柳伸

読めぬ字は下手だと思ふことにする
貸せば神貸さねば鬼と言われそう
百姓の会議は畦で盛り上り
結婚を二度つれてきた青い鳥
百歳の生き方上手見習おう
簡単に貸して下さるのも怖い
スマイルで下手な踊りをカパーする

千代 時雄 像山 和夫 八千代 梓 月子

第1回触光時事川柳誌上大会

テーマ「2007」

選者 浪越靖政(北海道 高瀬霜石(青森県)
大友逸星(宮城県) 瀧 正治(神奈
川県) 田口麦彦(熊本県)

◎作品 5句(未発表に限る)

◎締切 1月31日 会費10000円

◎投稿先 〒038 青森市富田2-7-43
野沢方 川柳触光舎まで

◎賞 大賞1名 川上三太郎直筆色紙(額入り)
他 特選賞・秀句賞など

◎発表 「触光」7号(2008年6月)

あかつき川柳会

とき 1月11日(金) 14時から
会場 住まいの情報センター(大阪くらしの今
昔館「天神橋六丁目駅」3番出口

兼題 階段・力・偶然・時事吟
投句先 〒599 032 阪南市箱作1586-14
1102 森村 美花

第22回 国民文化祭・とくしま2007(10月28日)

本年度国民文化祭は徳島県教育会館で開催された。事前投句の高校・一般の部は2618名、ジュニアの部は6647名、当日参加は432名。大会各賞は次の通り。

◎高校・一般の部

文部科学大臣賞

森の絵を飾って森と同化する

秋田県 大石 一粹

国民文化祭実行委員会会長賞

人間と妥協はしない渦の芯

広島県 角本 華峰

徳島県知事賞

やわらかな眉で嫁いできましたの

滋賀県 小梶 忠雄

第22回国民文化祭徳島県実行委員会会長賞

はじめての名刺未来へ帆を上げる

東京都 齋藤由紀子

徳島県教育委員会教育長賞

産道を白いノットが降りてくる

栃木県 大橋 芳明

徳島市長賞

何かある若い一人の 秋遍路

熊本県 安永 理石

第22回国民文化祭徳島市実行委員会会長賞

オアシスもシェルターもある子供部屋

栃木県 大橋 芳明

徳島市教育委員会教育長賞

人類の未来を問うている写経

秋田県 猿田 寒坊

(社)全日本川柳協会会長賞

背徳の森で仏とすれちがう

香川県 石田 静子

徳島県川柳作家連盟会長賞

じつとしておれぬとみんな来てくれる

滋賀県 小梶 忠雄

◎小中学生の部

文部科学大臣賞

みらいってなんぞそんなにおおきいの

広島県 川口 真穂(小2)

国民文化祭実行委員会会長賞

おはようで朝がほんとにきた感じ

岡山県 田邊 俊介(小6)

徳島県知事賞

すすきゆれたぬきが夢をとどけます

広島県 烏潟 愛美(小6)

第22回国民文化祭徳島県実行委員会会長賞

ぼくの夢人を助ける人になる

山口県 山根 勇人(小4)

徳島県教育委員会教育長賞

未来つてにじのむこうにあるのかな

徳島県 宮城 佑太(小3)

徳島市長賞

たぬき寝入り母にだかれてはとする

福井県 久保 遥香(小1)

第22回国民文化祭徳島市実行委員会会長賞

藍色は阿波を色どる青色よ

徳島県 友江里圭子(小5)

徳島市教育委員会教育長賞

太陽が君の笑顔と重なった

山口県 柴田 真帆(小2)

(社)全日本川柳協会会長賞

たぬきの絵上手にかけたうれしいな

徳島県 上田 佳那(小3)

徳島県川柳作家連盟会長賞

金閣寺はくもあんなに光りたい

徳島県 澤本 敬登(小6)

柳界展望

○第57回岸和田市民川柳大会は10月21日、岸和田市立福祉センターにて開催。参加66名。同人の天位。

時々はアメリカ村を見て廻る 川端 一步

みそ汁のお代り自由い宿だ 吉岡 修

丹頂の愛のダンスは二羽で舞う 北野 哲男

○85回毎日京都文芸川柳大会は10月21日、毎日新聞社京都支局にて開催、同人秀

澄んだ目の子の直感を信じよう 榎本 宏子

○第31回鳥取県川柳大会は10月21日開催。倉吉市上井公民館にて参加197名。同人

の天位は次の通り。

投げ返す球は真綿を巻いておく 福西 茶子

稲刈りがすむと遊んでくれた母 政岡日枝子

意に添わぬ天命ならば叩き出す 福西 茶子

妻や子が凭れてくれる壁 河童 谷口 義

○第15回相生市もみじまつり川柳大会は10月21日、相生市福祉会館で開催された。本社関係の成績は次の通り。

相生市長賞 山岡富美子
まだ夢がときどき疼く土路まです 山岡富美子
また明日なんときれないな 嘘だらう 両川 無限
相生文化協会賞 醉生夢死悟った振りをしているが 三宅 保州
総合順位6位 海老池 洋
13位 両川無限・16位 山岡富美子
○第四回中村富二賞(新作十句)に107名が応募、本社関係の入選者は次の通り。

岸本 宏章

なる

○第40回吹田市民川柳大会は10月28日、吹田メイシアターで121名の参加により開催された。同人の表彰句。

へ吹田市文化団体協議会会賞

残り火へペンクを少し混ぜている 富田 美義

○10月19日付読売新聞「編集手帳」欄に、子をつた親の気持を推しはかる次の句が引用された。

湯ざめするまでお前と話を夢に来よ 麻生路郎

また10月25日付同欄にも次の句が引用された。

人の世や嗚呼にはじまる 廣辞苑 橘高 薫風

○10月21日第31回鳥取県川柳大会出席のため、西出楓

常任理事他5名倉吉行。

○10月28日国民文化祭(徳島)に西出楓常任理事と板尾岳人・前たもつ相談役他

5名出席。

○高瀬霜石氏(理事・弘前市)川柳研究のバドル欄を11月号から担当。

▽訂正とお詫び△

○11月号表2面、お知らせ欄、本社会会一月十日(月)↓

一月七日(月)

○11月号85頁中段1行目、岐阜から↓岐阜、愛知から

87頁下段18行目、アホらし

て見ちゃおられない新所帯↓

アホらして見ちゃおられない新所帯。125頁新人平島

美智子↓平嶋美智子。

▽新誌友紹介△

福岡県 林 貞樹

紹介者 岩佐ダン吉

大阪市 田中 滋郎

紹介者 前たもつ

大阪市 中村十八娘

紹介者 江見 見清

常任理事会 10月22日、出席者16名 ①13回川柳塔まつりの反省・同人総会・記念句会・懇親宴についてそれぞれ反省 ②今期役割分

担について ③定例確認事項 等②懸案事項の確認と優先
 項―各地川柳大会の状況・ 審議事項の決定―主幹理事
 塔誌残数確認 ④各部報告 長の選挙権拡大の件他③定
 事項 ⑤その他―部長会を 例確認事項④各部報告事項
 開き横の連絡をとる。 ⑤その他 次回12月7日(金)

常任理事会 11月7日、出
 席者17名 ①各地川柳会代
 表者会(20年2月16日予定) 〇第3回岩井三窓さんを開
 内容について―議題検討 む会―20年2月15日(金)1時
 からアビオ大阪5F錦の間

身近な「怒り」の川柳コンクール

公共正義の立場から感じるいきどおり、
 身の回りの出来事に対する明るい怒りを
 川柳にして下さい。

締 切 り 1月31日

審査委員長 木津川 計

投句用絵馬 1枚400円(切手付) 2枚セ
 ット 600円(2枚は切手付)

大賞一句(10万円と賞品) 他賞多数

発 表 3月14日

(HP・入賞者は本人直接)
 お問い合わせ(主催)

〒678 0239 赤穂市加里屋68―9

赤穂商工会議所内

TEL 0791―43―2727

お 知 ら せ

10月22日の常任理事会で、役割分担が次の通り決定
 しましたのでお知らせします(太字は部長)

総務部	村上 玄也	鴨谷瑠美子
企画事業部	井伊 東吉	鴨谷瑠美子
編集部	山本希久子	穴吹 尚士
句会部	長浜 美籠	河内 月子
同人・誌友部	西内 朋月	穴吹 尚士
渉外部	坊農 柳弘	河内 月子
会計部	鶴田 遠野	籠島 恵子
発送部	川端 一步	
事務局	鶴田 遠野	

会費6000円、お申込み
 上野楽生(072-271
 6754) 1月31日まで。

20年1月の本社句会は7日(月)
 です。午後1時開場・2時締切

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	14日(金)午後2時締切り 幅・呼ぶ・「シリア(折句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
岸和田 川柳会	15日(土)午後2時締切り 安堵・入れる・うんざり クリスマス	岸和田市福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
和歌山 三幸柳会	15日(土)午後1時から 世話・かくれんぼ・語る	勤労者総合センター 4F会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
川柳 ねやがわ	16日(日)午後1時半締切り 検査・苦心・叩く・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	16日(日)午後2時15分締切り 台所・トリック	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	16日(日)午後1時半締切り 恥かしい・動き・謎	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時半締切り 消す・期待・まさか・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
南大阪 川柳会	17日(月)午後6時から なめる・仕事・あくせく そっと	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳塔 みぞくち	17日(月)午後7時半から 目的・今年の出来事・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳 さんだ	18日(火)午後1時より 拍手・箱・プレゼント・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
高槻川柳 サークル 卯の花	20日(木)午後1時半締切り 生温い・過去・ゆったり・師 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-0826 高槻市寿町3-28-13 神野節子
東大阪市 川柳同好会	22日(土)午後6時から さむい・急ぐ・揃う・声	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市民柳会	23日(日)午後2時締切り ワイン・足・忘れる 「くしゃくしゃ」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
京都 塔の会	24日(月)午後2時締切り あれこれ・走る・無用	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
川柳クラブ わたの花	28日(金)午前9時半から 野心・偲ぶ・ゴール・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

12月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
城北 川柳会	1日(土)午後1時開場 劇・だるい・とんとん・自由吟	旭区老人福祉センター3F 地下鉄千林大宮駅3番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富柳会	1日(土)午後2時締切り 半額・その他・自由吟	富田林中央公民館(近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉 川柳会	1日(土)午後2時締切り 酒・合点・飛ぶ	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 唐津	3日(月)午後1時半から 餅・セーター・こだわる	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
川柳塔 な	6日(木)午後1時から 納める・街・注文	奈良市立中部公民館4F(近鉄奈良駅④出口歩5分) 〒639-0251 香芝市逢坂2-720-20 大内朝子
尼崎 いくしま	7日(金)午後2時締切り 終る・越える・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川柳塔 打吹	8日(土)午後2時締切り 渦・許す・立つ	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳塔 まつえ	8日(土)午後2時締切り ハガキ・蟹・喋る・急ぐ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島崧丘
川柳塔 みちのく	8日(土)午後5時半締切り メール・ゆがむ・ぐずぐず	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
八尾市民 川柳会	9日(日)午後1時から 掃除・しっかり・契る・雑詠	山本コミュニティセンター3F 学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま	9日(日)午後2時締切り 一方・心・アンカー・「また」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川柳 ふうもん 吟社	9日(日)没句川柳供養大会 サイコロ・東(たば)・勝ち組・命日 自分史・そして冬・裏技・敗者復活吟	全労済ビル(詳細11月号107頁) 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
西宮北口 川柳会	10日(月)午後1時から 赤・煙・鳴る・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
尼崎 尾浜 川柳会	11日(火)午後2時締切り 毛布・治る・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川柳 同好会	11日(火)午後1時から 中身・壁・寒い	豊中市立鯉池公民館 阪急・モノレール 鯉池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼

編集後記

☆今月号にはユーモア句を特集しました。18年から廻ること三年の塔誌から編集部員がそれぞれ集めた、たくさんの方の中から、朱夏

さんに百句を選んでいただきました。良質のユーモア句ばかりです。駄洒落でなく思わずにやりとする句、上品な笑いを誘う句等ゆっくり味わって下さい。

☆また新企画として裏表紙にオニザキコーポレーションの協賛により「こま」をテーマに川柳を募集しています。健康に欠かせぬ身近な存在の「こま」がテーマです。裏表紙をご覧の上お願ひ致します。

☆いよいよ一年の締めくくりの月となりました。

編集部としては、どんな

に注意深く見たつもりでも校正の見落としがあり、活字になってから、悔やみ切れぬ思いをした一年でした。新年度からは、また気を引き締めて頑張らねばと反省の思いを新たにしています。

☆社会面では、索漠としたニュースばかりの一年でしたが、川柳塔にとってはそれほど悪い年ではありません。今年の川柳塔まつりにはたくさんの方の参加があり、盛会裡に終わることができましたし、誌友拡大運動も軌道に乗りはじめました。読者の裾野を広げる運動は同人の皆様のご協力により、一歩ずつ前進、成果をあげつつあります。

☆10月号から新たに新誌友の方の氏名を紹介者と共に掲載しています。これからもよろしくお願ひ致します。

(希)

ひとこと

ひまわり

柳歴はいつか四十数年になる。大八・漢介・薫風・千代・智子・また「展望」では新子・夢草の諸先生方が居られ、私は心底川柳に魅せられ全力で作句していた。

今は廃止になった夜行列車「だいせん号」に乗って、島根から本社を始め広島、西宮、東京、和歌山、四国、青森と何処でも出かけたものである。たくさんの方たちに出逢い本当に幸せだった。

『展望』句会の時、時実新子先生に敢えて嫌いな花をお聞きしたことがある。先生は即座に「ひまわりが嫌い」と言われた。あの太陽に向かって咲き誇る大輪のひまわりを、太陽の如き新子先生は嫌い！と言われたのだ。そのお心の中に何があつたのだろうか……。

新子先生は「展望」を去られ、そしてあの世へと旅立たれてしまった。多くの師ももう居られぬ。川柳への情熱も失せ、情性のままの私が居るだけ。(松本文子)

○編集部での私は、主として水煙抄や各地柳壇の校正を担当しています。毎月、繰り返し読んでいます。読者としては、川柳塔欄を真つ先に読みます。好ましい句に出会って、作者のお人柄を想うこともあります。

○先月は10月号掲載同人吟の「秀句鑑賞」をさせて頂き、緊張感一杯で何度も読み返しました。また今月号の「ユーモア百句」選定の

下準備で、06年の12ヶ月分の川柳塔欄を通読しました。これほど集中して川柳を読んだのは久しぶりでした。大きな収穫を頂きました。

○初心の頃に、穿ち、滑稽、軽味を、川柳の三要素と教えられました。しかし今回の熟読で、人間のその生活をよくよく見詰めていないければならない事、三要素はその観察があつてはじめて生きているものである事を、改めて気付かされました。

土の匂いがする生活があり、都会には世の中の不条理を憂う社会派の句があります。また、老いながらも夢を捨てない、希望の句が各地に沢山あります。○路郎師の「川柳は人間陶治の詩である」という言葉の、その心がすこし理解できて来た気がします。(尚) 陶冶：生まれついた性質や才能を鍛えて練り上げること。

(大辞林から)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(2月号)」

地名

都府
道市
県
姓
雅
号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「火」 (12月15日締切)

2月号発表

西口いわゑ 選 — 共選 — 鈴木 公弘 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
県府道

姓
雅
号

地名

市都
県府道

姓
雅
号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者	☐ ☐
	〒 —	 		年 年
	月から半年 月から一年 5000円 9800円 該当の方に○をつけて下さい			

〒543-0052

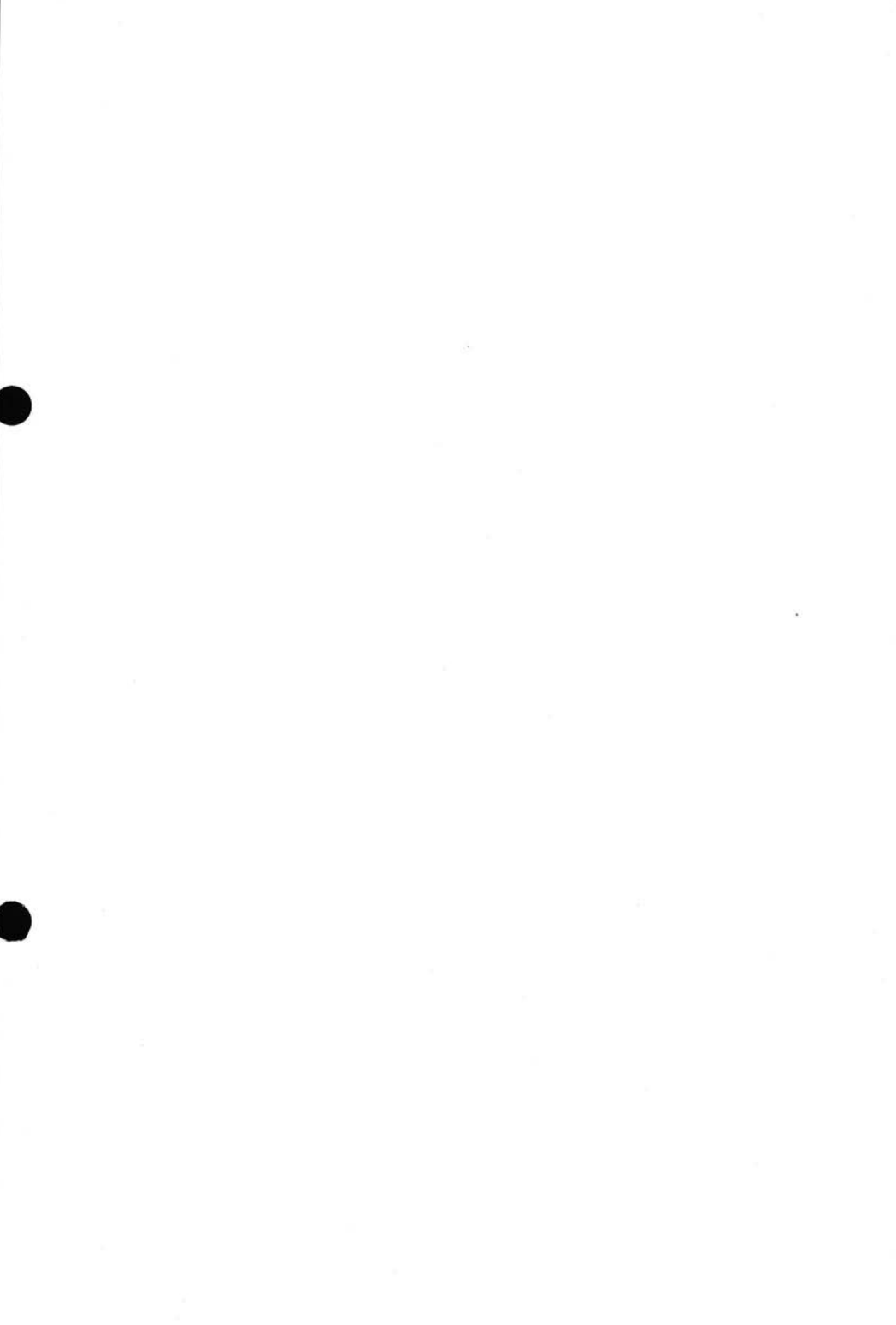
川柳塔社

(電話 06-6779-3490)

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

振替 00980141298479

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい



作品募集

2月号発表 (12月15日締切)

川柳塔 (8句)	河内天笑選
水煙抄 (8句)	西出楓選
愛染帖 (3句)	新家完司選
檸檬抄「火」 (2句)	鈴木公弘共選
西口いわゑ	
餅	
「セーター」	
「こだわる」	
高森青戸田鶴選	
森茜(あかね)	
高橋宏臣選	
初歩教室「鬼」 (3句)	三宅保州担当

3月号

檸檬抄「欠ける」

一路集「騒ぐ」「コント」

「卒業」

初歩教室「パン」

本社12月句会

とき 12月7日(金) 午後1時開場・2時締切り

開催時間、締切り時間に注意下さい。

ところ アウィーナ大阪 4階 金剛

天王寺区石ケ辻町19-12 電06・6772・1441

おはなし

兼題「びつたり」

席題「」

会費 1000円

投句料 500円 (各題2句以内)

河内天笑選

穴吹尚士選

山本義子選

岩崎公誠選

土橋房枝選

西内朋月選

太田昭選

本社1月句会

7日(月) 午後1時から

兼題「そして」「男」「愉快」

「ダブル」「始発」

第26年度 夜市川柳募集

第7回「つくる」日野愿選

ハガキに3句 12月末日締切

投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3

河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにご利用いたします。

定価 八百円 (送料84円)

半年分 五千円 (送料共)

一年分 九千八百円 (同)

二〇〇七年(平成十九年)十二月一日発行

発行人 河内権治

編集人 山本希久子

印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一四一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(〇六)六七九一三四九〇番

振替〇〇九八〇一四二九八四七九番

川柳募集

「ごま」にまつわる
あなたならではの
一句を募集します。

・兼題

「ごま」川柳塔社主幹 河内天笑 選

・応募要領

郵便ハガキに2句、郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記してください。

入選20句、準特選2句、特選1句に賞品。

・発表

本紙4月号にて発表いたします。

・締切り

2008年1月31日(当日消印有効)

・投句先

〒543-0052 大阪市天王寺区

大道1丁目14番17号 花野ビル201号室

川柳塔社 ゴマ川柳係 宛

手作りの味わいに
こだわり続けて五十余年

オニザキの

すりごま



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) 6771-4861(代)